

515

127

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



斗2525

高評

東洋書局
東京
甲寅



幽芳全集

第十四卷



5/5-127。

この小説は大正九年から十二年にかけ、婦人
書報に掲載されたものであるが、私自身として
は多少満足を感じずる作品である。但し私の構想
の半ばに達したまで、或事情のため完結を急
いで了つたので、別に他日の機会を待ち、この續
篇の如きものを二部小説として出したいと思
つて居る。

著者

幽芳全集第十四卷目次

戀を裏切る女

趣味の友……………	三
漲ぎる血潮……………	一四
大澤の池……………	二四
少年勅使河原……………	三三
實の宿……………	四四
ひさの家……………	五九
實と眞佐子……………	六六
菊花壇……………	七三
李枝子の手紙……………	八七
目次……………	一

目次

感激の瞬間	七
李枝子	一一
暗い影	一八
寢臺に近く	二六
李枝子と實	二七
従兄妹同志の對話	二八
病院にて	三五
實の良	一六〇
誓ひ	一六一
悲しい影	一七六
重俊と宗三郎	一八四
池の畔	一九七
華やかな生活へ	二二四
彼女等二人	三三一

告白	三九
眞佐子の不安	四二
千葉の宿	四五
宗三郎から	五三
密會	五七
珈琲店	六一
帝劇にて	六九
龜裂の入つた愛	七四
翌る朝	七八
千葉の宿の出來事	七七
復讐	八五
中傷の手紙	九六
實の思案	一〇〇
千葉まで	一六一

目次

目次

真佐子に成澄して……………	三九五
亞米利加へ……………	四〇四
宗三郎の辯明……………	四二五
母子の相談……………	四三七
没收された手紙……………	四三六
邂逅……………	四四五
甲板にて……………	四六五
訣別……………	四七五
都會の誘惑……………	四八四
運命の残酷……………	四九〇
絶望の魔の手……………	四九七
李枝子の口から……………	五〇五
實に傾いて行く心……………	五一六
刃は咽喉に擬して居る……………	五二三

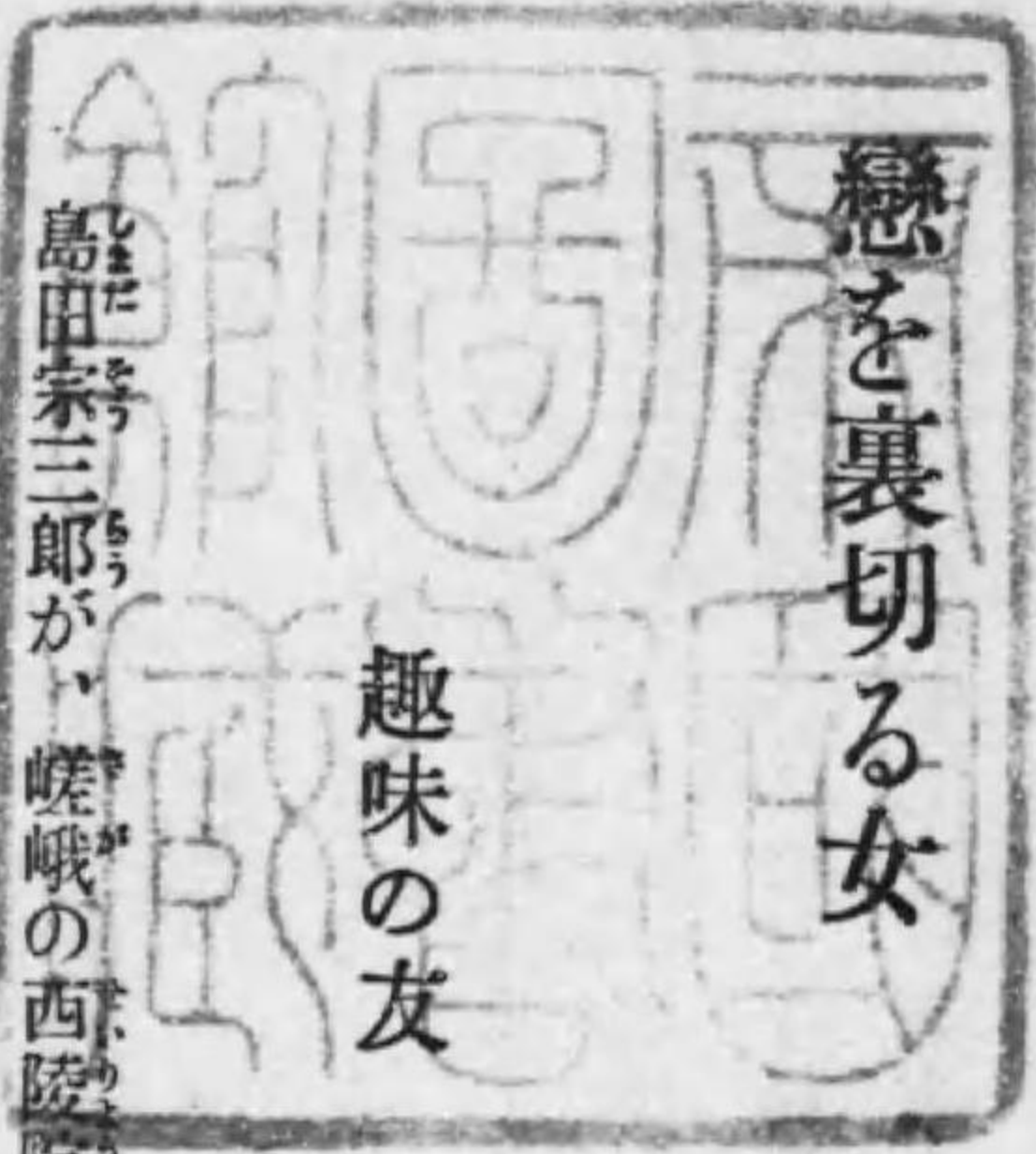
約束破棄の手紙……………	五三六
隠謀……………	五四九
父と叔母から……………	五五八
手紙をすたくくに……………	五七五
實と従妹との對話……………	五八〇
婚約披露……………	五九六
宗三郎の歸國……………	六〇四
重俊との會見……………	六一四
思出の池……………	六三三
真佐子を嵯峨へ……………	六四〇
直接行動……………	六四八
密談……………	六六〇
欺むかれた宗三郎……………	六七一
私立探偵事務所……………	六八七

目次

戀を裏切る女

目次

詰問……………	六九二
眞佐子の手に……………	七〇二
最後の會見……………	七二三
破綻……………	七三四



島田宗三郎が、嵯峨の西陵院の座敷借をしてから、もう彼は三月になる。彼は自分の居室に當がはれて居る六疊の座敷の、狭い、紫木蓮と椿だけが植ゑてあつて、それでも飛石の周圍にすつかり杉苔の蒸して居る庭の生垣越に、苔の膨らみ出した菊の手入をして居る六十ばかりの住持の姿を眺めるともなしに眺めながら、讀みさしの詩集を投出して、机に頬杖を突いたまゝ、自分が結婚問題で、父や兄と衝突して、國を出て來た事や、この西陵院に身を寄せてからの今日までの生活などを、それからそれと展開するフィルムのやうに、懶けな態度で思ひ浮べて居た。

宗三郎の家は園部在の相當な農家で、父は村長をした事もあり、一しきり農作改良といふやうな事に力癩を入れ出した事もあつて、宗三郎が農學校に入れられたのも、それを率先して實行して見せやう

とする計畫の一端だつた。併し父親のさうした熱も、村長をやめたころから次第に醒めて了つて、宗三郎が學校を出るのを待つて、大きな果樹園を經營しようと思つて、居た事などは今日びではもう忘れたやうに口に出さなくなつて了つた。それといふのも一つは養蠶で失敗して、非常な打撃を受けたのと、事業熱の全盛に浮かされて、それに手を出した結果、財界の逆落しに美事持つて居た山林まで投出し、一時は破産を傳へられるやうな、不如意な境遇に陥つた、めでもあつた。

宗三郎が學校を出たのは、さういふ折だつたので、父は折角修めて來たわが子の智識を應用し得るやうな何等の經營にも實際手が出せず、學校の卒業證書を賣の持腐れにして、多少の收入を目當に、いやがる宗三郎を村役場に出勤させ、同時に福地山在の豪農の娘と結婚させやうとしたのであつた。その娘は美人との評判があり、澤山の持參金もつくといふのだが、それにも拘はらず、二十四の今年まで縁が遠くてまだどこへも出ないといふ女で、こればかりでは云分がなさうであるが、實は血統の上に曰くがあるので、それを承知で宗三郎に押しつけやうといふのは、嫁の里を力に、財政上の不如意を切抜けやうといふ父や兄の魂膽なのだつた。

宗三郎はさういふ自分を犠牲にしようとする結婚には大反對だつたし、父や兄があまりの冷たい利己主義なのに憤慨して、可なり烈しい衝突をした結果、もう一切父や兄の厄介にはならないと云殘し

て、家を出て了つたのであつた。そして彼はこの西陵院の住持が、同じ園部在の出身で島田一家と前から相知る中なのを幸ひ、當分の約束で身を寄せて貰つて居るのであるが、たゞいつまで厄介になつて居る事も出来ないと思ふので、口のあつたに任せ、このごろでは京都の或簿記學校の英語教師に雇はれ、一週三日程通ふ事にして、それ以來食扶持だけを西陵院に入れて居るのである。

彼はいつまでこんなところにこんな事をして居るのでもない、何とか身を立てる工夫をしなければならぬとは思案しながら、なほぐづぐづと態度を極めずに居るのは、彼の案外呑氣な性質にもよるが、一つは「詩人」だと自から考へて居る彼には、この嵯峨の宅住居といふ事が、ひどく詩的感興をそゝるやうに思はれるためなのと、彼を當分この土地から離れさせまいとする何ものか、彼の意識するとせぬとに拘はらず、存在して居るためでもあつた。

彼は今その何ものかを、漠然と夢でも見るやうにほんやり思ひ浮べて居るのである。

西陵院に程近く、同じ嵯峨に隱退して、餘生を楽しんで居る豫備海軍少將三輪田重俊は、西陵院の和尚と碁友達で、同時にまた同じ趣味に遊ぶ園藝の友であつた。晝はその園藝に忙がしいので、重俊はよく夜分に西陵院に出かけて來ては、住持と頻りに碁を闘かはせるが、新參ものの宗三郎も、少し碁が打てるところから、だん／＼に重俊と知合になつた。

併し重俊がこのごろ宗三郎に好感を持始めたのは、宗三郎が碁を打るといふためではなく、宗三郎を通じて、好な道の園藝の知識が得られるといふためだつた。重俊は花といふ花に愛惜を持つて居り、朝顔も作れば、ダリヤも作り、小さな温室も持つて、いろ／＼の熱帯草花などを蒐めて居るので、尤も今では菊に興味を集中して、それにかゝりづめの有様ではあるが、その外に邸内には果樹園もあり、かた／＼何につけ彼につけ、農學校出の宗三郎の意見を聞けると云ふ事は、重俊に取つて非常に調資でもあり、好都合でもあつたのだ。

重俊が宗三郎に好感を持始めたのが、碁でなくて園藝のためであつたやうに、重俊と住持が取分け別懇の間柄になつたのも、碁友達といふよりは寧ろ園藝趣味の一致した、めである事を宗三郎は推測した。和尚は菊作りではこの豫備海軍少將に二目も三目も置いて居るが、純粹の日本種だといふ大和撫子の培養にかけては、本場の京府中でも自分の上に出づるものない事を誇りとして居た。

和尚の説によると、この大和撫子は賢くも宮中で殊に愛培された由緒の深い花で、それに伴ふ優しい傳説があつた。それは大和撫子はいつの帝の御代よりか、秋も最中の三五の明月の夜に、緋の袴をつけた官女が、長い房のついた檜扇の先から、滾して蔭く慣習があり、その通りにすると花瓣の垂の長い、一尺にも近い美事な花が咲くといふので、和尚は今でもその傳説を守り、十五夜の夜を擇ん

で、扇の先から、苗床に滾しては蔭くのである。

宗三郎はこの話を聞き、現にこの仲秋の望の夜にも、和尚がその通りにして蔭いたのを見て、それが緋の袴をつけた官女でなかつた事を悔みながらも、それを園藝上から見ても何の價値もない迷信だとなして了ふ前に、詩人と自任して居る彼には、何とも云知れぬ詩的趣味に富んだ傳説が、和尚によつて保たれて居る事を、何よりもまづ喜ぶのであつた。

一度この撫子を御所へ献上したいといふのが、和尚の畢生の希望なので、彼はいつかはこの希望の實現される日のある事を信じながら、二三十年來毎年明月の夜に、檜扇ならぬ秋の破扇の先から、大和撫子の種子を滾しては蔭いて居るのである。

和尚はかうして生えた苗を重俊にも分けてやり、幾鉢か作らせながら、亞麻仁を水煮にして、丹念に暇に任せ摺りつぶしたものを、糠や土にまぜて寝せて置いて秘傳もの、大事の肥料を分けてやつたり、その外栽培上の秘傳まで口授したりなどして、あつぱれ先生振を發揮して居るが、その代り重俊から、自慢の菊の苗を分けて貰ひ、これとても秘傳澤山の培養法を、交換的に授つて居る譯だつた。さういふ園藝上の交際が二人を親密にさせて居るので、碁を打つ事は、いはゞその時時の出来心であると云つてもよい位、従つて碁を打ちに来ながら、碁は打たずに園藝の話だけに、夜を更して了ふ事

も珍らしくなかつた。

さういふ二人の交際の中へ、農學校出の青二才が割込んで来たので、見たところ少しも調和しさに思はれぬ三人が巧く結びつく連鎖もやはり碁ではなく、園藝だつた。尤も大和撫子の傳説を固守して、十五夜の晩に扇の先から種子を滾し、十年一日の如く、亞麻仁の肥料一點張に極めて居る和尙には少なくとも科學に根據を置く宗三郎の園藝談とは、全く没交渉であつたが、果樹園藝もやり、西洋草花にも手を染め、菊の培養にかけても、在來の秘傳に満足が出来ず、飽くまで研究的態度を取つて居る重俊には、空谷の登音の感がないでもなかつた。でこのごろでは宗三郎は顧問といふ格で、菊の培養土を作るにつけ、肥料を與ふるにつけ、殺菌劑の灌注につけ、彼に來て貰つては、いろいろの話を聞き、それを参考とし、或はそのまゝ直ちに應用して居るのである。肥料の三成分を如何に調査するか、それにどういふ禁忌があるか、土壤をどうして中性にするか、害虫の驅除はどうすれば完全に出るか、品種改良に關するメンデルの遺傳法とはどんなものか、さういふ一般論について宗三郎から聞かなければならない事はいくらでもあつた。宗三郎は自分から菊を作つた經驗はないけれども、花卉の培養法は自分の研究した題目の一部分なので、それは當然菊にも應用し得べきものでなければならなかつた。重俊が熱心であるだけそれだけ、宗三郎も氣乗がして、自分の蘊蓄を傾むけて話もすれ

ば怪しいところはノートや本について調べては話をするのであつた。

すつかり重俊の信用を得たらしく見える宗三郎は、最近にまた今年十五になつて中學校の一年生である、重俊の末子俊雄に英語を教へることを依頼されて、これまた快よく承諾を與へたのである。俊雄は重俊の晩年にもうけた子で、少し可愛がりぬいて育てた、め、學校の方は不成績で、やつと中學へ入りはしたものの、大分荷が勝過るらしく取分け英語が不成績なので、最近學校から注意を受けた始末だつた。さういふ事情から簿記學校の英語を教へて居るといふ宗三郎に、俊雄にも教へて貰ふ事を思ひ立つた譯だつた。

俊雄は每晚西陵院へ教はりに來るのであるが、この少年が來始めてから、まだ一週間あまりにしかならぬ。可愛い少年で、伶俐らしくもあり、性質もよさうであるが、たゞ意志が弱く、そして注意力が足りないのだといふ事が宗三郎にはすぐ分つた。併し教へ込めば見込がありさうなので、これも眞心をこめて教へてやる事に極めた。

宗三郎が斯うして父子のものに實意を盡さうとするには、彼が悪意のない好漢であるといふ以外に、そこにまた例の彼自信の意識すると、せぬとに拘はらず、隠れた何ものかあつた。

彼は今その何ものかを、漠然と夢でも見て居るやうに思ひ浮べて居るのである。

彼がさうして賸めて居る夢の中から、いつか美しい娘の姿がくつきりと描き出された。それは俊雄の姉の眞佐子である。

眞佐子は去年京都の女學校を出てから、家庭で一家の手助をしながら、音楽や、お定まりの茶や花の稽古をして居るのである。母には七年ほど前に別れたので、今は父と弟と三人家内のひっそりした家庭に、父が唯一の話相手、老後の慰藉であり、妻を失つた父に取つては、何とも知れぬ可愛いものになつて居るのであつた。

五百坪ほどの嵯峨の宅地が、重俊の唯一の財産で、後は恩給で手一杯の生活をして居るのだが、朝鮮に高等官をして居る長男があつて、その方から小遣位の仕送りを、別にあてにして居る譯ではないが送つて來るのである。それ等は重俊の小遣といふよりは、大抵可愛い眞佐子の身の廻はりのものになつて了ふのである。

眞佐子は純潔な家庭に育つた純潔な娘で、どちらかと云へば内端の方らしく、あまり出しやばらない令嬢らしい令嬢だと、宗三郎が觀察して居るのに餘り違ひはなかつた。さういふ風なので宗三郎が出かけて行つても眞佐子に逢ふ機會は至つて少なく、また逢ふ事があつても話をする機會はなほ更ないので、まだほんとに談話をして見たといふ事はないのである。……が自分を見て浮べる歓迎の笑顔

や、一言二言の挨拶から察して、自分に好意を持つて居る事の推測されるのが、宗三郎に取つては何となく嬉しく思はれるのだつた。尤も話を仕かけやうと思へば、茶を汲んで來たり、また途上で行逢ふ事などがあつて、その機會はあるにはあるのだが、宗三郎はその場になると場うてがして、いつも空しく機會を逸して了ふのであつた。

併し眞佐子が宗三郎に好意を持つて居るにしても、それはたゞ父の園藝顧問のやうなものであり、弟の先生であるために見せる好意であるに留まつて、少しもその上に出て居るのではないといふ事は、宗三郎にはハッキリ分つて居り、また宗三郎にしても、それ以上を望んで居る譯ではないので、今のところそれを物足らなく思ふところは少しもなかつた。眞佐子が自分などの妻になる女でないといふ事も、始めからよく想像され、また自分も眞佐子を妻にしたいなど、苟にも思つて見た事はないので、たゞ自分の住馴れ見馴れた田舎などには、逆も見られぬ閑雅な美しい女である眞佐子と接する事が出來るといふ事に——兩性の單に接觸して得られるだけの快樂を得る事に満足して、それ以上の埒の外に踏出やうとはしなかつたのである。

無論今漠然と眞佐子の姿を、彼自身の頭に浮べて見て居る宗三郎の心理状態を、戀と名づくべきものではなかつた。

が彼は兎もすれば、眞佐子に對して戀に落つる可能性を自分が持つて居る事を恐れて居た。そして自分が萬一戀に落ちた場合、眞佐子に戀を仕かけたと知れたが最後、重俊はきつと手厳しく自分の出入を差止めて了ふに相違ないと察せられるのである。が宗三郎はさうした危険のあるにも拘らず、どうかして眞佐子ともつと自由に談話の出来るほどの交際を許されたらばと、どれほど心に願つて居るかも知れない。何だか眞佐子の自分に對する、假令好意は見せて居るにしても、あまりに淡過ると思ふ態度が物足らなくも思はれ出すのである。二人の間がもつと親密になるためには、俊雄に英語を教へ始めたのを幸ひ、出来るならば自分から三輪田方へ教へに行く事にして、自分では希望するやうな態度を見せずに、自然に二人の間の障壁が取れて行くやうな運びに導びいて行きたいなども考へるのである。

宗三郎は自分が眞佐子に近づきたいと願つて居ることを、少しでも重俊に悟られまいとするので、なるべく重俊方を尋ねる事を控へる方針を取り、また重俊の前では眞佐子に目を移すやうな事は慎しむ事にして居るが、何度尋ねて行つても、一度も重俊がいやな顔を見せた例がないので、何も自分から氣が引けて居る必要はない、大膽に何度でも出かけて行けばいゝのだと考へるやうにもなつた。重俊が菊にかゝり出すと、もう一切外の園藝には手が廻はらず、温室や果樹園もたゞ下男任せに放つて

置くので、その監督を頼まれた宗三郎は、毎日出かけて行つても少しも氣の引けるところはない筈で、おほびらに自分は重俊方に入出入する特權を與へられて居るのだと、道理つければつけられるのである。

彼は今小春日和の午後の日を半面に浴びて、生垣の外に菊の手入をして居る和尚の姿を見て、同じやうに菊に取りかゝつて居る重俊の隠者めいた姿と、事によつたら父に手傳つて、優しい手先で蚜蟲の退治をして居るかとも思はれる眞佐子の姿を想像した。そしてその有るべき場合の實現を心に願ひながら、思ひ切つて身繕ひした上、烏打帽を被つてぶらりと西陵院を出た。

漲ぎる血潮

北嵯峨の秋日和はこの上もなく麗らかである。屑屋葺の農家の籬には雁來紅が紅に、コスモスがゆらゆらと咲亂れ、瀬戸の柿の實が赤らんで、紅葉にはまだ間がありながら、木の葉はそろ／＼黄ばみかけ、見渡す小倉や嵐の山々は二分秋の趣を見せて居る。空が明るく空気が爽やかに、云知れぬまで詩趣をそゝるものがあるので、さういふ繪のやうな野趣の充滿した中を、宗三郎は何とも云へぬいゝ氣持で、ぶら／＼歩きながら、いつか三輪田方の近所まで来た。この邊からよくピアノの音が聞えて来る事があるが、今日はピアノも聞えないのは、自分の豫想通り、また此間出かけて行つた時の通り、眞佐子は菊の先芽括か、蚜蟲取かの手傳をして居るのかも知れないと、熱心にそれである事を祈りながら、程なく建仁寺垣を繞らした三輪田方の裏門を入つて行つた。菊の栽培場がそこに近くあつて、もし重俊がそこに居るとすれば、すぐに見出されるからである。

裏門を入ると、そこに畑を仕切る粗らかな木香薷の生垣があつて、その生垣の内部に菊の栽培場が見渡され、果してそこに働いて居る重俊の姿が目に入つた。がそこに自分の豫期したやうな眞佐子の姿は見出さないのであつた。併し宗三郎はそれに失望するといふよりは寧ろ救はれたやうな心安さを覺えて、つか／＼と切戸を開いて、重俊の方に進んで行つた。

そこには高さ二尺あまりの柵を二列に、ずつと幾行も作り並べ、その間を歩けるやうにして、凡そ百餘りの菊の鉢を、その柵の上に排列して居るのである。いづれ三本乃至五本立で、早咲の分は咲出して居るものもあるが、大部分はやつと苔を割りかけて居る程度であつた。それが随分と美事な出来榮でいづれも屑なしによく揃つて居り、下葉も見事について、先太りのした莖の先についた苔の大きさから、殆んど最大限度に近い見事の花の開く事も想像され、それだけに作りあげた重俊の苦心の一通りでない事が察せられる。

重俊は今一心に針金の輪臺を、ラファイアで添竹に括りつけて居るところで、宗三郎の近づくのも知らずに居たが、

「お精が出ますな」と、聲をかけられて、始めて見返ると、宗三郎なので、機嫌のよい顔をしながら、「お、島田さんか。……どうも輪臺の取りつけが遅くなつての、今日は今朝から一生懸命それにかゝつとるのぢや。何しろ五六百取付けるのぢやからね。……今までにほつ／＼やつて置けばよかつたのぢやが、何分一人で手が廻りかねるもんぢやからの……。」

重俊は今年六十五になるが、年よりは若くも見え、元氣にも見える方で、頬から頰にかけて、いかにも菊作りの老人に相應しい、半白の髭髯を生して居る、品のよい風采の持主だつた。真中の方の大方禿けて居るこれまた半白の頭に、日避の網笠を被つて居る風情も、宗三郎には繪にも詩にもなりさうに思はれたのだつた。

「なか／＼お大抵のお骨折ぢやアございませぬね。少しお手傳いたしませうか。」

「いや、難有う……一々自分でやらんと氣が濟まんでの、娘にも手傳はさんのぢや、あは、ゝゝ。」

「さうでございますか。……なるほどさうあつてこそ趣味も深い譯ですな。併しお丹精の甲斐が表はれて、大變お立派な作のやうで……西院のなどは足元へも寄りつかれないやうでございますな。」

重俊は左も得意らしい上機嫌で、

「まア、お蔭で今年はお上作ぢや、西院の和尚も熱心ぢやが、菊にかけては俺の弟子ぢやからな。」

「随分澤山の種類をお蒐めになつて居らつしやるんでございませう。」

「蒐めて居る？ いや蒐めて居りはせんのだや、みんな俺の實生ものばかりぢや。それが俺の花壇の特色で、名古屋や九州あたりから、わざ／＼俺のところへ出かけて来るのも、みんな俺の實生を見やうためぢや。菊は只作をして大きい花を咲かして見たところで、深い面白味といふはないもんで

の、實生をやつてこそ、始めて菊作りの面白味があり、またそれでこそ菊の品種も改良されるのだや。のう島田さん、さうぢやらうが……。」

「いや、御尤もで……全くそこまで行かなければ眞の面白味はありますまい、また品種改良といふ事は、取りも直さず園藝界に貢献されるといふ事ですから、實に結構な事でございませう。閣下の實生の事は、兼て承まはつて居りましたが、この菊が全部實生であるとは存じませんでした。種子はどういふ風にしてお取りになりますか。」

「品種改良と大きい事は云つて見ても、實は甚はだ非科學的な方法で種子を取つとるのだや。今年是非君の指導を受けて、ほんとに種子を取つて見たいと楽しんで居る。此前メンデルの法則の話を聞いたが、一度のつくりあの話の詳しい説明を聞きたいと思ふ。あれは菊にも應用が出来るのだやらうの。」

「無論出来る筈だと存じます。併し菊科植物に對する實驗報告は餘りないやうですが、これは完全にメンデルの法則を實驗して見るといふ事が非常に困難だからだと存じます。なぜといふのに御承知の通り菊は澤山の小さな花の集つた集合花ですから、豌豆や朝顔などのやうに簡單に花粉の人工交配をやるといふ事が出来兼ます。その小さい花の一々の雄藥から外の部分を傷つけずに薬を取除くといふ

やうな事は殆んど不可能ですから……併し或程度までの適用は、雄薬を取除かなくても出来ます、また専門家の實驗でない限りそれで澤山だと思ひます。」

「雄薬を取除かんで置いては、自花受精をやるから人工交配が無駄になるといふ理屈かの。」

「さうでございます。併し幾分の妨害にはなつても、決して無駄になるものではないといふ事は、御承知の通り、菊の雄薬も雌薬も周囲の方から中心の方へと、だん／＼に熟して行きますが、それがその周囲の方にしても、雌薬と雄薬は同時に熟せず、雌薬の方は後から熟します。ですから菊といふ一つの集合花を作つて居る單位の一つ一つの花から云へば、自花受精をやらない事になります。つまり一つ一つの小花は、異花受精の準備をして居るとも云へる譯です。實際また雄薬と雌薬が同時に熟せぬ花は、自花受精では結實力が弱く、他の花の花粉を持つて行けば、容易に結實します。ですから菊にしても、強ひて雄薬を取除く必要もない譯で、時機を見て人工交配をやれば、種子の實入もよく、また両親のいゝ性質も、メンデル率に従つて遺傳される譯です。つまりいゝ親をかけ合はせるといふ事が最も必要で、他の悪い花の花粉の入らぬ工夫をする事が何より肝腎だと存じます、打捨つて置けば例の蜂や虻が、いくらでも媒介をやりますから……。」

「ウム、なるほどな……。」と、重俊は大分いゝ事を聞いたといふ様子で輪臺の括つけを止めてこなた

に向直りながら「さうすると人工交配をやつた方が實りもいゝ譯ぢやね。フム……と、ここで島田さん、俺は玉巻の美事な細管ものを二種持つて居るので、それを掛合はしたいといつても苦心するのぢやが、困つた事に一つは早咲、一つは遅咲と來て居るので、どうもいゝ案梅に一緒に咲いてくれんから掛合はされんのぢや、何とかいゝ工夫はないものぢやらうかな。」

「それなら早咲の分の花粉を貯藏してお置きなすつたら如何でございます。」

重俊は耳よりの福音を聞いたといふやうな顔をして、

「花粉が取つて置けるかの？」

「置けます。それには小さなシャーレといふ花粉容器があつて、それへ入れて置くと四五日位ならそのまゝで持ちますが、一三週間保存しようとする場合には、適當な乾燥法を行つて、その上で冷たい乾いた場所へ、そのシャーレを貯へて置けばいゝのです、農事改良の目的で、稻などの花粉を遠方に送る場合には、細い硝子管の底に、乾燥劑として鹽化カルシウムを入れ、脱脂綿で仕切をして、紙包にした花粉を入れて送りますが、九州の果から奥州の果までさうして送るのでございます。菊の花粉でも勿論その通りに出来ます。」

「あゝさうかね。稻などは實際そんな事をして改良して居るかね。」

「日本の現在い、稻だといふ關取、竹成、朝日など、いふ種類も、皆さういふ苦心を経て作り出された雑種なのでございます。」

「フム、」と、重俊はひどく感心しながら、「なるほど生活必需品ちやから、稻の改良についてその位の苦心は當然ぢや。それに比べると菊の實生などは、まだく幼稚なものぢやの。實生々と云つても、人工交配すら碌にしてゐるものはないのぢやから……此や蜂に任して置いて、よい種類を作らうといふのは、それこそ虫のよい話で、つまりまぐれ當りの僥倖を待つて居るのぢや。島田さん俺は今年はきつとやるから、一つ充分監督して貰はにやならん。その花粉を貯藏するシャーレといふものは手に入るものかね。」

「はい、手に入ります。私が取りよせて置ませう。」と、宗三郎もさうしていよく老人と親密の關係の出来るのを喜びながら云つた。

「そこで人工交配をやるとすれば、どうして邪魔もの、蜂や蛇を防げるかの？」

「それには酸紙とかバラフィン紙とかいふものがありますから、それを交配済の花に紙袋として着せて置くのでございます。バラフィン紙などは、充分に光線を透しますから、結實にはちつとも差支ありません。」

「その酸紙やバラフィン紙はどこにあるかの？」

「バラフィン紙もシャーレと一緒に求めて置ませう。」

「ではさういふもの、調達を一切君に任して置くとしよう。よろしく頼むよ。」

「委細承知いたしました。」

重俊はまた輪臺括りに取りかゝりながら、

「全體メンデルの法則によると、両親の性質がどういふ率に傳はるのぢやつたな。」

「はい、それはなか／＼計算が面倒になりますが、併し簡単に大ざつばな事を申上げると……さうでござりますな。」

彼がどうして説明していゝかを見出さうと思案して居る時、裏門の方に突然に起つた、いつになく蓮葉に聞える眞佐子の高笑が聞えるので、彼はハツと胸を躍らせながらその方を見た。慎しやかな眞佐子が無遠慮に打興する相手は誰なのだらうと思ふと、それにも嫉妬に似た好奇心を誘はれるのであつた。

とすぐ、前髪を分け、後下りの束髪にして、それへ今道端で摘んだらしいコスモスを挿して、豎縞の銘仙の袷に、友仙モスの帯を締めて、赤い帯揚のバツと目に立つ、背のすらりとした如何にもいゝ

形の眞佐子の姿が、駈込むやうな慌たゞしさで裏門の中から表はれると、續いてそれを追ふやうに入つて来たのは、二十七八のきりゝとした、鼻の下にちんびりと髭を生した、格好のいい、背廣服をつけて、流行色のソフトに細身のステッキを持った、若紳士風のスタイルをした男だつたが、裏門を入ると二人は同時にまた面白さうに笑つた。

宗三郎の血は一時に氷りつくやうに冷たくなり、戦慄が頭の天邊から足の指先まで全身に傳はるのだつた。

宗三郎が何とも云へない物悲しい目つきをして、木香薔薇の生垣越にモ一度眞佐子の方を見た時、偶然こなたを見た眞佐子と顔を合はしたが、宗三郎は慌てたやうに眞佐子からその目を外して了つた。

彼は眞佐子から目を外したけれども、眞佐子が何か叫やくやうに相手の男に自分の事を告げて居るらしいのを感じた。そして二人は栽培場の方へは入らずに行過ぎて了つたが、二人が行過ぎる時に再び笑ひ合つたのを聞いて、宗三郎は何だか自分を嘲つて居るのではないかと思はれ、彼の血はまた一時にくわつと頭へ上るのであつた。

「何か表のやうなものがあるぢやらうな。」

と重俊は今宗三郎の胸にどういふ烈しい波瀾が起つて居るとも知らずに、宗三郎の答の途絶えて居るところからさう云つて促した。

「は。」と、宗三郎は心づいて狼狽しなから、「はい、表がございます。これはお話を申上げたゞけでは判りにくうございますから、今度は表を作つて来て説明を申上げませう。」

さう云つて額の汗を拭いたが、もうメンデルの法則などはどうなつてもいゝやうな氣がした。何だか三輪田方の門を潜るのは、これが最後なのかも知れないといふやうな興奮が、彼の頭を支配して、胸の中はたゞ譯もなく激昂して居るのであつた。

途端にピアノの鍵を打つ音が、鋭どく彼の耳を突いて、男聲の唄聲がそれに和して起つた。

大澤の池

宗三郎は自分の變つた顔色を重俊に知られまいとして、何氣なく菊の鉢を見て歩くやうに粧ほひながら、重俊の方に後を向けて、菊棚の間を歩き出した。

ピアノ音と太い男の肉聲が入亂れて、彼の脳髓をひッ搔廻はすやうに、鼓膜から渦を巻いて入つて來るのだ。彼は重俊に話しかけられない前に彼から遠ざかるため、菊棚の列の一端へ來ると、そこからついと果樹園の方へ入り込んだ。

そこへ來てはッと一息ついた彼の胸は、壓つけられるやうに迫つて來て、泣きたいやうになつた。何だか騙されたやうな氣で、眞佐子が憎くさへ思はれた。若い男に對する反感はいふまでもなかつた。自分の手から自分のものを攫つて行つた盗人のやうに腹立しかつた。

併しなぜ自分はこんな興奮したのか、なにがそんなに自分に悲しいのか、……自分と眞佐子とは何の關係もない他人なのではないか。自分は眞佐子を戀しても居なければ、まして眞佐子を妻にしたいなど、考へた事もないではないか。二人の間にたゞ多少の友誼が成立つたといふだけで、戀愛關

係などは微塵ほどもないではないか。眞佐子がどんな若い男に親しくしたところで、自分を裏切つたと考へる理由は、何一ツないのだ。眞佐子に許嫁の良人があり、約婚の男があつたとして、それに何の不思議も、また抗議も唱へる理由もないではないか。眞佐子は自分に何か約束した事があるか、私を愛すると云つた事があるか、口で云はなくても彼女の眼が私にさう語つた事が一度でもあるか。彼女が何をしようと、どんな男に戀しようと、自分はそれに容喙する何の權利もない赤の他人ではないか。

けれどもこの平靜を失つた自分の心は、何を語るのであらう？ 只綺麗な花として眺めて居たに過ぎない他所の花を、他人に取られて行つたゞけの物淋しさを感ずる刹那の哀愁——そんなものに過ぎないものとして思へやうか。自分はやつぱり眞佐子を戀して居たのだ。自分の物としなければ満足の出來ない欲望が、自分の胸に潜んで居たのだ。けれどもそれは自分でも知らなかつたやうに、眞佐子のなほく知らう筈のない事だつた。それならどうせ許される筈のない自分の戀を捨てるのは、今が機會ではないか。自分の戀を知つた時に、その戀を捨てなければならぬのは、まだ深入して居ないだけ、それだけ、せめてもの仕合せと云はなければならぬ。

さうだ、自分は眞佐子を綺麗に忘れて了はう。眞佐子に戀を仕かけて刎ねつけられる恥辱を見ずに

濟んだゞけでも感謝すべき事だ。……哀れな失戀の詩人！ 平安朝の昔から戀の哀史に彩られたこの嵯峨野に落魄して放浪して來て居る自分には、それが相應しい運命ではないか——と彼は自から苦笑した。

併しいくら自分を嘲けつて見ても、それで綺麗に觀念が出来たのでもなければ、心の平和が來るのでもなかつた。それは今しもピアノの音がびたりと止んで、何ももう自分の耳を刺戟するものがなくなつても同じ事だつた。母屋の方が静まり返ると却つて、弾止み歌ひ止んだ二人が眼と眼を見合はせて、嬉しさうな微笑を交はして居るらしい光景を想像してまた亂れ心になつた。途端にまた眞佐子の華やかな幸福に充ちた笑聲が聞えた。一度だつて自分の前で高笑ひをした事もない眞佐子が、心からの満足を見せて打興じながら、自分が果樹園の中に來て居る事さへ思ひ出しもしないらしい、同情のない態度が腹立しくなつた。

宗三郎はもう堪えられないと思ふと、いきなり果樹園の中を突きぬけて裏門の方を駈ける様に目指した。そして重俊に挨拶をする事も忘れて、もう二度とは潜らないかも知れぬと思ふその裏門を出た。そこは一面刈られるばかりに熟れた黄金の波で、そこを渡る爽やかな風に面を撫でられると、始めて冷靜なわれに返つた。そして重俊に挨拶せずに出て了つた事さへ後悔された。併し今更引返す事も

出來ないのでそのまゝ、蓼の花や野菊に彩られた畦道を傳はつて、西陵院の裏手へ出たが、裏門を入らうとすると、佛花用の百日草や、翠菊が赤や紫に咲きこぼれ、そして綺麗に咲揃つた小菊に裏門からの通路を縁つけられてある畑の向ふに、和尚がまだ菊を弄つて居るので、和尚に泣顔を見られるのが厭さに、ついと裏門を素通して了ひ、それから土堀際を廻つて往來へ出ると、大覺寺道は大澤の池の方へ、的もなく歩いて行つた。

大澤の池へ來て見ると、池の周圍には人ツ子一人見えず、横手の五所明神の杜に、柏手を打つ音が幽かに透徹るやうな秋の空氣を搖がして響いて來る外には、小禽の囀が聞えて居るばかり、その外には死のやうな靜寂を破る何の物音もなかつた。

いつも好んで散歩に來る大澤の池が、いつも來る大澤の池とは違つてゐるほどに、四邊が荒涼の氣に満ちて居るのに彼は自ら驚いた。秋晴れの續いて居るためか、池の水は大方枯れて居て、彼の今立つて居る堤の下あたりの一部を除いては、大方乾上つて、水草が哀れに枯れ凋み、いつも浮島のやうにこの池の風情を添ゆる菊ヶ島もその邊一面洪水後の陸地のやうに干上り、波々と湛へた懐しい大澤の池の面影はそこには見られなかつた。

興奮した心のいつか萎えて居た彼は、堤の櫻の切株に腰を卸して、見るともなしにすがれた池の面

を眺めた。

縮められた水面には小魚がそこに寄集まつて居るらしく、風もないのに漣を立て、居た。と先程から池の上を低く飛んで居た大きな鳶が、ついと水を目がけて落ちて来たと思ふと、鮒でもあるらしい小魚を咬へてきて空に舞上つた。宗三郎はそれを見ると、何とも云へない憎悪と敵意をその鳶に感じた。

わが眞佐子はあの通りにして、自分の眼の前で攫はれたのだ、鳶のやうな男に攫はれたのだと彼は思つた。

鳶は一尾の鮒をせしめたのにも飽足らないのか、程なくまた池の上を大きな圓を描いて舞ひ始めた。宗三郎は手ごろの石を拾ひ取つて、掠奪者からその憐れな生物を保護すべく身構へた。

併し鳶は用心して最早水の面に落しては來なかつた。

夕日が大覺寺裏の御廟山の後へ廻つて、山を黒くし、池の面を暗くしたので、宗三郎は何となく壓迫されるやうな、苦しい感じを受取り、自然に溜息が出て涙が目頭ににじんで來た。それを誘ふやうに黄ばんだ櫻の葉が、彼の膝のあたりに一片二片散つた。いつか鳶の姿が見えなくなつて、四邊が一層物哀れに陰氣さを添えた。

宗三郎は宿に歸らうとして櫻の切株を離れた。その時見るともなしに、反對の嵐山の方に目を移すと、そこはまだ夕日が眞正面に照つて居て、こんもりとした楓や櫻や檜などの雜木の姿が、ハッキリと赤松の間に見分けられた。そしてそれが手の届くばかりに近く見えた。

その山が近く來る霜に染出されるのを、自分はどんなに憧憬れて待つて居たらう。けれども自分にはもう花も紅葉もない、嵯峨といふ土地そのものさへも呪はれるやうな氣が仕出した。

彼は重い心を抱いて池の傍を離れると、大覺寺前の馬場先をわが住む西陵院の方に淋しく歩みを運んだ。と、中程まで來ると馬場の彼方からこなたへ來かゝる二人の男女の姿を認めた。竹藪の影がさして居るので、ハッキリとは見えぬが、男の洋服を着た姿から、すぐそれが眞佐子と例の憎い鳶であると思つて狼狽氣味になつた。それがわざと自分に見せつけるために來たかのやうにさへ思はれるので、折角冷靜になりかけて居た彼の頭はまたくわつと逆せて來た。一人を避けたいとは思つたが、一本道なのに今更後を見せて引返す事もならず、観念しながら彼等の前に冷靜と威嚴を失ふまいと、勉めて虚心平氣を粧ほつて前進をつけた。近づいて見るまでもなく、それは眞佐子等の戀人同志(?)であつた。

二人は新夫婦に見られるやうな心易立と、これ見よがしの無遠慮な親みとを以て、何か面白さうに

話をつゞけて、すれ／＼に寄添つて此方へ來かゝるのである。それは二人がすぐ目の前に宗三郎を見出すまでは、氣がつかかなかつたほど話に實が入つて居たのである。その時件の男が冷笑するやうな眸子を自分にくれたと宗三郎は思つたので、「この鷹奴が！」と、心に呟やきながら、擲りつけてやりたいやうな非常に敵意を表する眼を彼に向けた。眞佐子が自分に見られても、それを恥づる様子もなく、平氣な顔をして、いつものやうな笑顔を、見せて會釋したのさへ、何だか咄嗟の場合を巧みに取締ふ女の機智を失はない悪魔のやうに宗三郎には思へた。彼はいつもなら笑顔で返す自分の會釋を、此時ばかりは笑顔どころか、心の悲痛を示すやうな怒と絶望を露骨に見せて了つたやうに後から思つて後悔した。實際彼は無我夢中で會釋を返したので、彼の顔に少しでも眞佐子に對する好意の表現のなかつたゞけは確かだつた。

「厭な奴だね。」と、男が女に呬やいたに相違ないらしい言葉が、急ぎ足に遠ざかつて行く彼の耳に聞える氣がした。眞佐子はそれに對して自分を辯護してくれたかも知れない、物優しい眞佐子はその位の事はしてくれたらう。併しいくら辯護してくれたところで、それが何だ、目の前の自分に對する大きな侮辱がその辯護位で消えるものではないのだ、と彼はまたしても新たな興奮を覺えながら後も見返らずに馬場を通り抜けた。

大澤の池の秋の夕ぐれ、五所神明の暗い森蔭、——自分の心と一致したやうなあの荒涼な淋しい自然はまた新たな姿を以て戀人等を包容するだらう。自分の心を壓迫した自然は、樂園の如き暖かさを以て二人を迎へるだらう。淋しさそのものが、彼等の戀を更に切ない深いものとも培ふだらう、自然は何といふ不公平だ。二人はそこに盡きぬ戀の私語を繰返すに違ひない、あの櫻の切株に目白押になつて二人が腰を卸すまいものでもない。無論二人の手は握られて——心臓の鼓動も二人の間に通ふだらう、そして二人は……接吻を交すかも知れない——さう思つて見たゞけで、宗三郎の心は搔きむしられるやうに亂れた。

彼は自分がどんなに深く眞佐子を戀して居るかを、まざ／＼と知る事が出來たと思ふと同時に、自分の胸に嫉妬といふ恐ろしい悪魔——それは人一倍自分に附與されて居るかとも思はれる——の巢くつて居る事を知つて戦慄した。

少年勅使河原

西陵院のわが居室へ落ちついた宗三郎は、今は自分の心理状態をいろいろに疑つて見る餘裕が出来た。自分はほんとに眞佐子を戀して居たのか、それとも單に嫉妬の發作が、自分を異常に興奮させたのか分らなかつた。何だか今までちつとも戀して居なかつた女のため、あんな興奮を感ずるといふ事は、どう考へても不合理的だつた。

それならやはり嫉妬のためといふ方が當つて居るかも知れない、亡なつた母も可なり嫉妬の強い女で、よく父と衝突した事を記憶して居るが、自分にも先天的にその血が通つて居るのではないかと彼は恐れた。併し單にそれが嫉妬のためとばかりは素より思はれない。今まで若い男女の連立つた姿を見て、別に今日のやうな心理状態の幾分でも起して見た事はなかつた。その方から推理して行けば、やはり自分には眞佐子に對する深い戀が潛んで居たと見る方が至當なのだ。實際自分は眞佐子なしには生きて居られないやうな氣もする。自分は今も昨日までの宗三郎では無くなつて了つたのだ。たゞ一轉瞬の間に自分の心はこんなに変化したのだ、魔術の杖が自分を撫でて行つたばかりにこんなに変化

して了つたのだ。さうだ！ 自分には魔がさしたのだ！ 自分の頭は西陵院を出る時からどうかして居た。つまり自分は熱に襲はれたのだ、熱さへ去つて了れば明日は舊の自分になれるのかも知れない、いや、それに違ひない——さうも考へて眼の前の幻影を追拂はうとした。

幻影は嘲るやうにそこにあつた。自分以外のものから幸福を求むる権利のないと思ふ女が他人の腕に身を凭せて、その唇まで許して自分を嘲笑つて居る。……彼は堪えられなかつた。

何の味ひもない夕方の食事を殆んど機械的に済して、居室に倒れて居るところへ、俊雄が例の英語の讀本を抱へて入つて來た。

「お、俊雄さんか。」と、それでも彼は機嫌よく云つて我破と起上つた。

自分の謂れない怒りと失望を、何にも知らぬ可憐な少年に移す理由はないと思へたし、どうせ二三日で此先教へるか教へぬか分らない少年に、悪感情を見せて別れるでもないと思つたからである。のみならず彼には姉がよし彼を裏切つたとしても、この少年にはどこことなく心を惹ける愛情のあつたゞめもある。

俊雄が來ると早速自分の机を持出して與へるところを、今日はのつくり構へ込みながら、
「俊雄さん、今日はお家にお客さんがあるでせう。」

「お客さん？ いゝえ」と怪訝な顔をしながら「ウム、實さんの事ですか。」

「實さんといふのかどうか知らないが、若い人ですよ。」

「それが實さんなんです。」

俊雄さへ姓を呼ばずに名をいふほど心易い間柄なら、無論眞佐子の許嫁の男に違ひないと落膽しながら、

「あの人は君の姉さんのお婚さんになる人なんでせう。」と、何氣ない風に聞いたのだが、その聲は妙に乾からびて震ひを帯んだ。

併し俊雄はそんな事には氣づかずに、

「いゝえ。」と、他愛もなく否定したが、すぐまた後から考へてつけ加へた「併し僕そんな事よく知りません。けどもそんな事ないと思ひます。」

宗三郎の眼は輝やいて、

「姉さんのお婚さんになる人ぢやアない？……それではどういふ人です。」

「實さんは僕達の従兄なんです。」

従兄と聞くと宗三郎は救はれたやうにほつとした。従兄妹同志であるなれば、眞佐子とその實の、

あんなに親しくして居た場合を想像しても、直ちに相愛の間柄と見る事の出来ない事はいふ迄もない。それに今日びでは従兄妹同志の結婚は普通の場合に行はれて居ない。従つて眞佐子等二人は單に兄妹のやうな親しみを寄せたまでだと見る事が至當である。それなら自分はそれに嫉妬を挟む理由もなければ、失望する道理もないのだ。……自分はなぜ當初に二人が従兄妹であらうといふ疑問を起して見なかつたか、それが寧ろ不思議のやうに今では思へた。従兄妹だらうとの推測が少しでも湧いて居たら、あんなに興奮して無益の精力を徒費する愚かさから免れることが出来る筈だ、自分は何といふ馬鹿ものだらうと思ふにつけて、心の底から會心の微笑がこみ上げて來るのだ。

「あゝ、君等は従兄弟同志だつたんですか。僕はあの人はきつと姉さんと婚約でもした人だらうと想像して居ました。」

間を置いて、

「併し姉さんは外にお嫁に行くお約束でも出來てるのと違ひますか。」

「いゝえ。」と、少年は無造作に答へた。

宗三郎は何だか眞佐子が自分のものになつて來さうな氣がするのでひどくそはつき出した。活氣に充ちた聲で、

「實さんといふのはどこに居る人なんですか。」

「ずつと京都に居たんですが。今は東京に居るんです。」

實に對しても何の憎悪を感じる理由のなくなつた彼は、たしかに實に感じさせたに違ひない敵意を輕卒に見せて了つた事を悔みながら、

「その實さんの苗字は何といふのですか。」

「勅使河原といひます。」

「勅使河原？」と、宗三郎の眼は異様に輝やいた。

その勅使河原といふ姓には記憶がある。彼が園部そのべの小學校に通學して居る時、同じ級友に勅使河原といふ少年が居た。小供心に聞いた事もない妙な姓だと思つて居たので、記憶に残つて居るばかりでなく、その少年とはある特殊の親みを持つた遊び友達でもあつた。何でも京都か大阪かどこかの大きな都會のもので、身體が弱いため、田舎の乳母のところはに預けられ、そこから小學校に通つて居たのだつた。實際にその時は弱さうなひよろ／＼とした少年だつた。

宗三郎はよくこの少年と遊んだばかりでなく、腕ぶしの強い彼は、よくこの少年を泣かした事さへあつた。弱者を虐けて強者の満足を感じる殘忍性が少年の彼にはあつたのだが、それでも少しも勅使

河原を名乗るその少年を憎んでは居なかつた。虐げた後ではよく物をやつて機嫌を取つたり何かした。他人と仲をよくして遊んで居るのを見ると、何だか急に悪くなつて彼を擲りつけた。自分以外のものと仲をよくして居るのを見ると譯もなく腹が立つたのだ。——彼は今でもさういふ性質が、自分に残つて居るのではないかと危ぶんだ。

小學校を出るとその少年は都會へ引取られて歸つた。その當座少年の姿の見えないのを本意なく思ふ事もあつたが、日日が立つとすぐ忘れて了ひ、最早二度と少年の事を思ひ出しもしなくなつた。勅使河原の名は、宗三郎が二十七の今日まで只記憶の底に潜んで居ただけであつた。

少年の名は實であつたかどうか、彼の記憶にはなかつた。併し何だかその少年が實らしく、どこかにその時の少年の面影が残つて居るやうにも思はれた。

「俊雄さん、勅使河原さんは小供の時に丹波の田舎に來て居て、そこから小學校に通つて居たといふやうな話を、君は聞いた事はありませんか。」

「僕、聞いた事はありません。」

「はてな、違ふかしらん、俊雄さん、僕の田舎の小學校友達に勅使河原といふ人があつてね、何んでも京都かどこかのものので、乳母の家から通つて居たんですが、僕にはどうもその實さんらしく思はれ

るんです。家へ歸つたら一ッあの人に聞いて見て下さい。」

「はい、併し實さんは京都へ歸りました。」

「京都へ歸つた？ 君のところへ泊りに來てるんぢやア有りませんか。」

「さうぢやア有りません。京都の乳母の處ろに來て泊つてるんです。」

「京の乳母のところ？……なぜ君の家へ來て泊らないんです。」

實が眞佐子の家で寢泊りをしないといふ事も、彼には満足の一つであつた。

「なぜか知りません。家へ來て泊ることもありますが、大抵京都へ來ると乳母のところへ泊るんです。何でもその方が窮屈でなくつていゝんです。」

「はゝ、さうかね、伯父さんが恐いんだね。ぢやア京都にはまだ居る譯ですね。」

「四五日は居ると思ひます。」

「ぢやアいづれまた君の家へ來るだらう、その時間聞いて見て下さい。同じ人なら是非逢つて見たいと思ひますから……。」

少年は首肯した。

「從弟といふとどんな關係になつて居るんです。お父さんの方の續合ですか、お母さんの方のですか。」

か。」

「實さんはお母さんの姉さんの子なんです。」

「さうですか。」と、宗三郎は實に取つて重俊の煙たい譯も分つた。叔母が生きて居ないから泊りにも來ないのだと知つた。同時にいよゝ安心が出來た。母親が姉妹同志なら、あんなに親しくなるのも當然で、また二人が結婚に終る筈も當然あるまいと考へられるのだつた。

「勅使河原さんはどこの學校か出られたのでせうね。」と、多分あの勅使河原だと思ふ好奇心に驅られて尋ねた。

「去年京大の文科を出たんです。」

小學校でもどちらかといふと、出來る方の生徒だつたから、學校の方の成績はずつと善かつたのかも知れぬと考へられた。

「文科を出て東京のどこかへ入られたんですか。」

「いゝえ、東京では遊んで居るんです。」

「遊んで居ると云つて、たゞ遊んで居るといふ譯でもないでせう。」

「どこへも出ないで東京の家に居るんです。實さんは創作をやるんです。」と、ませた口を利いた。

「創作をやる？」と、あの勅使河原が創作をやるやうになつたかと驚きながら「ぢや小説を書くの？ 僕はあの人の名で出た小説を、まだ讀んだ事がないやうに思ふが……。」

自分でも時々創作をやらうと思ふ宗三郎は、新しい小説には務めて目を通して居たのだ。

「僕もどんな小説を書いてるのか知りません。」

「小説でも書いて遊んで居られ、ば結構だ。それで生活には困らないんですね。」と、自分に引當て、見ながら尋ねた。

「實さんの家は財産家なんです。」

「あ、さうですか、財産があるんですか。」と、羨ましさうに云つた。

彼はすつかり軽い氣持になつたので、機嫌よく、

「どれ、俊雄さん、あんまり話をするに遅くなるから、本をひろけるとしよう。」

さう云ひながら、机を真中の電燈の下に持出した。

俊雄はその晩歸ると、姉が一人で婦人雑誌を開いてるその居間へ入つて行つて、

「姉さん、實さんね、小さい時に丹波の田舎に行つて居て、そこから小學校に通つた事があるかどうかどう

か、知らない？」

眞佐子は雑誌から眼を放して、訝しさうに、

「實さんは丹波の田舎に行つて居たのよ。何でも私が五ツか六ツの時まで、丹波に居たのよ。私、小さかつたから覚えては居ないけれども……今の乳母さんが丹波に居てね、實さんは身體が弱かつたので、そこへ預けられて居たんだわ。でも俊雄さん、誰にそんな事聞いたの？」

「ウム、それぢやアやつぱり實さんは丹波に居たんですね。姉さん、島田先生は實さんを知つてるんだよ。丹波で同じ小學校に居たのだつて……。」

眞佐子は不思議さうに、

「まア、さう！ ぢや島田さんは實さんを知つてたの？ 實さんの方ぢやアちつとも覚えてらつしやらないのに、島田さんは記憶がいゝわね。」

「なアに、姉さん、顔を知つてるんぢやアないよ。何でも同じ級にね、勅使河原といふ生徒があつて、その苗字が珍らしいところから、島田先生は苗字だけを覚えて居たんで、僕が實さんの苗字が勅使河原だと云つたところから、もしやその人ぢやアないかと思ひ出したまでだよ。」

「あゝ、さうなの……でもまア實さんと島田さんと同じ小學校に通つて居たつて、不思議だわね。」

「姉さんは實さんのお嫁さんになりやしないね？」

眞佐子は呆れるやうに弟を瞞めて、

「なりやアしないわ。まア、誰がそんな事を云つて？……あ、分つた。きつと島田さんに聞かれたんでせう。」

「ウム。」と、俊雄は姉の咎めるやうな眼光に出逢はずと羞んで俯むいた。

「いやな島田さんだわね。」

眞佐子は大覺寺の馬場で自分を見た怒むやうな、懣へるやうな、悲しみに充ちた宗三郎の眼を思ひ出した。その時連立つて居た従弟が、

「彼奴は僕を睨んで行つたが、眞佐ちゃん、用心しなくちやアいけない。きつと柄にもなく、眞佐ちゃんを戀してゐるんだぜ。」と、冗談のやうに自分を冷かした言葉も思ひ出した。

「誰があんな人を……」と、自分はそれに答へた。

「眞佐ちゃんは何とも思はなくつても、向ふで思ひ込まれたら困るぢやアないか。」

「大丈夫よ」と、自分は笑つて、何氣なく聞流して了つたその時の對話が、鮮かに胸に浮んだ。

實際その時は氣にも留めなかつたが、ひよつと宗三郎が自分を戀して居るなら、用心しなければな

らないと思つた。

「誰があんな人を……」と、實の前で云つたその詞通りに宗三郎を見下けて居る譯ではないが、宗三郎を自分の対象とするには、餘りに懸隔があると、彼女は思つたのだつた。

俊雄が立去つてから、

「ほんとにいやな島田さんだ！」と、眞佐子はモ一度呟いた。

そして宗三郎の物悲しい失望を見せたあの時の顔を思ひ出すと、何だか可笑しいやうな、氣の毒のやうな微笑が浮んだ。まさか自分に戀をして居るのでもあるまい、とも考へた。宗三郎に戀をされるのは迷惑だと思ひながらも、強ち厭な氣持もしなかつた。それかとして自分がそれに酬いようといふ氣は少しもなかつた。

彼女はふとまた宗三郎が邪推したといふ實との結婚の場合を考へて見た。二人はずつと小兒の時から、と云つても實が田舎の小學校を出て、京都へ歸つて來てから、眞の兄妹のやうに睦み合つて來た仲だし、今でも兄妹のやうに無遠慮に馴染んで居るので、二人の結婚といふ事は、眞の兄妹の場合であるやうに、今日まで想像にも浮べて見た事はなかつた。それは實だつてその通りに違ひないのだ。その上従兄妹同志の結婚といふ事は避くべきものともされて居る。……が實は血縁上から云へば、何の

係り合もなく、ほんとの従兄ではないのである。伯母の實子ではなくて、當歳の子のあるところへ、伯母が後妻に行つたので、伯母は實子のやうに實を愛し、實も實の母のやうに伯母に懐いて居たといふだけだつた。従つて二人が結婚するといつてもそれは素より許される事なのだ——と眞佐子はそんな事も考へた。

併し只ふと考へて見たといふだけで、實と結婚してもいゝといふやうな氣は、眞佐子に少しもなかつた。實はよく自分の關係したらしい女の話などを平氣で眞佐子にするので、眞佐子は實が女といふものに對して純な考へを持つて居ないことを知つて居り、さういふ點では實を憎らしく思ふこともあつて、よく彼を攻撃したり何かしたものである。

實も眞佐子の眼からは、理想の良人とする型の人ではなかつた。

「先生、實さんはやつぱり小さい時、丹波の田舎の乳母のところへ預けられて居て、そこから小學校に通つて居たんですつて……。」

翌日英語の本をかゝへて宗三郎の許に通つた俊雄は、宗三郎の居室へ通ると、本を開けるより先にさう云つた。

宗三郎はさもこそと満足の微笑を湛へて、

「やつぱりさうでしたか。それでは丹波に居た乳母さんが、今京都に居て、勅使河原さんはそこに來て居るんですね。」

「さうです。」

「その乳母さんなら僕も知つて居ります、よく遊びに行きましたから……乳母さんの方でも覺えて居るでせう。勅使河原さんにも逢ひたし、その乳母さんにも逢ひたいと思ひますが、勅使河原さんはいつ君のところへ來るでせう。」

「來るか來ないか分かりません。」

「さうかね。」と、考へて「それなら、その乳母さんのところへ勅使河原さんを尋ねて行けば逢へる譯ですね、かうと……僕は勅使河原さんに手紙を出して見ませう、所を教へて下さい。」

「三本木です。」

「三本木なら僕の通つて行く簿記學校の近くだから都合がいゝ。」

さう云ひながら宗三郎は手帳を出して番地を書き留めた。

「それから先生、姉さんは實さんのお嫁になるのと違ひますつて……。」

宗三郎は慌てたやうに顔を染めて、

「君はそれを姉さんに聞いたんですか。」

「はい聞きました。」

「僕がそんな事を聞いたと云つたでせう。」

「さうです。」

「困るなア、姉さんにそんな事を云つてくれちやア……。」と、頭を掻きながら「そしたら姉さん怒つたでせう。」

「いゝえ、怒りやアしません。」

「僕の事を何とか云ひませんか。」

「いやな島田さんだつて云ひました。」と、俊雄はにこ／＼しながら云つた。

「や、どうも……失敗、失敗。」と、彼は擦ぐつたいやうな笑顔を作つた。

實の宿

俊雄が歸ると宗三郎はすぐ勅使河原實に手紙を書いた。その上に夜深しまでしてメンデル方則の表まで作り、翌日の午後それを持つて、少し極りの悪い三輪田家の裏門を潜つた。豫期したやうに、ここには日一日と苔の膨らんで行き、早いのは開いて行く鉢作りの菊を眺め暮して居る重俊の姿を見出した。昨日無断で歸つて了つた自分を重俊が何とか悪く取つて居はしないかと氣にしながら、その言譯をするのも工合が悪いので、黙つて挨拶をすると、重俊はそんな事はとうに忘れて居るらしく、いつもの通り機嫌よく彼を迎へたので、宗三郎は漸やく安心する事が出来た。

メンデル方則の表を作つて來た事を話すと、重俊は大満足で、暫らく菊棚の前で話し合つた上、やがて眞佐子に茶を入れさせ、宗三郎を待遇すのであつた。

宗三郎は昨日無益の興奮から輕率の態度を見せ、あつたら眞佐子に愛想をつかさねはしないかと案じられるので、旁々眞佐子の顔を正視するに堪へない氣がしたが、眞佐子の自分に對する様子には、少しも平生と違つた風がなく、却つていつもより愛想よく自分に話しかけたり何かするので、始めて

救はれたやうな満足を感じた。

八ツ茶の後宗三郎は蚜蟲の驅除の手傳などをして、夕方西陵院に歸つて來ると、實からの返事が來て居た。急ぎ開封して見ると、自分の氣遣つて居たよりは打解けた手紙で、小學校友達の君であると知つては懐かしさに堪へない、明日の四時ごろに尋ねて來てくれぬか、一緒に夕飯でも食べやうとあるので、昔を忘れぬ友の友誼が此上もなく嬉しかつた。

翌日は自分の勤めて居る簿記學校の午後の授業を済すと、三本木の實の宿を尋ねて行つた。すぐに見當つたが、それは小さな、併し小綺麗な文房具の店で、自分はその前を時々通つた事もあり、一度手帳を買つた事もある記憶が頭に上つた。その時は小さな丁稚が居て、實の乳母らしいものは見かけなかつたが、今日尋ねるとその乳母が帳場に坐つて居た。

宗三郎は一目見て確かに子供の時顔馴染のある乳母だと知つた。無論途中で逢つたとして、その記憶が蘇生るほどに印象が残つて居る譯ではないが、實の乳母の店なのだを知つて、その顔を見ると臍ろけな少年時代の記憶が喚起されるのであつた。

「僕は島田といふもので、勅使河原さんをお尋ねして來たんですが、あなたは勅使河原さんの乳母さんだつた人でせう。僕は勅使河原さんの小學校友達であなたを知つてます。」

宗三郎にかう話しかけられると、乳母も昨夜實からその話を聞いて居たので、それを宗三郎と知るとすぐ昔の事が思ひ出されたらしく、満面に笑を湛へて帳場から出て來ると、

「お、あなたが園部在で坊のお友達やつた島田さんですか。まア、よくこそお尋ね下されましたなア、まアお立派におなりやして……。」と、宗三郎を見上げ見下しながら「それもその筈ですへな、私はこんな白髮の婆になつて了ひました位やさかい、途中でお目にかつても分らしまへんが、それでもあなたの事は覚えて居ますのですへ、あなたは随分惡童さんでしたさかいな、ほ、勘忍しとおくれやすや。」

老婆がなほ早口に續けやうとするのを、宗三郎は遮ぎつて、

「いや子供の時の事を云はれると恐縮です。僕も覚えてますが、随分勅使河原さんを泣かしたもんでした。そのころあなたには僕が嘔憎まれッ兒だつたに相違ありません。」

「いゝえな、それは坊もよう泣かされましたけれども、坊は不思議にあんたと仲よしとされたさかい、ようあんたとこへ遊びに行つたり、あんたもよう遊びに來とくれはりました。私よう覚えてますのどつせ。あんたもよう忘れずにお越下されました。坊も先程からお待兼です。どうぞそれから二階の方へお上りやしておくれやす。」

「さうですか、では上らして貰ひます。……併し乳母さん、僕はこゝの前を知らずに今まで何度も通つて居たんです。一度は手帳を買つて歸つた事もあります。これからはちよいちよいお邪魔しますからね、どうぞよろしく……。」

「さうですか、ちつとも存じまへんで……どうぞこれを御縁に御最良を……。」

宗三郎が店を通つて狭い梯子段に足をかけると、乳母は下から、

「坊、島田さんがお越どつせ。」

「島田さん、上つて下さい。」と、實の聲がして、立上る氣勢がした。

宗三郎が梯子段を上りつめたのと、實がそこで彼を迎へたのと同時だつた。小間つきの六疊の間で、粗末な造作ながら小綺麗にしてあり、窓から下加茂の方が見渡せて、一寸氣持のよさそうな室だつた。

宗三郎は勧められた座について、妙に改たまりながら、

「どうもお手紙を有難うございました。併しあなたであつたとは實に以外で……。」

實は歓迎の笑を湛へながら、物馴れた調子で、

「私も全く意外でしたよ、實際不思議な再會ですね。先日はちらと拜見したゞけでしたが、今かうし

てお目にかゝつて見ると、少年時代の面影が、たしかに残つておいでゞすよ。」

「いや、あの時は實に失禮しました。小學校時代の勅使河原さんだとは夢にも思はなかつたものですから……。」と、恐縮しながら云つた。

「私こそ失禮しました。一つ今日はあなたに虐められた懐舊談でもしようと思つて、お待申して居たんです。」

「いや、實に恐縮です。」と、頻りに恐縮しながら「僕は全く亂暴ものでしたから、昔の事はどうぞお許し下さい。」

「私はどういふものか、あなたに虐められながら、あなたを唯一の友として居た事を記憶して居ます。どうぞこれからはお手柔らかに……。」

「いやどうも……もう昔の腕白ぢやアありません。どうぞこれからお心易く……。今階下で乳母さんとも一寸話して來ましたが、實に懐舊の情に堪へんですな。」と、感傷的な調子で云つた。

「幼馴染といふものは懐かしいものですよ。」と、葉卷の箱を取出して、一本を手に取り、宗三郎にも勧めながら、「君は京都の學校の先生をして居られるんださうですね。」

宗三郎は何だか輕蔑れるやうな氣がして、われから肩身を狭くしながら、

「どうもお恥かしい次第で……それも實は結婚問題で、親父と衝突して、家を出て来たもんですから、兵糧なしになつたので、當分自活するため腰かけにこの近所の私立學校で、怪しい英語を教へるんです。全く腰かけなんで……。」

いつまでこんな事をして居るのではないといふ事を見せるために、腰かけの言葉に力を持たせて云つた。

實の方はそんな事には無頓着で、

「さうですか、結婚問題といふのは、君の擇んだ女を、お父さんが認めないといふ譯ですか。」

「ところがその反対で、親父が勝手に擇んだ女を、僕に押しつけやうといふのです。」

「そりやアいかん、今でも田舎ではよくそんな結婚が行はれるんですね、そりやア君が屈服する必要は少しもない、君が擇んだ女と結婚しなくちやアいけないですよ。」

「併し僕の擇んだ女が、僕を嫌へばそれまでですからな。」と、彼は苦笑した。

「いや、決してそんな譯では……。」と、どぎまぎしながら顔を赭くして云つた。

丁度そこへ乳母が茶器や菓子を持つて上つて來たので、話は一しきり園部在の十何年かの昔語り

に移り、三人が追がに盡きぬ懷舊談にしんみりとした情緒を味はつた。

乳母が退つて行くと、

「ところで君、今日は少し遅くなつても差支ないでせうね、一緒に夕飯を食ひに出かける事にしてありますから……。」

「は……差支ありません。」

「ぢやアまだ出かけるには早いから、モ少しこゝで話ませう。」

「さうしませう。」と、宗二郎はすべてが受身であり、なるべく實の機嫌を損ねまいと勉めるのだつた。

「併し君が三輪田の伯父の家に入居して居らうとは全く思ひもかけん事實でしたよ、君は農學校の方をおやりになつたんださうですね。」

「さうです、百姓の子には農學校位が相應ですからね。」と、苦笑して「三輪田さんが園藝に御熱心なので、僕は不十分な智識でも、御参考になる事があるところから、いろいろお話を申上げたのが縁で、お心易く願ふやうになつたのです。三輪田さんはなかく感心な方です、メンデリズムの事などを御研究ですから……。」

「さう極めて了ふ事がどうして出来るんです。併し君は眞佐子を愛して居ますか、居ませんか。」
宗三郎はちよつと答に行詰つて當惑した。

「君が私を睨んだのは、きつと私が眞佐子の愛人だと誤解したからでせう、正直に白状したら何うです。」と、どこまでも宗三郎を呑みながら、面白さうに云つた。

「そんな事はありません。」と、宗三郎は穴へでも入りたいやうな氣がしながら答へた。

「併し安心したまへ。」と、宗三郎の否認に拘はらず、「私は幸ひに眞佐子の愛人でなくて従兄ですよ、西洋ではよく愛人を従兄だと云つて人前を胡麻化すさうですが、私のは正直正銘の従兄なんですからね。」

「併し眞佐子さんは縁談が外にお極りになつて居らつしやるんぢやありませんか。」

「何にも極つてはるません、眞佐子を手に入れるなら今ですよ。」と、暗に慫慂するやうな調子で云つた、半分は田舎ものを馬鹿にして居るやうに。

「手に入ると云つて、僕はそんな卑しい野心は持つて居ないです。」と、宗三郎はむきになつた。

「手に入れるといふのが悪ければ、妻にすると云つたらいゝでせう。誰でも手腕のあるものが眞佐子に對する勝利者ですよ。」

「併し假に僕が眞佐子さんを愛するとしても、僕のやうなものに、三輪田さんが眞佐子さんを下さる氣遣はありませんからな。」

「そんな事はないさ、三輪田は貧乏軍人だし、君の家は地方の名望家で、財産家なのだし……。」

「いや財産なんかありません。」と云つたが、妙に親父の失敗以來家政の不如意に傾むいてる事實を告白する勇氣はなかつた。何だか自分の父の名望家であり、資産家である事を、實に信じさせて置きたい氣がした。

「それに君が眞佐子を愛して居るなら、私だつて君の力になつてあけん事もないですよ。」
さう聞くと宗三郎の胸には涙ぐましいやうな感謝の念が、油然而して起るのであつた。

「あなたはそんなに僕のために好意を持つて下さるんですか、小學時代にあなたを虐けた僕に……。」
「小兒の時の復讐を今やる私でもありませんよ、それに君は時々私を虐けはしても、やつぱり私を愛して居てくれたのだから……。」と、云ひながら、じつと宗三郎の熱心な顔色を見つめて「さうするとやつぱり君は眞佐子を愛してるんですね、さア、正直に白状しまたへ。」

「いや勅使河原さん、實は絶望だと知りながらも、眞佐子さんを愛して居るんです。併し迎も眞佐子さんが僕を愛して下さる筈はありませんからな。」

「そこが君の手腕さ、それまで君が白状してくれる以上、私も今度眞佐子に逢つたら、君の事をよく云つて置きますせう、ウンと推奨してね。」と、笑ひながら冗談だか、眞面目だか分からないやうな調子で云つた。

「併し僕が白状した事を云つて頂だいては困りますよ。眞佐子さんが逢つて下さらないやうになると困りますから……。」

「なに大丈夫さ……併し君が困るなら露骨には云ふまいが……兎に角私は一通りの口は利くとして、それからは君の手腕を拜見するとしませう。」

「いや、僕にはそんな手腕はないです。」と、宗三郎は沈んで答へた。

「私を恐い眼で睨みつけたあの光景から想像すると、君はよつほど執心なのですね。」

「いや、もうどうぞその事は云ツこなしに……。」と、宗三郎は一期の不覺を悔みながら頭を抱へた。

「は、は、は。」と、實は面白さうに笑つた上、「どれ、そろそろ出かけるとしませうか。」

「は、お供しませう。」と、宗三郎はそはくしながら答へた。

ひさの家

宗三郎は實に連れられ、丸太町の交叉點から市電に乗つて祇園下へ来て下りた。鶏肉屋か、西洋料理にでも入るのだらうと思つてついでに行くと、實は下河原の方へ歩いて行くので、そんな方角に西洋料理のある筈はなし、鶏肉屋もありさうに思はれないので、どこへ連れて行かれるのか、見當のつかぬまゝに、尋ねるのも氣兼ねで、黙つてついでに行つた。と實は高台寺下の入組んだ横道に入つて、そこに旅館ひさの家と意氣な角燈の出で居る、何だかちつとも旅館とは受取れない家へ、さつさと入つて行くのだつた。宗三郎は勝手が違つたといふ様子で、加茂川石を敷きつめて、片側に洒落た植ゑこみをこしらへ、綺麗に水を打つた石疊を實について入つて行くと「お越しやす。」と、丸髻に結つた、宗三郎がその時女將と思ひ違ひをした、年の若い仲居が蹙音を聞きつけて式臺に表はれると、さう云つた後から「ほ、」と實の顔を見て、つけたやうに笑つた。

「何が可笑しい……来て居るかへ。」と、實は式臺に足をかけると、宗三郎に合點の行かぬ事をまづ尋ねた。

「いゝえ、でも追つつけ見えますやろ、お二人きりどすか。……さア、あんさんもどうぞ、お上りやす。」と、仲居はまだ躊躇して居る宗三郎を促がした。

宗三郎は實の友達でも来るのか、誰も来ん方がいゝにと思ひながら、臆病に黙つて實の後から上つた。とぞろりとした服装をして、案外ハイカラに結つた意氣な三十がらみの女が實の聲を聞きつけたらしく、奥から器量のいゝ姿を見せた。それがひさの家の女將で、實を見ると、これまた意味のありさうな笑顔を見せて、

「お越しやす、さア、どうぞこちらへ……。」と、先に立つて案内しながら、小聲になつて實に、「昨夜あれからどうしなはつた？」

「まア、そんな事はどうでもいゝ、何かうんと甘いものを食はしてくれ、今日は餓鬼のやうに腹が空いてるんだから……。」

「色氣より食氣だつか。たまにはそれもようおすやろう。」

「おい／＼冗談云つちやア困る、正直な友達がほんとにするぢやアないか。」

「へえ／＼悪い事を申しました、あなたのやうな初心なお固い人を……。」

そんな事を云ひながら二人を案内した室は、奥まつた八疊ほどの間で、床には栖鳳の稻穂に雀の半

折ものがかゝり、竹籠に菊の投げざしが置かれ、小さいながら整つた剪裁に面して居た。沓脱には鞍馬の一番石が据ゑてあり、北山杉の植込があつた。

女將が案内して立去ると、

「こゝは小さな家だが、なか／＼氣取つて居るんだよ。」と、實は席について宗三郎に説明した。

「これで宿屋なんですか。」

「ウム、女將は新地で鳴らした藝者でね、知合筋の客だけを泊めて、料理も食はせるといふ譯ですよ、下河原邊にはかういふ家がちよい／＼あるがね。」

「さうですかね、待合とは違ふんですね。」

「大いに違ふさ。」

さう云はれたが、宗三郎にはどう違ふのだから、分らないやうな氣がした。

「誰か来るんですか。」と、宗三郎はいさゝか不安を感じて尋ねるのであつた。

「なに、氣の置けるものが来るんぢやアないよ。」と、笑つて實はもうファミリアルな言葉を遣ひ出した。

茶と蒸ものが運ばれて来た。

宗三郎は大幅の緞子の座布團の上に坐らせられて居るのが氣が置いてならなかつた。

二人が文學の話を仕出して居るところへ、最前の仲居の手で膳が運ばれた。膳にはただ海鼠腸と猪口が乗つて居るばかりだつた。

「今の中せいせいお酌をして貰ひまつさ。滅多にあんたの傍へよせつけて頂だけまへんさかい。」と、仲居は實に向つて銚子を取上げた。

「あの人でなくつて、君も嘸お辛いことだらうけれどもね。」と、實は猪口を取上げた。

「そりやあんたの事どすがな。」と、軽く突放して、あつさりとお酌をした上、宗三郎の方に膝を向けて、「あんさん、どうぞお一ツ。」

「僕はさつぱりいかんです。」と、宗三郎は遠慮深い手つきで盃を差出した。

「君はいけるんでせう。」

「弱卒です、やつと一本位で……。」

「それなら丁度いゝ相手です。」

そろ／＼肴の運ばれ出した頃に、媚めかしい女の話聲が襖越に聞えて、宗三郎が胸をときめかして居るところへ、香水やら白粉やらの匂を先に立て、綺羅びやかな二人の舞妓が現はれた。

闕際で揃つて挨拶をして、實の前へ來ると、行儀よく坐つて、また挨拶をした。

「昨夜は大きに……。」

宗三郎は實が大分京都では遊んで居るのだなと始めて知つた。氣難かしい伯父の家に来て泊らすに、自分を甘やかして呉れる乳母の家を常宿として居る理由も、大方讀めるところだと思つた。

「お酌さして貰ひまほ。」と、自分の前で銚子を取上げられて、こんな席に始めての宗三郎は固くなつて了つた。

「僕はまだ有りますから……。」

「てらさんとあけとおくはなはれな。」と、舞妓は嬌態を作つた。

宗三郎は黙つて一口に呑干して猪口を出した。何だか自分があんまり野暮に見られはせぬかと、氣が咎めた。

實は物馴れた調子で、もう自分の前の舞妓と冗談を云合つて居た。

その舞妓が宗三郎の方を見ると、

「あんた、とうない大人しうおすな。この勅使河原さん、ほんまにいけすどつせ。」

宗三郎にはいけすといふ言葉が何の事だか分らないので、たゞにや／＼と笑つた。

「いけずはどつちの方かね。島田君、こんな顔をして居ながら、恐ろしい浮氣ものなんです。こゝで種を披露しようか。」

「嘘、嘘、披露することがあるなら、披露しとお見やす。嘘つき！ きらひ！ いけず！」

「は、は、は、よつほど弱味があるな。」

「妾よりか、あなたの事里葉姉さんに云ひつけまつせ。浮氣もの！」

「人真似をするな、云ひつける事があるなら、云ひつけと見やす。」

「どつちやが人真似だんね、浮氣もの大嘘つき！」

一人がはしやいで居るに引きかへて、一人は人形のやうにだんまりだつた。宗三郎は自分が黙つて居るからかも知れないと思つた。

程なくまた二人の藝者が順つぎに姿を見せた。いづれも二十一二の年齢好に見えたが、一人の美しい方が、先刻からちよい／＼名の出て居た里葉といふ藝者で、宗三郎はそれが實の狎妓なのだらうと察した。

藝者達と實の話は、何だか符牒のやうな事が雜つて居て、宗三郎には少しも分らないので、手持不沙汰に控へて居た。その癖藝者に何か云ひかけられはしないかと、身體はいつも緊張して居た。餘り吞

めぬ盃を重ねたので、もう顔にはポーツと出て居た。そして吞めば吞むほど固くなるのであつた。何だか斯ういふ社會の空氣に、自分が浸つて行けず、水の中に油の雜つたやうになつて居ることが、彼には苦しい悲哀だつた。こんなところへ來ずに、鶏鍋でも突き合つたら、どんなに愉快だつたらうにと、そんな事が悔まれたりした。彼はまた自分の服装が氣になつて、頻りに膝を搔合はした。實が大鳥ぞろひのりうとした服装をして居るに引きかへ、自分の襟垢のついて居る着古した銘仙の衿は、かうした派出な色彩と雰圍氣の中にまじるには、あまりに不調和なものだと思ふと自然滅入かちになつて行つた。實の機嫌を損ねずに濟む事なら自分はこゝを逃出して、西陵院の閑寂な室の中で、靜かに戀人の上を思ひ繞らしたいと思つた。

「あなた、ほんまに大人しうおすえな、何ぞ女子はんの事でも、思案して居なはるのやおへんか。」と、里葉でない方の藝者が宗三郎に向つて云つた。

「圖星！ この人は全く戀人の事を考へて居るんだよ。」と、實が口を入れた。

「あ、さうだつか、やつぱり女子はんの事を、安うは聞けまへんな、お一ツ頂きまほ、新地だつか、それとも川向ひで……。」

「そんな不潔なんぢやアない、立派なお嬢さんだぜ。」

戀を裏切る女 ひさの家

「嘘だ、嘘だ。」と、宗三郎は眞顔に打消しながら、「勅使河原さん、冗談はほんとはよして下さい。」
 何だか眞佐子の事を斯ういふ席で仄めかされる事は、眞佐子の神聖を汚されるやうな気がして、不快で堪らないのであつた。

實と眞佐子

一日隔て、實はふと、眞佐子に逢つて見る氣になつて、花園へ出かけて行つた。それは二三日中に東京へ歸るので、その暇乞をも兼ねての事だつた。

「眞佐ちゃん、島田がやつて来たよ。」と、眞佐子が自分の室で、縫ものをひろけて居る前で、實は跼座をくみながら、話の切目にかう云出した。

「あゝ、さうですつてね、俊ちゃんが昨夜島田さんのところから歸つて來ると、勅使河原さんに大變御馳走になつたつて云つてたさうですから……。」

「さうかね、眞佐ちゃんはその後島田に逢はない？」

「えゝ、まだ來ないやうですから……。小學校のお友達同志だつて、全く奇遇ですわね。あなたの方でも覚えて居て？」

「ウム、外の友達の記憶はあまりないが島田だけはよく覚えて居たよ、あの男は随分腕白でね、己はよく泣かされたものさ、それになかく性質の悪い虐め方をされたからね。」

「ほ、い、氣味だつたわね。どんなに虐められたの？」

「よし、覚えておいで！」と、従妹を睨めて、「己が外のものと仲をよくすると、氣に入らなくつて虐めるんだね、その代り島田の云ひなりになつて居ると、可愛がつてくれるんだ。」

「まア！……あの人そんなに腕白だつたんですか。尤もあなたはきつと弱蟲の泣蟲やさんだつたに違ひないから……おほ。」

「何とでも侮辱するがい、實際白状すると己はちと泣蟲だつたね。は、とところがその地位がひっくり返つて来たから面白い、とう／＼己の復讐する番が来たらしい。」

それは底意があつて、さう云つたものとは思はれなかつたが、眞佐子もたゞ笑つて聞流して、

「全體島田さんにどんな御馳走なすつたの？」

「舞妓や藝者を見せてやつたよ。」

「まア、いやな實さんね、で島田さん、喜んでらつしつて？」

「誰にしても厭な筈はないがね、併し先生からつきし初心なので、藝者に物を云はれると赤い顔ばかりして居た、まはなかつたよ。まだ女を知らないんだね。」

「誰でもあなたのやうなものばかりと思つたら間違よ。罪だわ、島田さんのやうな純潔な方を、そんな

ところへ連れてつて……。それがあなたの復讐なの？」

「まア、そんなものかね、併し眞佐ちゃん、いやに島田の肩を持つね、どうせ己は善玉の方ぢやないが……。」

「肩を持つんぢやアないが、さうぢやアありませんか。誰にしても始めは島田さんのやうに純潔な方が、あなたのやうな悪友に誘はれて、墮落して行くんだわ。」

「こりやア手酷しいな、ぢや島田の墮落すると責任は、己が持たなくちやアならんのか。」

「ぢや、眞佐ちゃんは島田が墮落しない男と信じてるんだね。」

眞佐子は煩さうに、

「信じても信じなくつても、もうそんな事どうでもい、ぢやアないの。」

「どうでもいゝが……ところで眞佐ちゃん、その島田だがね、大分眞佐ちゃんに執心らしいぞ。」

「併しほんとの事をいふんだよ。己はたしかにさうと睨んだんだ。これは眞佐ちゃんもよく考へて置かなくちやアならない、眞面目な問題だよ。」

「私、知らないわ、そんな事……。」

「いつか眞佐ちゃんは、理想の良人は童貞でなければいけないつて、大分己などは不潔動物扱ひをされたね。島田はお誂向の童貞だぜ。」

「何も童貞といふ事は、唯一の条件ぢやなくつてよ。童貞といふ事は多くの場合に、その人の人格ではなくて、環境のための事が多いわ。そんな童貞なら何にもならないぢやありませんか。」

「えらい！ 眞佐ちゃんの意見はなか／＼進歩したね。ぢやその反對に童貞でなくても、立派な人格を持つて居ればいい譯だね。」

「それはさうよ。」と、眞佐子は澄して答へた。

「さうするとさしづめ己なども候補者に入れる譯だね。これでも心まで墮落しては居ないし、己の性格として、女に溺れるやうな事は、どんな場合にもありやアしないから……。」

「自分でいくら吹聴したつて、人が信じなきや駄目よ。」と、眞佐子は笑つた。

「眞佐ちゃんは己を信じない？」

「私は信じて居るけども……。」

「眞佐ちゃんに信じて貰へば、それで澤山だ。……ところで話は逆戻りだが、ほんとに島田はどうだ

へ？ なか／＼確固した男だが、眞佐ちゃんはどう思ふ？」

「どうも思はないわ。」と、眞佐子は、肚立しさうに云つた。その顔を實はじつと眺めて、

「それぢやア島田が可愛相ぢやアないか。……併しどうとも思はないなら、眞佐ちゃんに忠告するが、少し警戒しなくちやアいかんぜ。」

實が眞面目なので、

「實さん、ほんとに警戒する必要があると思つて？」

「あの人を愛してやれないならさ。」

「さう……ぢや、警戒するわ。」

實は先程から二三日前乳母がしみじみと説いた言葉を思ひ出して居た。それは手短かに云へば、早く身を定めるため、妻を迎へるが、といふ事と、それには眞佐子と夫婦になるのが、二人のためなり、家のためなりだといふのであつた。その時は心にも留めずに聞流して了つたが、何か妙にそれが心に浮ぶのであつた。

「眞佐子を自分のやうな道楽もの、妻にするのは可愛相だ。」

これはその時自分が乳母に云つた言葉であつた。併しながら自分はこの美しい眞佐子を、心から愛

する事が出来ないだらうかと考へた。

どちらにしても、眞佐子を島田風情にやりたくない氣が仕出した。

「それに島田のやうな田舎ものは、如何に何でも眞佐ちゃんには不似合さ。」と、彼は結んだ。

「もう、そんな話止ませう。」

「ウム、よさう。」と、自分ももう島田の話は一切眞佐子の前では持出すまいと覺悟した。

菊花壇

半年に亘る苦勞の甲斐が見えて、重俊の菊花壇は立派に出来上つた。それは大菊の本場の京都でも一二を争ふものと、蒼を持つ前から作菊家間に噂され、期待されて居た通りの出来榮であつた。十疊の本座敷の正面、庭の空地を利用して、そこに四間ほどの花壇を組んだので、簾の上から紫の幡幕を絞^ひり、手摺の下に黄と赤のアキラサスを植込み、花壇の中はいづれも下葉までよく揃つた三輪立を、適度の間隔を取つて四列に行儀よく配置してあるのが、既に今を盛りのもの、半開のもの、三分咲のもの、厚もの、細もの、管ものなど、白、黄、樺、紫、赤と、そのいづれの色も、その中に取々の明暗を以て各種の鮮やかな色彩を見せて居る美しくさ華やかさは、あらゆる花卉中で、植物學上最高の發達を遂げた、花の中の花であることを首肯かしめる。これだけを並べるまでに、色の配合、丈の高低などについて重俊の苦心は一通りではなかつたので、何度か並べかへられた末、やつとこの通りに出来上つたのであつた。

花壇の前は傳統的慣習に従つて、緋毛氈をかけた床几を置いてあるのが、紫の幔幕と對照して、花

壇の觀賞を害するほどの目障にはならず、庭木の縁を背景に、舞臺の裝飾をそこに見るやうな、劇的光景を展開して居るのであつた。

今しも一人の見巧者らしい男が歸つて行つた後に、重俊は今の先來て花壇を見入つて居る宗三郎に話しかけた。

「いや失禮をした。どうも菊が咲出すと、無暗に人が出て來ての、煩さくて困る。併し見て貰はんと張合もない譯ぢやが……今の男などは咲かん中から何度來て居るか分らん。京都でも菊通と云はれる半商賣人で、今實生畑を見せてやつたら、いゝものが出て居るのに感心して居つた、是非實生落を分けてくれといふので、やる事にはしたのぢやが……」

「實生落と申しますと……？」

「目星いものを抜いた後の擇かすの事ぢや。案外それから善いもの、出るのが附目で、俺はさうく澤山は作れぬから大抵のものは呉れてやるのぢや。ところがこの實生落から、なか／＼善いものが出るので、全體實生の菊は三年たゝぬと花が固定せぬのぢやから、實生の年の花ではほんとのところは分らんもんで、實生の年あまり感心せんと思つたもので、すつとよくなるものが出来るんぢや。」

「はゝア、なるほど菊は三年たゝなければ固定しませんかな。」

「ぢやから實生の年のものは見込をつけるのが肝腎で……尤も固定してよくなる花は、長年の經驗で大抵見當はつくが、なかには見限つたものから、ウンとよいものが出る。現に一昨年あの男にやつた實生落から、去年五十圓に賣れたといふ上物が出たのぢやからね。」

「五十圓！」と、宗三郎は驚ろき顔に、「五十圓もする菊がありますか。」

「五十圓どころぢやアない。この二三年菊も物價騰貴の影響を受けての……實生のいゝものは七十圓八十圓といふ相場で買手がつく。中には百圓以上唱へて居るのもあつて、現に去年名古屋の手合が江州で根引にした菊は、百二十五圓ぢやつた。」

宗三郎は呆れながら、

「百二十五圓？……菊の一芽がそんなにするのですか。」

「いや根引の値ぢや。……根引といふのは、菊仲間の言葉で、實生で自分のところへ出來た菊を、一芽も残さず根こそぎ賣渡す事で、つまり買取つたものにだけしか、その菊がない事になるのぢや、菊仲間の道徳的制裁は可なり強いもので、根引の場合一芽でも自分のところへ残して置けば、もう仲間に顔出しが出来なくなるのぢや。」

「はゝア、それを根引と申しますか、なるほど……。どうも菊苗が百圓以上になるとは驚ろきました

ね、そしたら、お宅のものなどは、値打にしたら大變なものですな。」

「まア、千や二千の金で賣る譯にはいかんの、なにしろ十四五年の丹誠で、これだけの實生ものを作りあげたのぢやからね。」と、得意さうに哄笑しながら、「去年など俺の實生畑全部を五百圓に譲つてくれんかといふものがあつた位ぢや。」

「さうすると實生をすれば、百姓をするより儲かりますな。」

「ところが實生はよつほど菊に明るくないと出来ん。第一種子の採取が難かしいところへ、實生は屑ものばかりが餘計生えるので、五十圓六十圓にも賣れる花は、千仕立て、やつと一本か二本出来る位ぢやからの。」

「そんなにいゝものが出来にくいですかな。」

「併し俺のところでは、一割位いゝものが出る。外のところよりは率が非常にいゝのぢや。それといふのが、つまり俺が根にまかして花粉の人工交配もやれば、種子の取りにくい善い種類を親木にしてゐるからぢや。」

「いや、さうでございませう、人工媒助をせず、自花受精に任して置いては、いゝ雑種の出来ないのが原則ですから……。」

「ところで今年は花粉の貯藏器まで買つて貰つて居るから、あんたの指導の下に巧く媒助をやらうと思つて居るのぢや。もう早いのは花粉を出して居る。……來年こそウントいゝものを出して、驚ろかしてやらなくちやア……。」

丁度その時椽先へ眞佐子が表はれて、

「お父さん、お八つ茶が入りましたが、床几へ持つてまゐりませうか。」

「おう、もう三時か、椽先へ出してくれ。さア、島田さん、八ッ茶が入つたさうぢや。」

「いゝえ、もう決して……。」と、遠慮したが、重俊が先に立つので、宗三郎は極りわるさうにその後からついて行つた。

椽鼻には手早く二つの座布團が敷かれ、その前に注がれた茶椀が置かれてある。二人が椽に近づいた時、眞佐子は奥へ引返して行つたので、宗三郎は自分が挨拶もしなかつた事を、本意なく思ひながらも、氣安くその座布團に腰を下すことが出来た。

「島田さん、俺は一昨年面白い經驗をしたので、一つ腑に落ちない事があるのぢやが、あんたの説明を聞かうと思ふので……。」

「は、どういふ事でございませうか。私に説明が出来ますかどうかですか、怪しい智識ですから……。」

そこへ眞佐子がすぐまた奥から、蒸菓子を盛つた菓子器を持つて来たので、宗三郎は姿を隠して了つたのではなかつたと、明るい氣持になると共に、一寸顔を赤くしながら、無器用に座布団を押しやつて挨拶をした。

「眞佐、お前も一つお招伴せうはんをしたらどうぢや。」

「はい……お煙草盆を取つてまゐりますから……。」と、座を離れた。

さう云つて眞佐子はやつぱり逃げて了ふのではないかと、宗三郎が氣遣つたに引きかへ、床傍とこわらの邊そばから火皿つきの巻煙草盆を取つて來ると自分もそこへ愼つひましやかに座を占めたので、宗三郎は何とも知れぬ嬉しさと、心のときめきを覺えた。

「甘さうな蒸菓子ぢやの、島田さんにも取つてあけて、お前も摘まむがい。」

眞佐子は父に云はれるまゝ、小倉饅頭せぐらまんじゅうの一つを挟み取つて、物優ものやさしく、

「島田さんどうぞお一つ……。」

「いえ、もう勝手に頂きますから……。」と、逡巡たぐらつたが、挟んで出されたので、恭々しくそれを両手に受けた。

「面白い經驗といふは外でもないがの。」と、重俊は前の話を受けて、巻煙草を一服し「一昨年もう花の

すつかり無くなつた十二月半に咲かした菊から、試みに種子を取つて見ようと、温室で大事に育て、見たのぢやが、年を越した二月になつて、十四五粒種子が實つたのぢや。その花は白ぢやつたが、さてそれを大事にかけて蒔いて見ると、八株ばかり生えて、よいものは一つも出来んぢやつたが……俺わがが腑はらに落ちぬといふのは、その親木おやぎが今いふ白で、周圍に無論菊の花は一つもなかつたのぢやから、異花交配の行はれる筈がないのに、薄赤と黄の花が生れたのぢや。それはどういふものぢやろうな。」

宗三郎は微笑しながら、

「それは決して不思議な事ではございません。親木の白といふのが既に雜種なのですから、黄が生れ、赤が生れたといふ事は、その先代の中に黄があり、赤があつたといふ事を證明するもので、それにメンデル法の行はれて居る事を示すものでございます。」

「は、ア、さうかの……まだ充分にメンデル法の話を聞かんぢやつたが、それでは異花交配をやらすとも、白から黄や赤の生れる理屈がある譯ぢやの。」

「はい、つまり隔世遺傳かくせいいでんでございます。丁度祖先に狂人があると、親は普通人であつても、その子に狂人が生れるのと同じ理屈になります。花の固定する率りつと、さういう變異の起る率りつを定めたものが、メンデルの法則なのでございます。」

眞佐子が傍に聞いて居ると思ふので、宗三郎は私かに得意を催ほしながら答へるのであつた。眞佐子がそれを興味を以つて聞いて居るらしく、また自分の説明に重俊の感服すると同じ程度に、眞佐子の感服して居るらしく見える事も、宗三郎を調子づかした。

「は、ア、さうか……。それで疑問が解けた、併し面白い事ぢやの……さうすると善い菊を作るには系統を調べんといけん事になるの。親木によつて平凡なものからよく善い子の生れるものがあるが、同じ理屈からぢやの、俺はい、親の花粉がひつ着く偶然の結果とばかり思ふて居たが……。」

「それは花粉のためばかりではないでございませう。」

「それから島田さん、花芯のないものから種子を取る工夫はないものぢやらうかな。花芯のないものは多く最上等の菊ぢやが……。」

「それは花瓣をお切になつて見たらどうでございますか。さういふ花でも花瓣をお切になれば、瓣の管になつた中から雌蕊の柱頭が表はれて来る筈です。御承知の通り菊のやうな頭状花序になりますと、各花瓣が完全な雌雄蕊を具へた花なのですから、花瓣を切られると、雌蕊が早く發達して柱頭を見せる筈だと存じます。そこへ交配をなさればよろしいので……。」

重俊は深く啓發されたところがあるかのやうな感激をその顔に浮べて、

「なるほどな、そこまでは考ひつかなんだ。……眞佐、今年はやつて見る事が澤山殖たぞ。ウム、面白いの。」

「まア、ほんとにいろいろの方法があるもんでございますわね。」

島田は眞佐子の前に何とも云へぬ面目を施こしたやうな氣がするのであつた。

この話中にまた二三人の菊見客が、下男に案内されて裏口から庭先へ廻つて來た。やはり菊仲間があるらしく、重俊はその人達を見ると「やア、よくお出でぢやの。」と、聲をかけた。

それはいづれも腰の低い、町人風の人達だつた。

「島田さん、少しゆつくりお茶でも飲んで、下さい。今一寸あの人達の相手をして來るから……。」

重俊は宗三郎をそこに残して、頻りに菊花壇に見入つて居る人達のところへ出かけて行つた。

宗三郎はたゞ一人眞佐子と相對する事となつたので、手持不沙汰のこそばゆいやうな氣がしたが、何とか話の緒を引出さうと焦つて、一寸菊花壇の方に眼をやりながら、

「實にお美事な出來榮で、お父様もよほど御満足のやうで居らつしやいますよ。」

「はい、今年は上作なものですから、父はほんとに上機嫌で居りますの……。それに今年は實生もいゝものが澤山出さうだと、どんなに楽しみにして居りますでせう。來年はまたあなたにいろいろの事

を教へて頂いたから、すつとまたいゝ實生を出して見せるんだなどと、もう此節は菊の事にばかり夢中になつて居りましてね、外の用事は何にもかも放つたらかしてございますの。」

真佐子が馴々しくしんみりした調子で話をしてくれるので、宗三郎は電氣でもかけられて居るやうな、何とも云へぬ快よい感覺に酔はされるのであつた。

「さうでございますか。私のやうな青二才の申す事でも熱心にお聞下さるので、私もどんなに張合があるかも知れません。……併しほんとに高尚なお楽しみで、結構でございますな。」

「え、外の道樂よりは、人を楽しませるだけでも結構ですわ。あなたも花はお好きさうで居らつしやいますわね。」

「花卉園藝をやりましたゞけに、自然花に親しみを持つことになつたやうです。」

「それに短歌もお作りになるんでございませう、ですから自然や花はあなたのお友達で居らつしやいますわね。」

「いや恐縮です。」と、顔を染めて頭を押へたが、何だか自分を理解してくれて居さうな真佐子の口ぶりが、少なからず彼の心を明るくした。

一寸話が途切れた後、

「勅使河原さんは、その中にまたお見えになるでせうか。」と、宗三郎は真佐子の顔を見たが、何だかさう云つて了まつた後で、氣がさして目を外せた。

「どうぞございますか。氣紛れやさんですから、思ひ立つとすぐ來るんでございますの……多分その中またまるるだらうと存じます。あなた、この前は大變御迷惑をなすつたさうでございますね。」

宗三郎は顔を擧げると、何もかも知つて居るといふやうな笑ひかけた眼付をして、じつと自分を見て居る真佐子の視線にぶつかり、狼狽したやうに顔を染めて、

「いゝえ、ちつとも迷惑などはいたしません。非常に御馳走になつたので、お氣の毒に存じてゐるんです。」

宗三郎はふと實が自分の告白を、すつかり真佐子に云つて了つて居るのではないかと思ふと、胸は不安に波打初めた。もうすつかり云はれて了つて居るなら、自分は極りがわるくて、おめく真佐子と膝を交へては居られないと思ふ一方、併し實が何もかも云つて了つてあるのに、真佐子がこの通り好意を見せて居てくれるのなら、自分の戀は決して絶望ではないのだと、そこに光明を見る心地もするのであつた。

「舞妓などをあなたに御覽に入れたんですつてね。」と、真佐子はすつかり宗三郎を呑んで居るやうな

調子で笑ひながら云つた。

「勅使河原さんはそんな事まであなたに申しましたか、え、實はどうも……面くらひました。」と、宗三郎は初々しくまた顔を赤くした。

「意地のわるい實さんですわね、あなたのやうな方にそんなものを御覽に入れて……。」

「お嬢さん、勅使河原さんは私の事をあなたに……何とか申したでせうね。」と、極りが悪さうにその實力一杯の戀をその眼に籠めて眞佐子を見たが、すぐ自分の露骨になりかけた言葉をはぐらかすためにつけ加へた。「話にならない田舎ものか何ぞのやうに……。」

宗三郎のその眼に出逢つた時に、眞佐子はハツと思つた。實に警戒すると誓つた言葉が、電光のやうに閃めいた。宗三郎が自分に戀をして居るといふ事を確かめたゞけで、彼女には充分であつた。この上初心な宗三郎を深入らせてはいけないと、自分の本能が彼女に囁くのである。

實際宗三郎に戀されて居るといふ事が、彼女の性的誇を満足させるだけで、彼女にはその戀を受入れる心の用意は何一つなかつた。と云つて宗三郎を弄ぶやうな考も微塵あるのではない。この上餘り親しい態度を見せてはならないと、心づくと共に、彼女はそこに一種の恐怖をさへ感ずるのであつた。

「いゝえ、何にもそんな事は申して居ませんでした。」と、今までの親しげな濕味のあつた調子と變つて、乾いた、冷たい調子で彼女は答へた。

女の顔にも大理石のやうな冷たさと、何か宗三郎の心を暗くするやうな威壓があつた。

「さうでしたか。」と、宗三郎は溜息をつくやうに云つた。

宗三郎の心が俄かに打つて變つたやうな眞佐子の態度に、云知れぬ物足らなさを感じた様子は、その暗くなつた、物悲しさうな彼の顔に讀れた。

眞佐子は自分の一舉一動が、宗三郎を左右して居る事を明らかに見た。

風采は揚らないが、眞摯な、輕薄なところのない、どこか頼母しげな青年であることを眞佐子は考へて見た。それだけに自分は今デリケートな位置に立つて居る事を適切に思つた。

「戀は遊戯ではない、自分に取つても相手に取つても。」と、彼女は心に呟やいた。

「私はほんとに警戒しなければなら、かつたのだ。少しでも島田さんの心を誘つてはならない。」
丁度その時父の聲が聞えた、

「眞佐、光にさう云つてお茶をいゝへ……。」

菊見の客は今床几に腰を据ゑたところであつた。

眞佐子はそれを機會に、ほつと救はれたやうに宗三郎の前を離れた。

李枝子の手紙

宗三郎がその日一日眞佐子の謎のやうな態度を解きかねて、煩悶したのは事實であつた。併し始めてあんなに親しく、自分に打解けて話しかけたりしてくれた事を考へると、眞佐子が自分に悪感を持つて居ない事だけは、推測することが出来ると思つて、自から慰さめるのであつた。

實とはその後文通をして居るが、實の方から眞佐子の事について、何一つ云つて來ないのは、限らない物足らなさの一つであつた。眞佐子に自分の事を打明けて話して了つたのか、それとなく巧く云つて置いてくれたのか、何も云つてくれる機會がなかつたのか、少しも分らなかつた。若し自分の事を出したとすれば、たしかに好意を以て話してくれたに相違ないとは信じながらも、それ等の點に對する不安は絶えず彼の心を領した。それかとて彼は、露骨にその事を實に糺して見るほどの勇氣もなくて、今日まで過したのであつた。

今まで宗三郎に戀されて居るといふ事を、只性の誇としてのみ満足して居た眞佐子は、この問題を眞面目に考へなければならぬ事を感じると、少し氣が、りになり始めたのである。自分の理想とし

て空想に描かれた男と、宗三郎との間には可なりの距離がある。實のいふ通りに宗三郎は自分の対象とするには、不似合の田舎ものであることも事實であつた。

若し今假に宗三郎が戀を打明けたとしたなら、自分はきつぱりと何の未練もなく斷つて了ひ、潔く彼に斷念せしめる事に、何の躊躇するところではないと思つた。……併し彼女の心には新たな悩みが生れた。それは自分でもハッキリと意識の出来ない不安の觀念であつた。その不安の中には、宗三郎の執着する恐怖の片影の影響して居る事も推測された。

宗三郎が歸つてからも、眞佐子の心は暫らく落ちつかなくなつたが、併しその不安とても、まだ深い根柢があるものではなかつたので、自分の仕かけた仕事に取りかゝつて居る中に、いつか宗三郎の事などに屈托する事を忘れて、明るいつもの通りの氣輕い心持に歸る事が出来た。

その日の夕方眞佐子は従姉妹同志の李枝子から手紙を受取つた。李枝子は父の妹の娘で、去年學習院の女子部を出た、眞佐子よりも一ツの姉であつたが、二人は始終離れて住んで居りながらも、眞の姉妹を見るほどに親しい仲だつたのである。一月や夏の休みにはきつと李枝子が京都に来るか、眞佐子が東京に行くか、或は旅で落合ふかして居た。今年の夏は返子で一緒に海水浴をして居たのである。

眞佐子は懐かしい李枝子の手紙を手にしなから、この夏その返子で眞佐子が去つてから、李枝子の

上に起つたローマンスを、いつにない憧憬心を以て思ひ起して見た。

李枝子等は一週間ほど返子に居残つたのであつたが——もうそのころは避暑客も大抵は土地を去つて、海水に入るものも極めて少なくなつて居た——或日游泳の可なりに上達した李枝子は、友の一人と共に大膽にやゝ沖の方へ出て見た。出るは苦もなく出たけれども、いざ歸らうとなると、思つたよりもズツと沖に來た事を始めて心づいた李枝子は、俄かに怖氣づいて狼狽すると、もう癒れたやうに泳ぐ氣力が盡きて了つた。彼女は聲を絞つて助けを呼んだが、李枝子ほど沖へ出て居なかつた友はどうする事も出来なかつた。友も狼狽へながら、聲を合はして助けを求めたのである。

貸ボートが二三隻その邊に浮んで居たが、一番近くに居たボートが聲を聞きつけて懸命にオールの限り漕ぎよせて來た。さうして李枝子は氣を失ひかけて居たところを救はれたのである。そのボートには清水といふ法科の大學生が只一人乗つて居た。第二のボートも漕ぎよせて來たので、よし第一のボートがなくとも、第二のボートで李枝子は、當然救はれる運命の下にあつたのである。

併し李枝子は全く清水を自分の生命の恩人だと考へて了つた。無論第二のボートがあつたとしても、清水が恩人でないといふ否定の理由にはならなかつた。李枝子一家のこの大學生に對する感謝の念も李枝子に譲らなかつた。かくて李枝子の恩人であり、李枝子を救つたといふ美名を得た幸運の大學生

と、李枝子母子おつこの交際はこの時から結ばれて、返子げしから引上げて歸つて來ると、清水は親しく李枝子方かたに出入する親近者の一人となつた。

ローマンズはそこに生れたのである。李枝子と清水とはすぐに戀に落ちて行つた。李枝子はその甘美な戀の成行を眞佐子に告白せずには居られなかつた。手紙の都度つぎに清水の事を書いてよこすので、眞佐子は李枝子の告白前に、早くも二人の戀を想像して居たのである。その上に二人の戀を結びつけるに都合のいい事は、清水が資産家の息子むすこで大學の成績もよく、さる大會社と卒業後の契約まで結ばれてあるといふ事だつた。最近に叔母から父のところへ手紙が來て、双方に異存がなければ約婚やくこんさせたいと思ふがと、父の同意を求めて來た事や、父がそれに同意した事を知つて居る眞佐子は、きつとその事について書いて來たのだらうと、半ば羨やましいやうな心持で手紙を開封して見た。

手紙は果して清水と約婚の出來た事と、結婚は多分來春清水の卒業と共に行はれるだらうといふ事を報しらせして來たので、それに約婚から結婚までの最終處女期の、楽しい空想を無遠慮に書かつたものであつた。

それを讀んで行く中に、眞佐子は従姉の幸福を喜ぶと共に多少嫉妬しどに似た感情の伴ふのをも感じた。自分が局外者であり、清水しみずといふ大學生を知つても居ないだけに、その大學生を李枝子のやうに

「崇拜」する心には素もとよりなれなかつた。李枝子の今までの手紙の端々はしに露骨に見せたり書いたりして居る清水に對する彼女の崇拜は、時には眞佐子に馬鹿々々しく思へる事さへあつた。従姉いとこが清水に救はれた事からその「義俠」に感激して居る事は、無理もない事であるとしても、その感激を人に強いふるやうな、従姉の手紙には、小さな反感を持つ場合がないではなかつた。返子げしでのあゝした場合、誰でも李枝子を救ふのは當然あたりまへで、それは誰にも出來る事であり、別に危険を賭かしたといふでもないの、何もそれだけが「義俠」の極印ごくいんにはならぬと、眞佐子は思ふのだつた。

併し清水が實際義俠心に富んだ、男らしい男であるならば、従姉は幸福であると思つた。そしてそれは全く義俠心に富んだ男なのかも知れないと思つた。彼女かみはいづれにしても、従姉に感激を與へた清水の「義俠」が、素より街まちつたものであらうと少しでも邪推した事はないのであつた。たゞ清水の事を従姉の手紙を通して見た彼よりも、割引して考へて居るだけであつた。

李枝子の手紙はたゞそれだけではなかつた。妙に眞佐子の心を焦立こせたのは、その最後に、この上はあなたにも近く自分と同じ幸福の來る事を祈つて居る、母もその事について心配して居る、あなたにも是非學士をといふのが母の希望であるが、私も母と同じ考で居る、伯父さんもまさか是非とも海軍の若い將校をと望んで居らつしやる譯でもあるまいと、書添へてあつた事であつた。

父が自分の結婚問題についてどんな考を持つて居るか、自分は一度も父から話された事もなければ、父の意見を推測し得る何等の暗示ヒントを與へられた事もなかつた。従つて父が自分に海軍の若い將校をと望んで居るものと想像する根據を、自分は持つて居ない。李枝子がさう云つて來たのは、單に父が海軍の將官であるといふ事から出發した、意味のない推測なのか、でなければ叔母にだけ父がさういふ意見を漏らした事のあるためかでなければならぬと考へた。自分は軍人の妻になる希望は少しも持つて居ないから、父がその意志で居るとすると、その問題で父と衝突を來す事がないとも限らぬと思つた。併し自分を深く愛して居る父が自分の意志を顧みてくれない筈はないと思ふので、その點には大して不安を感じなかつた。

たゞ叔母や李枝子が是非とも大學出身のものを望んで居る事が、眞佐子の心に焦々こらこらとした、反感に似た暗い蔭を投じたのである。叔母や従姉が大學の卒業生を良人きんじんとして、資格の最も優れた條件であると思つて居る事が、妙に眞佐子の心を刺戟した。何だか眞佐子は宗三郎を自分の對象たいしやうとして考へた事が、自分自身に對する侮辱であるやうにも思はれて來た。萬一宗三郎を自分が擇んだとした場合、叔母や李枝子がどんなに輕蔑の眼で見るとあらうと思ふと、それは自分の堪へられる事ではなかつた。それだけでも自分は宗三郎の戀を容れることは出來ない。……と思ふと同時に李枝子に對する反抗心

の藥いばしのやうなものが芽ぐみ出して來た事も事實であつた。大學の卒業生が何だ、誰でも大學などは出るではないか、學士といふ事が何の誇にもならないほど、時代は進んで來て居るではないか、それは人格の問題とは何の關係もない事なのだ——そんな事も考へた。

併しさういふ小さな反抗心もすぐ痕あとなく消えて、彼女は従姉にあて、その幸福を喜び、未來を祝福する返事を書いた。

その夜眞佐子は父とその話をした。

「お父さん、李枝さんから先程手紙がまゐりましたのよ。清水さんとの結婚がいよ／＼成立つたのですつて……。」

「お、さうか。」と、父は豫期して居た事なので、當然あたりまへだといふ風で、「まアお目出度いの、李枝も嬉しいぢやらう。」

「叔母さんもどんなにか御満足ですわ。……結婚は來年清水さんが卒業なすつてからになさるお考らしいのよ。」

「さうだらう。卒業の祝ひと一緒にするがよい。李枝の結婚が濟めば今度はお前の番ぢやの。」

それは父が自分の結婚について最初に語つた詞なので、眞佐子は胸騒むねさわぎと共に俄に不安を覺ゆるの

を、何気なく紛らしながら、

「私は當分結婚なんかせず、お父さんと一緒に居りますわ。」

「俺もお前を手離したくはないが、俺のためお前の婚期を後らす事は出来んからの、いつでもいゝ縁さへあれば、お前を手離さなければならん。」

「でもお父さんが一人ほつちになつたらお可愛相ですもの。」

「そんな事はお前が心配せんでもよい。……俺も考がないでもないが、結婚についてはお前もよほど慎重に考へて居て貰はなければならん。結婚は自分の爲でもあるが、同時に家のためぢやからの、お前の意志も尊重するつもりぢやが、俺の意志も尊重して貰はなければならん。それだけの事は始終心に持つて居て貰はんければのう……。」

「はい……お父さんの御同意なさらないやうな結婚をいたす考はございませんわ。」

「それでいゝ、その考をいつも忘れて居てくれなければ、決して間違は起らぬ。俺はお前を信じて居るから、一々お前に干渉はせぬつもりぢや。だが決して俺の期待を裏切るやうな事をしてくれるな。」

「はい。」と、答へたが、父の期待の目標がどこにあるかは、眞佐子にはハッキリ判らなかつた。

「母が居ると何かの時に、お前も遠慮なく相談が出来てよかつたのぢやが、その母が亡くなつた事を

思ふと、俺はお前が不憫でならぬ。これからは云悪い事でも俺に遠慮なく打明るがよい。」と、父はいつになくしんみりとした調子で云つたが、父の眼に亡妻を偲ぶ涙のにじんで居るのを見ると、眞佐子も急に物悲しくなつて、「はい。」と云つたまゝ、同じやうに涙ぐんだ眼を伏せた。

娘の涙を見て。

「いや、お互ひに母の事を云出すではなかつた。眞佐子、勘忍してくれ。」

暫らく沈黙のあつた後、

「お父さん。」と、眞佐子は父を見上げて、「李枝さんの手紙に、お父さんは私を海軍の軍人の妻になさる思召でもあるやうに書いて來ましたが、そんな事はございませぬわね。」

「そんな事はない。そんな考を持つた事もあつたが、海軍の將校となると、別して若い中は、船の生活が主ぢやから、若い妻に氣の毒な家庭を作らせる事になる。そこに悲劇や間違ひの起る例も少なくないから、俺はとうにその考を捨て、居るのぢや。」

「さうでございますか。」と、眞佐子はほつとして云つた。

父の「考がないでもない」と云つた言葉の端が氣にはなつたが、それを突込んで聞いて見る氣にはなれなかつた。

「でも私、一三年はまだお父さんのお傍そばに居りますわ。ほんとにお父さんがお氣の毒ですもの……。」
と、眞佐子は感傷的に云つた。

感激の瞬間

眞佐子はその後はなるべく宗三郎を避けるやうにして居た。顔を合はせる場合でも、出来るだけ短い挨拶をして済して居た。宗三郎は果樹の剪定せんていのため、三四日つゞけて通つた事もあるが、もう眞佐子はお茶の相手には出なかつた。重俊と茶を取つて居る間に、眞佐子の居室くまの方からピアノの音などが洩れて來ると、宗三郎は涙ぐましいやうな遺瀨やるせない氣持になつた。剪定が済んでも、菊の花の交配まじりあひの媒助の手傳をするために、彼は三日にあけす三輪田方へ尋ねて來た。宗三郎には眞佐子が一度自分に親しんで來ながら、すぐさま離れて了つた態度が、どうしても了解出來ないので、その原因をいくら自分に求めて見ても發見されなかつた。今日このごろ何とも知れぬ物淋しさが、宗三郎の心にくひ入るのであつた。

宗三郎が彼女かれの打解けない態度のために、悲觀しかけて居ることは眞佐子によく解つた。物悲しさをううに慇うへるやうに自分を見る宗三郎の眸ひとみ子に出逢ふ度に、眞佐子は何だか宗三郎が氣の毒に思へて、優しい言葉をかけやうとすることもあつたが、併し多くの場合自分を殺してゐた。

從兄の實からは時々手紙が来た。いつも手紙のやり取りはして居るのであつたが、從兄の手紙の調子が、このごろ何となく變つて居ることに眞佐子は氣づいた。戀しくて逢ひたいといふやうなことが書いてあるのが、今までの從兄姉同志の、單なる相愛を表示して居るものでないらしく思へて、顔を赤めたり、眉を擧めたりした。併し眞佐子は別に深入して考へやうとはしなかつた。さういふ手紙の都度從兄を懐しいものには思ひながら、二人の間の戀愛といふやうな問題には、嘗て觸れて見た事はなかつたのである。が紅葉には來るといふ手紙を受取つてから、實の待たれるやうな、また恐れられるやうな、今までに嘗て經驗せぬ心の軽い動搖を覺えるのが、自分にも何故か分らなかつた。

併し嵐山の紅葉が美事に染出されても、實は不思議に出て來なかつた。實の來ぬのが物足らなくも思はれて居る時、鹽原から葉書が來て、創作の材料を得るためここへ來たので、京都の紅葉は末ごろでなければ見られまいと云つて來た。なぜかそれを見て眞佐子は心が安まるやうに思つた。尤も實の手紙はどうせ當にはならなかつた。眞佐子は氣紛れやさんつけて置く位で、思ひ立つとすぐにも飛んで出て來るが、來る／＼と云つてよこしながら、氣が向かなければ、滅多に出て來る事のないのが、實の癖だつた。

紅葉も菊も盛りを過ぎた或日の午後、昨日重俊を尋ねたばかりの宗三郎は、今日は簿記學校の課業は休みながら、また尋ねて行くのも氣がさすので、紅葉のある車前神社の方でも散歩して來やうと考へ、その方角に暖かな郊外の野道を辿りながら西陵院を出て行つた。云分のない小春日和なので、嵐山行や歸りの落ちこぼれが、その邊までも散らばつて、平生には見られぬ人影がそこ、こにあつた。

宗三郎が鐵道線路間近に來た時、大根畑に日のあかくと照つた上を、赤蜻蛉が群がり飛んで居て、小兒等がそれを追廻して居るのを見た。一人の小兒は小さな籠にぎつしりと詰るほど赤蜻蛉を詰込んで居た。宗三郎はその小兒の傍へ來ると、そんなに蜻蛉を取つてどうするのだと聞いて見た。小兒はそれを陰干にして置くと、百日咳の藥になるので、藥種屋へ賣るとお金になるのだと答へた。

宗三郎はこんなものが藥になるものかと思ひながら、無益の殺生をするのでなければ、自分も取つてやらうと、小兒好の彼は、すぐ小兒の仲間入をして、赤蜻蛉を追廻し始めた。その眞赤な緋のやうな色をした小さな昆虫は、普通の蜻蛉と違つて、動作が極めて遅緩なので、容易に棒で落す事も出來れば、止つたのを手で捕へることも出來た。宗三郎は興に乗つて蜻蛉を捕へて居る中、うか／＼と鐵道線路のすぐ傍に來て居た事に氣づいた。

彼はその時大きな竹藪の屈曲の蔭から、嵯峨驛を出て來たばかりの上り列車の機關車が、恐ろしい

黒煙を吐いて、突然姿を表はしたのを見た。と同時に六ツ七ツの男の兒が、うかく線路の枕木の上を飛びかはして居る赤蜻蛉を、取らうと狙ひよつた姿をも認めた。赤蜻蛉に氣を取られた小兒は、自分かすぐ恐ろしい怪物の餌食になる事には氣づかなかつた。宗三郎はハツと思つたので、聲を限りに呼ばはつた。

「危ないッ！」

彼が聲をかけた時、畑に鎌を取つて居た百姓も心づいて同じやうに叫んだ。

が、うろたへた小兒は、却つて機關車の方に走らうとしたので、その一瞬間に機關車の轍にかけられねばならぬところであつた。蒸汽汽鐘からもすさまじい警笛が鳴響いた。

宗三郎の頭腦はこの時異常にハッキリとした。彼はその同じ瞬間線路の向ひ側に、車前神社の方から來たものか、どうしてそこに居たのか知らぬが、一三人の人影……人影といふよりはその一人一人の顔がハッキリとその危機一髪の際に印象された中に、眞佐子の顔が鮮かな輪廓を取つて浮んで見えたのである。

線路の向ひ側の畑中にも一人の百姓が立つて居た。それが警笛に驚かされて、呆氣に取られたやうに線路の上の小兒を見つめた姿も、宗三郎の眸子にハッキリと映つた。すべては同一瞬間の出來事であつた。

あり、印象であつた。

誰もが呆氣に取られて居るばかりで、今機關車に挫がれやうとする小兒を助けやうとするものは一人もなかつた。

どういふ衝動が、如何なる力によつて與へられたかを私は知らない。突然疾風の如く線路に駈込んだのは宗三郎である。人々がハツと思ふ間に、彼は力の限り小兒を線路の外に突き飛ばした。が同時に自分は機關車に觸れて同じやう線路の外に刎飛ばされて了つたのである。

宗三郎が幻影を見たのでも何でもなかつた。眞佐子はそこに居合したのである。それは全く偶然の事で、彼女は父の用事で車前神社の近所まで來た歸途、近道から線路を横切らうとして、折しもそこへ來かかつた次第であつた。

頑是ない幼兒が今轍の露と消えやうとするのを見た瞬間、眞佐子の心臓は脅えて、その光景を見るに忍びずに、目を閉ぢやうとした。けれども宗三郎がそこに飛込んだと知つた時に、緊張した彼女の身體は木の葉のやうに震へた。そして幼兒が救はれた代りに、宗三郎の身體がはづみを食つた球のやうに線路の外に投げ出されたのを見た瞬間、蒼白になつて氣を失はうとした。

彼女が心を取直した次の瞬間には、人々が宗三郎の周圍に駆けよるのを見た。眞佐子も後れては居

なかつた。恐ろしい掛念けねんと強い感激に戦慄しながら、人々の後から駆けよつて見ると、宗三郎は絶命したのか、氣を失つたのか、目を閉ぢたまゝそこに倒れて居た。

真佐子は前後を忘れて、そこに跪くと、宗三郎の肩に手を置いて、

「島田さん！ 島田さん！」と、懸命に叫んだ。

「あなたのお知合ですか？」

「島田さんといふお人ですか？」

さういふ問が自分にかげられるのを、真佐子は夢のやうに聞いた。

「島田さん、お氣をたしかに持つて下さい。」

真佐子は緊張きんちやうし切つた心の底から叫ぶのであつた。

列車も進行を止めたので、車掌もかけつけて來た。車掌や人々は宗三郎の身體を調べた。別に怪我けがをして居るらしいところもないといふのであつた。

「たゞ氣絶をしたゞけらしいやうです。一杯にブレーキをかけたのですから、刎ねられても大した事はない筈です。」と、車掌は云つた。

真佐子はさう云はれても氣が氣ではなかつた。

「島田さん！ 島田さん！」

その聲が通じたのか、宗三郎は漸く目を睜みつぶいた。

宗三郎の眸子ひとみが、自分に伸か、つて居る真佐子の眸子ひとみに、真先に出逢すと、彼の視線はそこに釘付にされて、眼頭めがしらからは見る／＼湯のやうな涙がこぼれ落ちた。真佐子に介抱されて居ながら、このまま死んでもいゝといふやうな強い感激がそこに讀まれた。真佐子の眼にも偽らぬ涙が浮んだ。

「あなた、お氣がつかましたか、どこもお怪我けがはなさいませんか。」

宗三郎は自ら起上らうと努力したが、それは自分の力に及ばなかつた。

「身體中打のめされたやうに痛いです。」と、彼は眉を蹙しかめながら幽な力のない聲で云つた。

人々が助け起さうとしたが、宗三郎は右の股ももの方から半身にかけ、何とも知れぬ苦痛を感じて、起つ事は逆も出来なかつた。

兎に角早く醫者のところへ連れこまなければならぬ——それは焦眉せうびの問題であると、真佐子はやき／＼思つた。

驛から近かつたので、驛員の二三が駆けつけて來た。車掌は後を驛員に托して列車に戻ると、列車は再び汽笛を鳴らしながら進行を繼續した。

宗三郎を知つて居るのは眞佐子だけなので、眞佐子がつかり親類扱ひをされた。驛員の盡力で俾が来ると、宗三郎をそれに助け乗せ、どこまでも係り合の眞佐子がつき添つて、嵯峨の町にこのごろ開業された、さる私立病院に運ばれた。

診断の結果は右の大腿骨が折れて居るらしいといふのであつた。それを聞いて眞佐子は肌を寒くしたが、併し骨折は多くの場合左迄心配するほどの事はなく、都合よく行けば案外短時日の間に完全に癒着するものだと聞いて、いくらか安心する事が出来た。

取敢ず西陵院の方へ通知されたので、和尚も驚いて駆けつけて来た。眞佐子は和尚が来たので救はれたやうに思つたが、和尚は眞佐子から遭難の時の模様を聞いて、そこに眞佐子の居合はした事を喜んだ。

和尚はよほど感動した様子で、人々の前に一命を賭した宗三郎の義侠を、あらゆる言葉を以て賞へた。助けられた小児の父親が病院へ駆けつけて来たのも和尚が来て程なくだつた。すべてに感激の空気が溢れて居た。こゝに居る間にも眞佐子は、嘗て自分の経験せぬその深い感激の氛圍氣の中に浸つて居る自分自身を見出した。

和尚と驛員との間に換はされた談話から察すると、宗三郎の治療に要する費用は、鐵道院の方から

出るらしく、別に外科の専門醫をも京都から迎へて適確な診断をさせるといふ事なので、眞佐子はそれは人々が當然の事をするのだと思つて、安心した。

和尚に萬事を頼み、宗三郎にはまた来るやうに云ひ置いて、眞佐子はわが家に歸つて来たが、實生畑を見廻つて居た父の姿を見ると急がはしく近づいて行つて、

「お父さん、お使には行つてまゐりましたが、途中でね……あの島田さんが大怪我をなすつたのですよ。」

父はまだ昂奮の取れない娘の様子とその詞に驚かされて、

「なに、島田が大怪我をした？ どうしてぢや。」

「汽車に刎ねられて、足の骨が折れたらしいんですの。」

「汽車に刎ねられた？ どうしてそんな馬鹿な眞似をしたのか。」

「い、え、外の小児を助けるため線路に飛込んで、自分が大怪我をなすつたんです。」

眞佐子は掻いつまんで、宗三郎が遭難の顛末を話して聞かした。

父はその話を聞くと同じく感動された様子で、

「ウム、えらい事をしをつたな。併し感心じや、よく小児を助けたの……誰も近所には居なかつたの

か。」

「い、え、百姓や何か、居ましたけれども、呆氣まうけに取られて見て居るだけなんですもの、もし島田さんが飛込まなかつたら、あの兒こはたしかに轢殺ひきころされて了ひましたわ。」と、真佐子はなほ興奮を覺えながら云つた。

「ウム、いよく感心ぢや。併し骨を折つては氣の毒ぢやの。俺わも早速見舞つて来てやらう。羽織を出してくれ。」

父は真佐子を従へてわが家へ入ると、真佐子に出させた羽織を被り留守を頼んで出て行つた。

真佐子は父を送り出すと急いで自分の部屋へ入つた。一人になつて考へて見たかつたのである。

何か慌おどろたゞしいやうな、自分自身の心が革命を起して居るやうな興奮状態はまだ續いて居た。

彼女の眼の前には、まざ／＼と恐ろしい瞬間の光景が再現されるのである。

自分があんなに興奮した事も、感激した事も、生れて始めてであつた。そしてさういふ興奮や感激は、一生に何度も經驗する機會のあるものではないと思つた。少なくともそれは自分の一生涯忘れることの出来ない感銘を與へられたのであると思つた。

あの場合宗三郎が居なかつたら、小兒こどもはたしかに殺されて居た。誰も危険を冒して小兒を助けやうとするものはなかつたのだ。それだけに宗三郎に取つて、それは生命賭いのちがけの仕事であつた。それは真劍でなければ出来ない事であつた。深い義侠心と大きな勇猛心がなければ出来ない事であつた。そこに美しい、犯し難い、貴い人間性の閃めきを自分は見たのだ、宗三郎のなし遂げた事は、人の前にも神の前にも誇ることの出来る立派な行爲である。

かうした感激は自分ばかりが味はつたのではない。あの時の目撃者がいづれも深い感動に支配された事は明かであるばかりでなく、西陵院の和尚や、冷靜な父さへあの通りに感激した事から見ても、宗三郎の行爲が、何人をも動かすだけの、美しい貴いものである事は、決して自分の誇張した感じから来る過つた判断ではないと、真佐子は考へるのであつた。

真佐子はまたあの場合、若し線路の上に立つたのが、あの小兒こどもでなくて、自分であると假定したら、どうであつたらうと想像して見た。縁も由縁ゆかりもない小兒こどもをさへ、生命賭いのちがけで助けた宗三郎が、何の躊躇ちゆうしゆするところもなく、自分を抱へ出して助けてくれる事は、推測するまでもなく明白な事だつた。そしてその場合自分だけは助けられても、宗三郎はきつとあの恐ろしい機關車に粉塵こなじんされたに違ひあるまいと思ふと、われにもあらず戦慄するのであつた。

ふと眞佐子の脳に閃めいたのは、李枝子の手紙の事であつた。——手紙の都度殆んど何か書いて来ない事のない清水の事であつた。清水に救はれた、め、清水の義侠を誇張して感じて居る李枝子の事を、秘かに片腹痛く思つて居た眞佐子は、その清水の「義侠」を宗三郎のそれと比べて見ずには居られなかつた。そして今日救はれたのが小兒でなくて、自分であつたと假定した場合、二人の行爲に何の軽重をつける事が出来ないであらうかと問を設けて見た。併しその答は考へて見る迄もなく常識で判断が出来た。二人の救はれたといふ事は同じであつても、救つた方から云へば、一方は生命を賭しての事であり、一方は何等の危険を冒したものでない以上、それは誰にも出来る事であつた。

宗三郎の「義侠」に比べれば、清水の「義侠」などは足元へもよれない事だと眞佐子には思へた。眞佐子は宗三郎を呼生やうとした時、自分か懸命になつて、人目にも何も構つて居られなかつた事を思ひ起した。そこには自分の感情を偽らうとする何もものもなかつたのだ。自分が宗三郎を呼生やうとした叫びは、心の底から出た眞劍の叫びであつたのだ。

同時に彼女は宗三郎が正氣づいた時、自分の上に休らへられたその眸子を忘れることは出来なかつた。その眼からは感謝の涙が泉のやうに流れて出た。その眼光には死んでも厭はないとする感激があつた。宗三郎が若し不幸にして致命傷を受けて居たならば、彼は肩よく安らかに自分の膝に永遠の眠

を遂げたに違ひない。——自分はその時宗三郎のあの世への土産に何を囁いたらう！ 自分は彼を愛すると、彼のその勇敢な、美しい献身的行爲に酬ゆる一語を、彼の耳元に投げすに終つたら卑怯ものである！——と彼女は考へた。同時に彼女はたゞ一人顔を赧らめたのである。

折柄弟の俊雄が外から歸つて来たので、

「おゝ、俊ちゃん、島田さんが大變なのよ。」

「姉さん、大變てどうしたの？」

「車前神社の手前の方の鐵道線路でね、今轢かれやうといふ小兒を飛込んで助けたのよ。その代り自分が大怪我をしちやつたのよ。」

さう云ひながら、どんな感動を弟に與へるかを見た。

俊雄は遺に驚きながら、

「どんな怪我をしたの？」

「足の骨が折れちやつたらしいのよ。」

俊雄は色を變へて、

「痛いだらうね。」

「馬鹿だね、この人は……痛いのは當然だわ。……併しえらいぢやないの、生命賭で人一人を助けたのだから。」

「ウム。」

「俊ちゃんはさう思はないの？ 俊ちゃんにそんな事が出来て？」

「ウム、えらいね。だけでも骨が折れちやつたら跛足になるだらう。」

「ならずに済むらしいのよ。ほんとに俊ちゃんだつてえらいと思ふだらう。」

「ウム、思つてるよ。島田さんはモ少しで死ぬところだつたんだね。」

「さうなのよ。お父さんが今お見舞にいつてらつしやるんだから、お歸りになつたら、俊ちゃんも行ってあけなきやアいけないわ。姉さんも一緒に行くから……。」

「今行つて来やうか。」

「お前一人行つたつて仕方がないわ、姉さんがついてつてあけるといふのよ……。」

李枝子

一時間ばかりして重俊は歸つて来た。

眞佐子は容態が案じられるので、

「どうぞございました。」

「大分發熱をして居る様子ぢやが、案ずるほどの事もあるまい。外にはどこにも別段打撲傷は受けて居らんのだや、重傷ではあるが骨折だけらしいから、その方の手當をすればよいさうぢや。尤も京都から外科の博士が見えるさうぢやから、その上でないとよくは分らんが……。鐵道院の方で引受けてくれる事になるらしいから、その方の心配もない。」

「さうでございますか、癒つても跛足になるやうな事は、ほんとにないんでせうか。」

「癒れば舊々通りになる。癒りかけに無理をしなければよいのだや。」

「さうでございますかね。」と、眞佐子はほつとしたやうに云つた。

「今西陵院の和尚から聞いたのだぢやが、何でも八九年前、島田が二十歳前後のころ郷里で小兒の溺れ

るのを助けた事もあるさうぢや。」

真佐子は眼を睜つた。

「そんな事もあるんでございますか。」

「園部の町中を流れる本梅川といふのががあるが、そこで小兒が溺れかけてるのを見て、島田が飛込んで助けたのぢやさうぢや、その時知事から表彰されたといふ事ぢや。」

真佐子はいよ／＼處女らしい純な感激に、再び浸されながら、

「まア、さうすると二度までも人の生命を助けたんでございますね。」

「今の若いものに似ぬ奇特な男ぢやの。」

「今度だつて表彰されるかも知れませんわね。」

真佐子はそんな事を云ひながら、心の中ではいよ／＼清水と宗三郎と比べものにならないことを思つた。

「警察からも来て聞取つて居つたから、いつれ具申されることぢやらう。一生に一度ならず、二度まで人を救ふといふ事は全く珍らしい事ぢや。」

「田舎のお家へは電報でも打つたんでございませうか。」

「西陵院の和尚からそれを相談したところが、島田が打つてくれるなとたつていふさうで、止しにしたさうぢや。……誰も親戚のものが來んとすると、可愛想ぢやから、お前も時々見舞つてやるがよい。」

「はい。」

父が歸つて來たのはもう暮近かつたので、夜に入ると、真佐子は弟の俊雄を連れて宗三郎を見舞つてやつた。

その時は京都から來た外科の博士が歸つた後で、やはり骨折である事が知れた、それが碎けて居ずに只折れて居るだけなので、癒着も早いし、何の心配もないと聞いて、真佐子は少なからず安心した。患者は脚にバンドを當てがはれて寢て居たが、四十度以上の發熱があり、意識が朦朧として居た。

彼は時々嚙語を云つた。

「危ない！ 危ない！」

「お嬢さん……僕このまゝ死んでも……本望です。」

はつきりとはないが幽にう／＼と云ふのである。それを聞いて真佐子は顔を赧くした。幸ひに

それは誰にも聞かれなかつたが、度々自分の名を呼ばれては困ると思つた。併しお嬢さんと云つたのは、それ一度きりだつた。

父が許すなら、そして世間といふものがないなら、自分がつき切つて一日も早く全癒さしてやりたいと眞佐子は思つた。——それは眞佐子の目醒た戀であるか、寧ろ單なる感激のためであるか、誰にも分らない事だつた。

その夜眞佐子はわが家へ歸ると、従姉の李枝子にあて、次のやうな手紙を書いた。それは何だか李枝子に書かすには居られないやうな氣がしたからである。彼等の日常生活に何か異つた事件があれば、それを題目に手紙を取りかはして報せ合つて居た二人の間には、別段不思議の事でも何でもなかつた。

李枝子さん。

今日は私の目の前で起つた恐ろしい出来事をお知らせしたいと思ひます。私は生れて今日ほど恐ろしい思ひをした事も、感動を覺えた事ありません。若しあなたが私の傍に居らしたつたら、あなたの心臓もきつと私の心臓と同じやうに鼓動したに違ひないと思ひます。

それは斯うなんです。

私が今日車前神社の傍まで行つての歸り、近道をして線路を踏切らうとする時、丁度嵐山の方から汽車が走つて來ました。そこには大きな竹藪があつて、そこで線路が曲つて居るため、ちつとも氣がつかなかつたのですが、汽車がそこを曲つた時に、俄かに汽罐車の音に驚かされたのです。と見ると線路の上に六ツ七ツの男が無心に蜻蛉を追つて居るのです。それを見た野良の中の百姓や、小徑の通行人が驚いて聲をかけました。私もハツと膽を冷して思はず同じやうに小さな叫びを出しました。小兒はたしかに汽車に轢かれて了ふ運命を持つて居たのです。

誰も小兒を助けるものがないのかと、私は女ながらも齒痒く氣が氣でない時、いきなり線路の中へ飛込んだのは、どうしてそこに來合はせたのか、私の知つて居るSさんといふ人なのです。その時はもう汽罐車が目の前に來て了つたので、私はその人も小兒と一緒に轢かれて了ふのではないかと、ハツとまた膽を冷したのですが、その途端にその人は小兒を危ふいところで線路の外へ力任せにつき出しました。ですけれども同じ瞬間にその人は汽罐車に刎飛ばされて了つたのです。

それを見た私はグラ／＼と頭が眩んで來て、そこに倒れて了ひさうになりました。何だかその人が小兒を助けたばかりに、英雄的死を遂げて了つたのではないかと思はれたからです。私は身體が

硬ばつて了ふほど緊張して、その刹那にびつしよりと汗をかいてしまひました。ところが幸ひにその人は死んでは居なかつたのです。一時氣絶したゞけと知つた時に、私は救はれたやうにほつとしました。そして心の底から神様に感謝せずには居られませんでした。併しその人は正氣づきはしても、重傷だつたのです。脚の骨が折れて了つたのです。おゝ、貴い犠牲！……私はさう叫ばずには居られませんでした。

救はれた小兒の母親はそこへ飛んで来て、小兒が無事にけろんとして居るのを見るとその人の前に跪いて嬉し泣に嗚咽しながら、何にも物を云ふことが出来ないのです。そこにも人の心の美しさは見られました。その母親ばかりでなく、その周圍に集つた人達の胸にこの貴い犠牲者に對する敬虔の心が期せずして湧いて居ることは、明かに入々の様子で察する事が出来ます。美しいものから感激の生れない道理がどこにあるでせう！

私は全く人事とは思はれず、深い、何とも知れぬ感動に靈魂の底まで浸して了つたことを自白します。私はかういふ恐ろしいけれども貴い經驗を一生の中にモ一度することがあらうとは思ひもありません。私はその人の勇敢な、義侠の行爲に對する禮讚の心を、如何なる言葉でも云ひ表はせない氣がします。あなたもきつと私のこの時の感激に心から同情を持つて下さる事を信じます。

最後に私はこの人はSさんといふ私の知つた人だと書きましたが、それは詳しく云へば田舎の農學校を出て、嵯峨に遊んでゐる人ですが、實さんの小學校のお友達だつた人ですから不思議でせう。今では俊雄に英語を教へて居り、お父さんの花粉媒助のお手傳へをしたりして居る人ですが、私はまだSさんとはよく話をして見た事ありません。先刻見舞に行つて來ましたが、發熱のためうとうとして居ました。併し心配するほどの事はなく、跛足にもならず済むさうです。私は一日も早くこの美しい行爲の主人公であるSさんの全快を神にかけて祈つて居ります。あなたもどうぞ蔭ながら祈つてあけて下さい。

暗い影

眞佐子が従姉の李枝子に送つた手紙に對し折返し次のやうな返事が來た。

眞佐さん。

あなたの感激に充ちたお手紙を拜見いたしました。私もお手紙を拜見して居る中に、いつかあなたと同じやうな感激の雰圍氣に浸つて行く自分を見出しました。それは全く誇張のない事實でございます。まして現場を目撃なすつたあなたの、その時の實感が、どんなに活々したものであつたかは、よく想像することが出來ます。私はSさんと仰しやる方の義俠的行爲には、全く御同情の外ありません。それが勅使河原の實さんのお友達だつた方だと伺つてはなほ更お慕はしくも思はれ、尊敬されもいたします。私もあなたと同じやうに、心からその方の御全快をお祈り申しませう。それは私の偽りのない感情でございます。

併し眞佐さん、私に無遠慮な批評をお許し下さるなら、あなたがそれほどに感激遊ばした事は、

現場の實見者であるあなたとして、殊に感情に脆い通性の持主である私達女性として、それは當然の事とは存じますが、單に冷靜な局外者として判断する時、あなたの感情はあまりに多くエキサイトされて居らつしやるやうに、私には思はれてなりません。あなたの純潔な、美しい感情をそれほどまでに高潮なさるには、もつと深い、精神的の意義がそこに結びついた時でない限り、多少感情の空費と云ふ事を思はずには居られない氣がしてならないのでございます。

假にあなたがその時の目撃者でなく、またSさんがあなたのお知合の方でなく、單に世間にさういふ事實があつたとして、冷靜に判断遊ばした時、私はその方の「勇敢な義俠の行爲に對する禮讃の心を、如何なる詞でも表はせない」と仰しやるほどの歸結に到著遊ばすでせうか。どうでせう。生命がけで人の子を救ふといふことは、美しい行爲であると申す事に、誰とて異存はありません。ですけれども縁も由縁もない百姓の子を、自分の生命を投出してまで救ふといふ事は、その人の行爲が自重を缺いた、あまりに無反省に近いものではないでせうか。その子も助け、自分も助かつたからこそ善かつたやうなもの、もし假に自分が無慘の横死を遂けたとしたらどうでせう。殊にその人には親もあり、兄弟もあり、また愛する人もあるとした時、どんな結果がそこに残されるでせうか。さうした場合、誰もその表面的な倫理的價値のために明らさまにその人を攻撃する事は

敢てしないでせうけれども、周囲の人々の内心には、思慮のない事をしてくれたと悔まぬものはないでせう。單に一時の衝動のため、生命の貴さを無視して、無謀の事を敢行するといふのは慎むべき事ではないでせうか。

私は自分の生命を無視することの眞に貴い場合は、今申上げました通り、もつとく深い、精神的の意義がそこに結びついた時にのみ、認められる事だと思ひます。

百姓の子が救はれたといふのは、あなたが救はれたものではありません。百姓の子でなくて、あなたが救はれたのならば、私は何の躊躇もなしに、そのまゝあなたの感激を無條件に受容れます。死んでも生きても實はどうでもよい——と云ふと語弊があるかも知れませんが——自分にも世間にも何の交渉もない百姓の子のため、犬死をしやうとしたその方の無反省を、あなたがお氣付きにならないのは、私には物足らず思はれてなりません。それは何等の自己感激のない、機械的の衝動がそこに働いたといふ以外、精神的に深い意義を見出す事が出来ないではありませんか。

眞佐さん、お氣に觸るかも知れませんが、私は斯うまで無遠慮な批判を申上げたのは、實は何だかあなたのお手紙で、或る恐ろしい不安に捕はれ始めたからです。それは外でもありません。——あなたが御自分の貴い感激を、そのSさんにお捧げになるのは、私達の少しでも干渉すべきことで

はございません。あなたの美しいお心の表現を誰が彼是申してよいものでせう。ですけれども私の恐れるのは——それは杞憂には極つて居りますけれども——あなたの持つて居らつしやる、もつと貴いものをまで、そのSさんにお捧げになるやうな結果が、それから生れはしないだらうかと申すことなのでございます。……失禮をお許し遊ばせ……そんな事があなたにある筈はないと信じて居りますけれども、一時の感激に冷靜の判断を失ひがちになる事は、私達の性に通有の缺點だと存じますから、よしあなたの感情をどんなに害する結果になるとしても、これだけは申上げて見ずに居られなかつたのでございます。そんな馬鹿なことをと、あなたがお笑ひになつて下さるやうなら、私に取つてこんな嬉しいことはありません。でも若しほんとにあなたの感情を害する結果がそれから生れたら……あゝ眞佐さん、私は心配で、心配でならないやうな不安に襲はれます。

戀しい眞佐さん、あなたはほんとに感情を害しては下さらないでせうね。あなたの唯一人の心の友を信じて下さい、いつも正しい理智と冷靜な判断を持つて居らつしやるのは、私よりもあなたの方です。どんな場合にもあなたがそれを失ふ事があらうとは考へられません。私はほんとに餘計な事を申上げました。私は安心して居てよいのでございました。いたくもない肚を探られたとお腹立になるなら、私はその腹立を甘受いたします。それが私にはどんなに満足でございませう。ほん

とに返す／＼も無遠慮な事ばかり申上げます。どうぞ失禮をお許し下さいませ。……

その手紙を讀終つた眞佐子は、異様の光と涙を宿したその眼にも示されたやうに、明らかに反感と侮辱を感じた。わけてもまづ彼女がの心を支配したのは強い反感であつた。李枝子から斯うした返事を受取ることは、あらゆる點において、彼女がの豫期を裏切るものだつた。一度大學生清水に救はれたためその義侠を極度にまで高潮して居る李枝子なら、誰よりもまづ自分の島田に對する感激を了解してくれりと考へて居たゞけそれだけ、眞佐子の反感は強く彩られるのであつた。

その美しさの點において、貴さの點において清水のした事とは比べものにもならない宗三郎の行爲を、ただ無謀の一語で突落して了はうとするものは何といふ冷酷な心だらう。誰にでも出来る單に機會の問題である清水の行爲に對して、齒痒いほどの感激を捧げながら、人のそれよりも何層倍か美しい、ほんとの義侠心の表はれを冷笑することは、何といふ醜い利己主義であらう。一人を助けたといふ事は、その人が大人であらうと小兒であらうと、またつまらない人であらうと何であらうと、それによつて評價さるべきものではない、誰を助けたところで一樣に美しい人道の表現でなければならぬ。そこに冷笑を許さぬ嚴肅な倫理的價値がある。まして神様の眼から見れば、それが百姓の子で

あつても、よしや自分の親兄弟であつても、その價値に何の相違もない筈である。もし打算的に人を救ふといふ事ならば、その美しい行爲の中にも、不純の分子が含まれるのだ。人の危難を見た刹那に、われを忘れ、あらゆる打算を超越して、その人を救ふといふところに人間性の閃めきが表はれるのではないか。そしてそれは決して誰にでも出来るといふ事ではない。必ずその人の持つ貴い人格の發現でなければならぬ。そこに純なる、貴重な倫理的價値を持つのではないか。自分がそれに感激を拂つた事を、無益な感情の浪費と見る事は清水に對する感激を高潮して居る李枝子の大きな矛盾でなくて何であらう。すべては利己主義から出發した極めて不公平な批判である。清水の李枝子を救つた行爲にこそ、どこに深い精神的意義があらう？……

併し眞佐子は腹を立てながら、手紙を見つめて居る中に、李枝子が故さらに宗三郎の行爲の價値を引下さうとして居る眞意が、だん／＼ハッキリして来るやうに思つた。李枝子はその倫理的價値を引下すのが目的なのではなくて、自分の宗三郎に對する感情に水を注さうとして居るのだ。自分が宗三郎に對する單なる感激から、モ一步踏入つた繊細な感情を持つ結果の生れる事を防がうとするためなのだ。——さう思ふと眞佐子は痛いところに觸られたやうな苦痛と羞恥を感じた。

併しそれならさういふ結果の生れることが、清水と李枝子自身の場合にだけ許されて、自分と宗三

郎の場合になぜそれを許すまいとするのだらう。李枝子はなぜそれを妨げなければならぬのだらう。……それは單に李枝子や李枝子の母が、自分にも李枝子同様、大學出の秀才？ と結婚させやうとして居るためではないか。

田舎の農學校などを出た男は、三文の値打もないやうに、李枝子や叔母の眼には映じて居るのだと思ふと、眞佐子の心は暗くなり、同時にまた反抗心が起るのだ。——李枝子等はたゞ學士といふ小さな名に眩惑して、遙かにそれよりも貴い人格を認める事を知らないのだ。理解がなければならぬ筈の李枝子までも、やはり知りつゝ、虚榮心の奴隷になつて居るのだ。さうした虚榮心に結びつけられて、無意義な、空虚な生活を送つて居る新夫婦が世間にはどれほどあるだらう。彼等の間には、いつか破綻が來なくてはならぬ。李枝子だつて今に思ひ知る時があるかも知れない。自分がもし結婚するなら、それは人格と人格の結合であつて、虚榮で築き上げた結婚でない事を知らしてやらなければならぬ。最後の勝利者は却つて自分であることを、李枝子のもう取返しつかない時に知らしてやらなければならぬ。……

眞佐子は次第に亢奮して來た。併し一旦投げられた陰翳はどこまでも彼女かの心を暗くするのであつた。宗三郎が學士であればと思つて、ハツと心を取直したりした。何だか自分の信念に根柢がないのかと思ふと、意志の弱さが顧みられた。彼女は今までとても度々自分の決意が——多くはそれがどうなつてもよい事であつても——よく他から左右されて變つて行く事を考へた。自分も今こんなに李枝子の手紙に激昂して居ながら、やつぱり最後には自分の意志が従姉や叔母に左右されて了ふのではないかといふやうな危惧を感ずるのであつた。

彼女はその日すくにも宗三郎の見舞に行くつもりで居たのを、面白くないので、とう／＼行かずに済まして了ひ、後から心に責められて居た。もう李枝子の手紙の影響が、そこに働いて居たのであつた。

寢臺に近く

翌日眞佐子は昨日宗三郎を見舞はなかつた事が、ひどく濟まないやうな氣がするので、午後早々病院に尋ねて行つた。

もう五日ほど立つて居るので、宗三郎の熱も取れ、極めて順調の経過を取つて居るのであるが、眞佐子が病室に入つた時、すやくと眠つて居り、看護婦も誰も居ないので、眞佐子は獨り枕頭に置かれた椅子に腰を下し、靜かに患者の目覺めを待つた。

スヤ／＼とした宗三郎の靜かな寢息を聞き、その寢顔を守つて居る間に、あり／＼とまた彼が幼兒を助けた現場の光景が目の前に浮んで來た。それは實際貴い行爲でなくて何で有得やう。たしかに何人の感動をも贏ち得る美しい人性の發露である。そこに何の利己心も打算もないところに、嚴肅な道徳的價値がなければならぬ。……さう思ふ傍から、李枝子の手紙の文字の一行が、ハツキリとまた眞佐子の腦に描き出された。——縁も由縁もない、生きても死んでもどうでもよい、百姓の子を、貴い自分の生命を賭してまで救ふといふ事は、自重を缺いた、無反省に近いものではないか、萬一自分

が無慘の横死を遂げたとしたら、近親のものが思慮のない事をしてくれたと悔まぬものはあるまい。全くそこには自己感激のない、機械的の衝動が働いたのだといふ以外、精神的に何も無いではないか、自分の生命を無視することの眞に貴い場合はもつと深い、精神的の意義がそこに結びついた時でなければならぬ。——さう云つた文句が針のやうに眞佐子の胸元を刺した。

あゝ若し宗三郎があの時死んだとしたら、實際どうであつたらう？ として自分が若し宗三郎の親であつたとしたらどうであらう？ よもやよく死んでくれたとは云ふまい。それは全く李枝子の云つた通りの結果が、そこに表はれるに相違ない。誰もが無益に生命を捨て、了つた愚かさを内心に憐れむだらう。それは無意義に死んで了つたと同じことなのだ。それが親であり、或は友であつた、めに、同じ事をして死んだのなら、そこに始めて「精神的の意義が結びつく」譯だ。宗三郎の行爲は自重心を缺いたものと云はれても、批難する方に必らずしも無理のない氣がする。全く自己感激の伴はない、單純な機械的の衝動が働らいて、小兒を助けたのだと見られても仕方がない。自分はモ少し考へて見なければならぬ。

たゞ刹那の機械的衝動のために、自分を忘れ、血に繋がる人々を忘れ、周圍を忘れて、幼兒を救つたのだとすれば、その行ひの美しさはあつても、實際無反省無思慮との批判を受けて、それを辯解する

言葉はないであらう。

眞佐子は始め小児が助けられた際、もし今度自分が同じ場合に遭遇し、そしてそこに宗三郎が居合はしたとした時、やはり同じやうに助けられたに違ひない事を想像して、自分の感激を高潮した事を思ひ起した、それは全くその通りに違ひないと思はれる事だつた。けれども彼女はそれが逆に行つた場合を假想して見た、始めに助けられたのが小児でなくて自分であつたとした時、自分が感激の極度に達する事は素より云ふまでもない事だつた。併し自分の次に今度は小児がその通りにして助けられたとして、どんな結果が自分の心に起るだらう。自分でも百姓の子でも宗三郎には異りがなかつたのだ、同じ事だつたのだ。縁も由縁もない小児に、やはりその通りの事をするのだと知つて、自分の宗三郎に對する感激に、果して變化が起らないだらうか。

自分は裏切られたやうな感じを持たずに済むだらうか。

眞佐子の心は暗くなつた。何だか斯ういふ心持で宗三郎と顔を合はせるのが、たまらなく辛いやうな氣が仕出した。

宗三郎が眠つて居るのを幸ひ、歸つてまた出直さうか、自分はほんとにモ少し考へて見なければならぬのだと、そんな事を思ひ出して居る時、宗三郎は目を開いた。

狼狽の色がたしかに眞佐子の顔に浮んだ、

が宗三郎は心づかぬらしく、眞佐子をそこに見出した嬉しさに、まづ満腔の感謝をその眼に湛へながら、

「お、お嬢さん来て居て下さつたのですか。ちつとも知らずに轉寢をして居て失禮しました。起して下さればよかつたんですの……。」

「え、……。」と、眞佐子は沈着ぬ心を取繕ろひながら、「今來たばかりなんですの、あのお氣分はおよしい方でございませうね。」

「難有う、日増によくあります。昨日あたりから大分元氣づきました。なに外はどこも何ともないんですから……。併しお嬢さん、よくお見舞下すつて、ほんとに難有うござんす。」と、眼に涙を浮べながらいふのであつた。

眞佐子は心苦しさを覚えながら、

「まア、結構でございますわ。お傷みも取れましたか。」

「時々痛みますが、連続した痛みはなくなりました、お蔭さまで……。全くあなたのお蔭なんです。」

「いゝえ、そんな事……。」

眞佐子の何となく浮ばぬ顔色をして居る事が、すぐに宗三郎の眼についた。

「お嬢さん、昨日はどんなにお心待して居たか知れなかつたのですが……無論毎日お見舞を頂かうといふやうな事は、あまりに蟲のいゝ希望ではあります……それにも拘はらず、お待ちして居てもとうとうお見えにならなかつたものですから、どうかなすつたのぢやアないかと、恐ろしく氣にかゝつて居たんです。」

「いえ……どうもいたしませんけれども、昨日は客があつたり何かで、ごたくと用事が出来てつい出られなかつたものですから……。」と、紛らしながら眸子を外らした。

「でも何だかお顔色が悪いやうぢやアありませんか。」

「いゝえ……さうですかしら……。」と、差俯むく。

眞佐子の變つた様子が宗三郎に強い掛念を抱かせた。大怪我をした代りに、たしかに眞佐子の戀を羸得たと思つて居た彼に取つて、眞佐子の彼の視線を避けやうとするやうな態度は、彼の心を甚だしく攪亂するものだつた。眞佐子の心に何かの變化が起つたのではあるまいか——さう思ふと矢も楯もたまらないやうな氣が仕出した。

「ほんとにどうかなすつたんぢやアないんですか。私は恐ろしく心配になり出しました。」

眞佐子は亢奮しかけたやうな宗三郎の眼を見ると、自分の態度が患者に悪い刺戟を與へて居る事に心がついた。今日は兎も角も患者の心を平靜に導びく事が、自分の義務でなければならぬと思つたので、勉めて笑顔を作りながら、

「いゝえ、何でもありませんの。」と、親しみを帯びた調子に返つて、「何でもないぢやアありませんか、斯うしてお見舞にあがつた位ですもの……。」

「ほんとに何でもありませんか、それだと安心ですけれども……。」と、宗三郎の顔にはなほ不安が漂つて居た。

「何でもありませんわ。それはさうと島田さん、まだあんまりお話をなすつちやアいけないのでございませうね。」

「いえ、もう大丈夫です。今朝は院長から許されました。……併しお嬢さんはさう云つて早くお歸りになる準備をなさるんぢやアありませんか。」

「あら、そんな事はありませんわ。あなたをお案じするばかりに伺つて見たゞけぢやアありませんか。ぢやアお話をしてもいゝんでございますね。」

「どうぞ……あなたが居て下さらなければ、何だか淋しくつて仕様がないうんですから……。」

真佐子はまた眼を伏せた。

そこに暫しの沈黙が落ちた。真佐子は自分の運命がやつぱりかうして宗三郎の方に導びかれて行くのではないかと思ふと、そこにある恐怖の影が伴ふのであつた。

「今朝は西陵院の和尚が暫らく話をして行つてくれました。」と、宗三郎は沈黙を破るためにさう云つた。

「さうでございましたか。」と、真佐子は勉めて談話の緒口を引出すつもりで、「和尚さんはあなたのお小さい時を御存知でいらつしやるのですね。」

「私の腕白時代の事を知つて居て時々いためつけられますよ。」

「あなたは此前にもお國の方で、小兒の溺れるのをお助けになつた事があるんださうでございますね。」

宗三郎は真佐子にその話の知れた事を満足に思ふ様子で、

「やつぱり和尚がお饒舌をしたのですね。」

「えゝゝ……あなたは二度人の生命をお助けになつたんでございますね。」

「併し格別えらい事をしたのでも何でもありませんよ。誰でも出来る事をしたゞけですからね。」

「お國で小兒をお助けになつた時には、今度のやうな危険はなかつたんでございませう。」

「それは危険も何もありませんでした。私は游泳には可なり自信がありますから……それに大人でもあると多少危険ですが、小兒一人位を助けるのは何でもない事です。」

「それならようございますけれども……今度はほんとお生命拾ひをしたんでございますね。」

宗三郎は何となく真佐子の話がしつくり來なくつて、そこに何ものかあるやうなのを氣にしなから、

「今度は全く冒険でした。よく生命が助かつたのです。」

「ほんとにお怪我だけで済んだからよかつたやうなものゝ、萬一小兒とお生命の替事でもなすつたら、それこそ大變でございましたわ。」と、批難するやうな眸子が宗三郎を射た。

「お嬢さん、あなたは私が向ふ見ずな事をしたとお思ひになつて居らつしやるでせうね。」

「いゝえ……。」と、言葉を濁して真佐子は俯むいた。

「全く向ふ見ずをやつたのです。ひよつとしたらやられるかも知れないと思ひながら飛込んだのです。」

「ではあなたは縁も由縁もない百姓の子と、大事なあなたのお身體を取替てもいゝと思召したんでございませう。」

「ございますの。」と、眞佐子は答めるやうに宗三郎を見た。

眞佐子の美しい顔には、明らかに失望と幻滅マジユイシヨクの影が宿るのであつた。

「お嬢さん、私だつて自分の身體の大事な事は知つて居ます。また百姓の生命いのちの掛替かかひにならない事も知つて居ます。ですから確かに小兒も助け、自分も助かる餘裕があると信じた場合ならば格別、あの時は小兒を助ければ自分がやられさうだと意識したので、小兒こどもの運命は天に任せる外ないと諦らめたのです。ですけれどもお嬢さん、その同じ瞬間に偶發ぐうはつてき的に私自身よりも力強い衝動が、私にその冒険を敢てさせたのです。」

さう云つて宗三郎は意味ありけに熱心に眞佐子を見つめた。

「え？ 何でございますつて？」と、眞佐子は解しかねて宗三郎を見返した。

「お嬢さん、私が卑怯に……或は卑怯といふ詞が適切でないかも知れませんが——その小供を見放して了はうとした瞬間、その間髪を容れない際どい場合に、奇蹟的に私の視線に結びつけられたものは何だと思ひます。」

眞佐子は何とも解らぬながら、妙に胸騒むねさわぎを覺えて、

「え？」と、宗三郎を見つめた。

「それはその瞬間に始めて見た線路の向ふに立つて居らつしやつたあなたのお姿なんです。その時あなたはまだ私にお氣づきにならなかつたやうでしたが、あなたのお姿が天使のやうな神々かみ々しさを以て、そこから光明でもさすかのやうなハッキリした明るさで、私の眼を射たのです。その刹那せつなに私は異常の興奮を感ずると共に、一切を忘れて線路の中に飛込んだのです。」

眞佐子はグラ／＼とそこら中が、俄かに眩くらんで來るやうに思つた。われ知らず伸かゝるやうに寢臺べいだいの上に手を添えて、

「ではあなたは……」と、聲を震はせたが、あまりに興奮したので次の詞が出なかつた。

眞佐子の眼は燃ゆるやうに輝やいて、一杯の涙が湛たへられた。

宗三郎も同じやうに興奮しながら、發作的はつてきに眞佐子の手を取つて、

「お嬢さん、私はあなたのために線路に飛込んだのです。それはあなた御自身の御存知のないあなたの命令だつたのです。あなたのために失ふ生命いのちなら惜くないと私を感じさせたのです。」

眞佐子はその手を宗三郎に任したまゝ、

「それでは——それではあなたにこんなお怪我をさせたのは、私だつたんでございますね。」

「あの小兒こどもを救つたのは私でなくてあなたなのです。小兒の親は私でなしにあなたに感謝しなければ

ならなかつたのです。私は世間の間違つた讃辭さんじを黙つて受けて居る心苦しさと氣恥かしさに堪えませ
ん、それはみんな、お嬢さん、あなたのものなのです！」

「島田さん！ 許して下さい……私はあなたを間違つて判断しようといたしました。」

眞佐子の眼からは熱い涙が珠のやうにこぼれ落ちた。

「お嬢さん！ 眞佐子さん！ あなたは私を了解して下さいますか。」

「は、はい。」

宗三郎は力の限り眞佐子の手を握りしめた。

癒しひれるやうな陶醉たうざうが眞佐子の全身を傳はつた。

李枝子と實

病院から歸つてわが居室へ入つた眞佐子は、なほその甘い陶醉たうざうに耽つて居るかのやうに、暫らく惚おぼと机に凭れたまゝで居た。何だか自分が罪を犯したやうな惱ましさを感じながらも、そこには勝利者のやうな誇があり、李枝子を見返したやうに思へて、何とも知れぬ心地よい興奮を覺ゆるのであつた。

自分は宗三郎と戀の言葉を囁き交さなかつたけれども、自分の心は明かに宗三郎に許して了つたのだ。それを宗三郎はハッキリと感じさせて了つたのだ。

眞佐子は自分がさうして了つた事を少しも悔んでは居ない。李枝子に對しては、宗三郎が李枝子の假想かきうしたやうな、無反省な、輕卒な男でない事を、誇りを以て云ひ返してやらうとする逸はつた心で、病院を出て來たのであつたが、自分の部屋へやでいろ／＼の事をそれからそれへと考へて居る中、だんだん細心になつて行つた。自分が宗三郎と戀に落ちたと李枝子に悟られる事は、決していゝ結果を持來すものではない事を、恐れずには居られないやうになつた。で、此事は一切自分の胸に秘めて、誰に

も悟られないやうにしなければならぬと考へた。彼女は自分の戀と、宗三郎が小兒を助けた時の心理状態を、親しい友に打明けたい、燃ゆるやうな意志を押へながら、李枝子にあて、自分の心を偽つた手紙を書いた。

その手紙には、自分は現場に居合はした一時の感激に驅られて、あゝした手紙を書いたが、あとから自分の感情をあまりに誇張し過ぎた事が極りが悪くなつた。私こそ全く輕卒であつた事を悔む。あの手紙のために、あなたから思ひもよらぬ推測を受けたのはほんとに恥かしい。そんな事は決して心配しないで下さい。——とさういふ意味を書送つたのである。

李枝子がこの第二の手紙を受取つた時、丁度そこには李枝子にも從兄に當る勅使河原實が來合せて居たのである。

その手紙を受取る少し前、李枝子は眞佐子から來た第一の手紙の話をして、その手紙を實に見せたのだ。尤もそれを見せる前、内容の概略が話題に上つて居た事はいふ迄もない。李枝子が實の舊友だといふ事といふ青年について聞いた時、實はかう答へた。

「なに、それは丹波の山奥に居た時の小學校の友達でね、島田といふんだが、そのころ腕白な小兒で、己なんぞは始終虐められて居たものさ。だから今でもその男にいゝ感じは持つて居ない。何でも

田舎の低級な農學校か何かを卒業した土臭い男で、馬鹿正直が取柄な、どつちかといふと少し低能な田舎ものさ。」

李枝子は呆れたやうに、

「まア、そんな人ですの。……でも俊ちゃんに英語を教へたり何かしてるんださうですよ。」

「そりやア何も馬鹿だといふ譯ぢやアないからね。たゞ少し氣が利かないといふだけさ。」

「何にしても平凡な田舎ものね。だけでも心配なのは、眞佐さんがその男にひどく感激して居る事なのよ。まア、これを讀んでごらんさい。」

實は從妹の手紙を讀んで居る中に、次第に不安の様子が顔へ上つて來た。やがてそれを讀んで了ふと、明らかに嫉妬の色を浮べて、

「なるほどこりやア感激がひど過ぎる。現場に居合はしたとすると、初心な眞佐ちゃんがそんなに感動したといふのも強ち無理もないやうではあるが……こりやア一寸危険だぜ。」

「でせう……だから私、すぐに返事を出したのよ。それは誰にしても、その場を見て感動するのは當然だけれども、あんまりエキサイトが過ぎて、冷靜な判断を忘れてはいけない。私から見ればその人の行爲は、全く立派なものであるには相違ないけれども、若しその人が自己といふものに對するほん

との責任を考へれば、生きても死んでも世の中には大した関係のない、赤の他人の百姓の子を助けるため、自分の貴い生命を犠牲にしてまで、線路に飛込むといふのは、一面から見れば慥かに無反省な、軽卒な行動で、精神的には何の意義もないではないか、もし自分がそのため無惨の横死を遂げたとしたら、その人に親があり、相思の人でもあつたとした場合、どんな結果が後に残されますつて、まアさういふやうな意味の事を云つてあけたんですの。そして——」

實は詞を挿んで、

「いや、えらい！ その通り、無反省、軽卒とは巧い批評だ。低能だからこそそんな馬鹿な事が出来るんで、少し考へのあるものなら誰だつて、百姓の子と生命の取かへつこをしやしない。いや、李枝さん、よく云つてやつた。大出来。大出来。そして……？」

「あら、そんなに煽てちやアいやよ。だつてさうぢやアありませんか。それから私はこの手紙を見ると、何だか眞佐さんが、その方に心酔し過ぎてるのが氣になるでせう。だからかう云つてやつたわ。……さうく、あなたが感激なさるのを彼是立入つて申上る權利はないけれども、私の恐れるのはあなたの持つて居らつしやる、もつと貴いものまでその方に捧げるやうな結果が生れやしないかといふ事ですつて……。」

「ウム、ウム。」と、實は首肯いて、「いや、よく云つてやつた。李枝さんなればこそだ。僕もその手紙を読んでひどく今氣になり出したところだ。併し困つたね。こりやアお互ひに何とかして眞佐ちゃんを保護する必要がある。」

「さうよ。どんな事をしても保護してあげなければ……。でもまだ何かそこに成立つたといふんぢやアないでせうから、私の手紙で、反省して下さるだらうと思ひますわ。」

「そりやア無論成立つちやアいない。己の居る中は、テンであの男など眼中になかつたんだから……。その點は安心して居るが……。」と、云ひながらも、その實一向安心は出来て居ない様子で、「たゞ氣になるのは、その島田がね、恐ろしく眞佐ちゃんを戀して居るんだよ。」

「えッ？」と、李枝子は驚いて目を睜つた。そして少なからぬ不安に脅やかされながら、目に見えぬ相手に對する輕侮の色を浮べて、「まアいやな男だわね。でも實さん、どうしてそれを知つて？」

「例の低能だから己に打明けたのさ。そして己に取持つてくれと云ふんだよ。」

「まア、身の程も知らずに。」と、李枝子は呆れ返つたやうに憤慨しながら、「そして實さん、どう云つてやつて？」

「いくら従妹でも己にはそんな取持は出来ない。直接に當つて見たまへつて鼻であしらひながら突放

してやつたのさ。眞佐ちやんの方は大丈夫だと、その時は見ぬいて居たからね……。」

李枝子はいよく心配になり出したらしく、

「でもそんなですと、眞佐さんがこんなに感激して居るんでせう。ほんとにどんな結果が生れるかも知れないわ。」

「まさか……大丈夫だらうとは思ふけれどもね。こりやア一ツ行つて様子を見て来るかな。京都へは是非行く筈にはなつて居るんだから……。」

「ぢやア實さん、ほんとに行らつしつて見て頂戴よ。」

「ウム、明日にも出かけるとしよう。どうしても五六日手放せない事があるんだが、仕方がない、その方は放つて置いて……。」

「實さん、全體あなたにも責任があるのよ。私達はどうから實さんと眞佐さんが結婚するやうに願つて居たのに、あなたがその氣にならないんですもの……。」

「そりやアね、今までが兄妹のやうに暮して來た仲だから、改まつて一寸そんな氣になれなかつたんだが……なアに、かうなると眞佐ちやんを人には取られたくない。眞佐ちやんさへ承知してくれるなら、いつでも結婚するよ。」

「嵯峨の伯父さんはどう思つてらつしやるか知らないけども、あなたさへその氣になつて下されば、お母さんがよく眞佐さんの肚を聞いてから、伯父さんにお話をして見やうといふ事になつて居るんだわ。今年の冬は眞佐さんを東京へ呼ぶつもりなんですから……。」

「それならこの上とも李枝さんの聲援を頼む事にして、兎も角僕は嵯峨へ出かけるよ。」
「それがいゝわ。」

丁度その話をして居る時である。眞佐子から第二の手紙が届いたのは。

李枝子は封を切る間も待遠しいやうに、それを讀んで了ふと、始めて満足らしい微笑を湛へて、
「實さん、やつぱり杞憂だつたのよ。心配せずともよかつたのよ。眞佐さんもあんな手紙を書いたのが、今更極りがわるいと云つてらつしやるわ。そんな心配は無用にして下さい——讀んでごらんなさい。」

實は急がはしく目を通したが、これもほつとしたやうに、

「なるほど、まさか眞佐ちやんも馬鹿ぢやアない。己も如何に何でもあの男を戀するやうな結果にはなるまいと信じて居たんだ。これなら明日慌て、京都へ行かなくつてもいゝ、大きに助かつた。」

「さうね。大丈夫だわね、……ぢや明日は行らつしやらない？」

「一週間ほどはどうしても手放せない用事があるんだからね。それを済ましてから出かけるとしよう。どうせ島田は病院に寝てるんだからね。その間に何事もあり得やう筈はない。」

「だけでもひよつとしたら、その間が危険ぢやアなくつて？」と、李枝子は考へながら云つた。

「李枝さんは眞佐ちゃんを信じないのかへ？」

「さういふ譯ぢやアないけども……。」

女には女の本能があるものだといふ事を、實は後に思ひ當つた。

從兄妹同志の對話

花壇の菊はすがれても、重俊の身體はなか／＼休まる間はなかつた。交配の目的で、わざと後れて十一月末ごろから咲かしてある花の、花粉媒助を試むる事も、この頃の書入である外に、重なる仕事は他所の實生菊を見て歩く事であつた。全體その年の實生の菊は、遅く咲くばかりでなく、實生の花の善悪を見分けるには、是非とも末になつた花を見る必要があるので、大方十二月の中旬ごろまでも目が離せないであつた。

重俊は自分の畑の實生の出來榮を樂しむだけには飽足らず、あらゆる實生家の畑を見て廻らなければ得心が出来ないので、それと自家の出來榮を比較して見る事に無上の樂があるのであつた。で京都の内外はいふ迄もなく、野洲、草津などの多年實生菊で賣出して居る江洲の各地や、河内、大阪、泉州方面まで足を伸して見て歩くので、花壇が見る影もなくなると、重俊は日もまた足らぬやうに、忙がしげに家を留守にして、菊に憧憬歩くのであつた。

その間は眞佐子のために、この上もない機會が與へられるので、今日も父の留守といふと、氣兼ね

しに長い間病院に宗三郎を見舞ふ事が出来た。二人のために楽しい時はさうして作られた。宗三郎は日毎に痛みを忘れる時間が多くなればなるほど、退屈を感じるにつけて、真佐子の戀しさを堪え難きまでに覺ゆるのであつた。

二人は先日互ひに完全に了解し合つて以來、二人の態度は全然戀人同志の態度に移つたけれども、お互に初心な二人は、まだほんとに戀の言葉を呟きかはした事はなかつた。二人の間にはなほ臆病と謹慎とがあつた。宗三郎の方から云へば、自分の胸に安心が出来たといふ事も、急いで戀人の言質を取る必要を無くした理由の一ツでなければならなかつた。その上少しの物音にも氣の置かれる病院の中では、心ゆくまでしんみりとした話は出来ない。自分達の生涯に一番楽しい思ひ出として残る、ほんとの戀を呟きかはす日は、病院を出てからでなければならぬ——さういふ詩的な考へも期せずして二人の胸にあつた。

真佐子はその後李枝子に手紙を出したが、もう宗三郎の事については、すっかり忘れて居るかのやうに、一言も書添えなかつた。この手紙の事が李枝子から實に話されたか、またそのためかどうかは知らぬが、一週間後に立つ筈の實は、また後れて十日の後夜行で立つた。例によつて彼が乳母の家に

落ちついた事はいふまでもない。

彼は馴染の茶屋へは、今夕行くから用意をして置くやうにと命じて、午後早々嵯峨に向つた。

重俊が矢張り菊の事で午後奈良へ出かけたので、その間に真佐子は病院を見舞はうとして居るところへ實が尋ねて來たのだ。實のその中に来るといふ事は、李枝子の手紙にもあつたし、實からも葉書が來て居たので、豫期して居た事ではあつたが、今日來る事は思ひ設けなかつたので、都合がわるいとは思つたけれども、病院へ行つてから尋ねて來られるよりは仕合せだつたと思つた。

真佐子は病院に行かうとして居た事などは、嘸にも出さずに實を迎へたが、さうした場合でも、從兄が來てくれたといふ事は、素より彼女に不快を與へる性質のものではなかつた。それほどに彼女は實に對してはい、印象ほか持つて居ないのであつた。美しい笑顔で迎へられると、實はそこにいつもながらの、少しも變らぬ態度で歓迎してくれる從妹を見出したのである。

實はまづ一安心をしたばかりでなく、かうして目の前の從妹の華やかな、豊かな肉體を見ると、今までには自覺しなかつた性的快感を経験するにつけて、從妹を島田などには決してやれないと心に誓ふのであつた。今度來たのを幸ひ、機會が與へられ、ほんとの愛の言葉を替して見やうと、彼は不思議な心のときめきをさへ覺ゆるのであつた。

「實さん、紅葉はとうに無くなつて了つてよ。」と、眞佐子が咎めるやうに云ふと、

「さうだね、是非見に来る筈の京の紅葉に今年はどうく反そむいて了つた。」
 「紅葉ばかりぢやないでせう。」と、眞佐子は笑つて、「あなたの京美人もどんなにかあなたを待つてたでせうに。」

「眞佐ちゃん、己はもうそんな浮氣ものぢやアなくなつてゐるんだよ。今に眞佐ちゃんも知つて呉れる時が来るだらう。」

「そんな事信用が出来ないわ。」

「人間は眞面目まじめになる時に眞面目まじめにならなければ駄目だ。己にはその時が來たんだ。その中きつと眞佐ちゃんにも信用させて見せる。」

「まア、大變ね。ほんとですかしら……。」

「ほんとだよ、まだ笑つてる……さう信用がなくつちや困るな。だけでもほんととだけ。眞劍なんだよ。今に分るからい。……それはさうと眞佐ちゃん、島田がえらい事をやつたんださうだね。」

「え、ほんとに危なく生命いのちを拾つたところなのよ。」

「そして病院に居るんださうだが、もうよくなつて來て居るのかへ。」

「身體が達者な人なので、そんな大怪我をしても、ズン／＼よくなつて行くのよ。あと二週間もすれば退院が出来るらしいわ。」

「さうかね、一ツ見舞つてやらうと思ふが、眞佐ちゃんも見舞に行つてやつたかね。」

「え、時々……。」と、眞佐子は目を伏せた。

實は別段眞佐子の素振そぶりには心づかぬ様子で、

「李枝さんから聞いたが、眞佐ちゃんが、大變に感動した手紙を李枝さんにやつたといふぢやアないか。」と、自分がその手紙を見た事は隠して、何氣なく云つた。

「え、。」と、眞佐子は心もち顔を染めて「でもあの時はほんとに感動したんですもの、誰だつてそこに居合したら感動するわ。」

「そりやア無理もない。わけて感情の繊細デリケートな眞佐ちゃんだからね。」

「いやよ。」

「併し、どうしてそこに居合はしたんだへ。一緒に居た譯ぢやアないだらう。」

「え、偶然通り合はした。けで、島田さんが飛込んで怪我をした時に始めて島田さんだと知つたのよ。」

「島田の方でも眞佐ちやんの居た事は知らなかつたんかへ。」

眞佐子はその瞬間注意深く實を見たが、實が何もそこに疑を持つたらしい様子はないので澄し拂つて、

「え、そりやアさうだわ。」

「併し島田も馬鹿な事をしたもんぢやアないか。自分が死んだらどうするつもりなんだ。百姓の子供が汽車に轢れて死んだつて、それがどうなるんだね。自己に對する責任感を持つて居る男なら、もつと自重しなければならぬ筈だ。全く無反省で、輕卒な、精神的に全く無意義な行爲ぢやアないか。」

眞佐ちやんはどう思ふ？」

實は李枝子に云はれた通りの事を云つた。

眞佐子は黙つて輕蔑むやうに従兄の顔を見た。

「眞佐ちやん、怒つたのかへ。」

「怒りやアしないわ。李枝さんからも、あなたのやうな事を云つて來たわ。私、一時の感情から書いてあけた言葉尻を捕まへられるのは迷惑だわ。……私、何も精神的に深い意義があるやうに辯護した覚えはなかつてよ。それでい、でせう。實さん。」

「ウム、それなら畢竟同意見だね。」

「だけでも實さん、何も島田さんの行爲を冷笑する事はないわ。人を助けるといふ事はどんな場合にも美しい事です。實さんにそんな事出來て？」

「己はそんな馬鹿な事はしない。併しそれが百姓の子供でなくて、眞佐ちやんだつたら、きつと飛込んで見せる。」

「あなたが！」と、態と可愛い目を睜つて、「ぢや、先にお禮を云つて置いてよ。ほ、。」

「眞佐ちやんは己を信用しないのかね。己は眞佐ちやんのためならどんな事でもする男なんだ。」と、實は妙に眞劍になつて眞佐子を見つめた。

眞佐子は従兄の視線に出逢ふと、何か不安を感じたが、すぐ眼を外して、

「ぢや、私、心強く思つてるわ。」と、軽い調子で云つた、相異らず冗談にしてつた。實は飽足らず思ひながら、

「それはさうと眞佐ちやん、紅葉はなくなつても、風がない靜かな日だから、嵐山の方へ散歩して來やうぢやアないか。そして歸りに一寸島田を見舞つてやらう。」

「え、さうしてもい、わ。」と、眞佐子は従兄と一緒に病院を見舞ひたくはないが、それを拒む理由

もないので、快よく同意を與へた。

二人はすぐに連立つて嵐山の方へ出かけた。

病院にて

従兄妹同志は渡月橋の方から千鳥ヶ淵のあたりまでを散歩して引返して来た。その間實は機會を作らうとして、二人がよく連立つてこの邊へ来た少年時代の思ひ出を語り出し、感傷的に話を導びいて行つて、その間にちよい／＼自分の意志を仄めかさうとしたが、眞佐子は始終心と心の間に或間隔を置いて、打解けては居ながらも、びつたりとついて來ないので、實はとう／＼打込んで行く隙を見出せずに、不本意ながら引返さなければならなかつたのだ。

實は眞佐子に自分の心を通はせる事が、案外豫期したやうに容易くは運べない事を知ると、従妹に對する戀心はいやましに募つて行つた。どうしても従妹を手に入れなければならぬと思ふと、何とも云へない焦燥をすら感じた。こんなに従妹を戀しく思はうとは、今まで思ひもよらぬ事だつた。それなのに従妹の方では、ただ従前の兄妹のやうな態度を取つて居るだけで、少しもそれより進まうとしない。實の心を見抜て、それより進む事を許すまいとして居るらしくも、實には取れるのである。それはどうした事だらう？ 自分に對して従妹の戀を喚覺す事は出來ないだらうか。従妹は自分を戀

してはくれないだらうか。……實は構はず思ひ切つて打明けて見やうと思つては、臆病になつた。従妹に對してこんな臆病にならうとは思ひもよらぬ事だつた。従妹が自分の戀を斥けるやうな事はあ
るまいと豫想されながらも、そこに少なからぬ不安の影があつた。

さういふ煮え切らぬ、いら／＼した状態のまゝで、實はこの好機會を空しく逸して了つたのである。何も今日に限つた事ではない——さう思つて實は自から慰める外なかつた。

その間眞佐子も云知れぬ不安を感じて居たのである。その不安から逃れるために彼女は歸りを急いだ。

「ね、歸りませうよ。……これから一寸病院によつて、すぐ歸りませうよ。」

甘へるやうに、二三度眞佐子にかう云はれると、實はいつまでも従妹を引留めて居る事は出来なかつたのである。

二人は連立つて嵐山から引返して來た。

病院に來て宗三郎の病室を見舞ふと、思ひがけぬ實の訪問に、驚きながらも喜んで、

「お、勅使河原さんですか。お嬢さんもよくお出下さいました。いつお出になつたんです。」

「今朝ついたんです。えらい怪我をしたさうで、併し生命に別條がなくつて結構でした。」

「考へると少し無謀な事をやりました。……がまづこの分ぢやア跛足にもならず濟むでせう。どうぞおかけなすつて下さい。お嬢さん、恐れ入りますが、その椅子を勅使河原さんに……。」

「いゝです。」と、實は、一脚を眞佐子に與へ、自分は今出て行つた看護婦の椅子を引よせてそれに腰を下した。

「この二三日如何でございますの。」と、眞佐子は澄した顔をして他人行儀に尋ねた。

「難有う……もう殆んど痛みを感じません。」

「併し君、痛かつたでせうね。大腿骨が折れたんださうぢやアありませんか。」

「えゝ、併し幸ひに全骨傷でなく、三分ほど残つて折れたんで、斜折傷なんですが、いゝ工合に、折れた部分も粉碎せずに、綺麗に折れて居たさうで、非常に治療が仕易かつたんです。で普通全骨傷なら、餘程経過がよくつても、六七週間は動かす事が出来ないうですが、僕のは大抵五週間以内に退院が出来るらしいです。あと十日もすれば出られるだらうと思ひます。」

「はゝア、そりやア好都合でしたね。然し痛かつたでせうね。何か板でもあて、居るんですか。」

「そりやア二三日の痛さは随分辛棒が出来ないほどでした。義布斯繃帯をやつて居るんですがね。それは義布斯粉——石膏のやうなものです。それを湯に解いて脱脂綿に塗つたものを、すつかり患部

に巻いてその上をまたその義布粉を塗つた繻帯で、幾重にも巻いてあるんです。それがカチ／＼に固まつて居ますからね、腿の周圍はセメントで塗固めたやうになつて居るんです。」

「は、ア、そんな事をしてあるんですか。患部が動かないやうに、さうしてあるんですな。」

「さうです。……今痛みは時々感ずる位ですか、たゞ難儀なのは、身體を動かさずに寢て居ますから、少し床ずれが出来てる事です。こいつが一番苦痛です。幸ひにまだ尊瘡を起して居る譯ぢやアありませんが、身體の虚弱なものが、骨折の治療中に尊瘡に犯されるとよく肺や何かをやられるさうですが、僕は智慧がない代り頑健ですからね。毛頭さういふ心配はないから呑氣です。」と、宗三郎は心地よげに笑つて見せた。

「まア、結構ですな。併し瘦せましたね。」

「え、大分瘦せました。」

「お國の方から、誰か看護に見えてるんですか。」

「なアに、誰も来て居やしません。此前お話し、たやうな事情で、國を出て来たもんですから、負傷の事も知らせずに置いて貰つたんですが、西陵院の和尚が放つても置けないからつて、その中にそつと知らしたもんですから、此間一寸兄が出て来ましたよ。併しすぐ歸りました。」

「では看病は看護婦きりだつたんですか。」

「さうです。併しお嬢さんが御親切に始終お世話をして下さいますから、少しも不自由はありませんでしたよ。僕がこんなに早くよくなつたのも、全くお嬢さんのお蔭です。」

眞佐子はハツと思ふと目顔で合圖をしたのだつたが及ばなかつた。さうしてかう云はれて了ふと、われ知らず赧らめた顔を慌て、實から反けやうとした。併しそれも及ばなかつた。

實は目早くそれを認めると、恐ろしい嫉妬と想像が彼の胸に渦巻起つた。がすぐ何氣なく紛らしながら、

「あ、さうですか。それやア好都合でした。」

眞佐子は観念したやうに、すぐ冷靜を粧ほつてあらぬ方を見つめて居た。

宗三郎は自分の不用意の言葉が、二人の心にどんな渦巻を起したかも知らずに、至極上機嫌で、「ほんとにお嬢さんにはお禮の言葉もないんです。」

「そんな事仰しやつて頂いちやア困りますわ。何もお世話といふお世話を申したんぢやアありませんのに……。」と、咎めるやうな目つきをした。

宗三郎はもう眞佐子の事は云出さなかつた。

談話はそれから暫らく他の方面に轉じて行つたが、十分ばかりすると、實は従妹を見返つて、
 「眞佐ちゃん、さア歸らうかね。島田君、僕はまだ居るからいづれまたお尋ねします。」
 さう云殘して、實は眞佐子と共に病院を出た。

外へ出ると、實は強ひて險しくなつた自分の心を制へながら、何氣ない調子を作つて、半冗談のやうに半答めるやうに、

「眞佐ちゃん始終島田の世話をしてやつて居たんぢやアないかね。」
 併しそれは眞佐子の胸に針のやうに刺つた。

「え、そりや入院なすつた當座、誰も世話をしてあける人がないんですから、お世話をしてあげましたわ。お父さんもさうしてあけるやうにと仰しやいましたから……。だつてお氣の毒ぢやアありませんか。實さん、それが悪くつて？」と、眞佐子は居直つたやうな調子で云つた。さう云はれると、實の方は却つて弱味が出て、

「なにも悪いと云つた譯ぢやアないぢやアないか。あは、と、笑ひに紛らせて、「眞佐ちゃん、怒つた？」

「そりやア私だつて怒るわよ。あなたが變に取つて居らつしやるから……。」

「悪かつた。許してくれたまへ。」

眞佐子は黙つてズン／＼歩き出した。

實は後から追ふやうにして、

「眞佐ちゃん、勘忍してくれない？」

「私の心を傷けるやうな事を仰しやらなければ……。」

「一切云はない。思つても居やしない。」

「ぢや勘忍してあけるわよ。」と、眞佐子は莞爾美くしい笑顔を従兄に見せた。

實はやつぱり自分がよくない疑を従妹にかけたのかと思つた。その點において眞佐子の本能は巧みに働いたと云つてよい。併し……併し……實の嫉妬心は、邪推は、さうして緩和された後から、すぐまた頭を擡げ始めた。これは従妹から探り出さうとしてはいけない。若し二人の間に何かあるとすれば、宗三郎からなら手もなく自白させられる事だ。自分は明日そつと病院を尋ねて見やう。さう考へて獨りにやりと笑つた。

實の畏

實は翌日の朝睡い眼をこらへて、いつになく早起しながら、そこ／＼に朝飯を済まして嵐山行の電車に乗込み、嵯峨で降りると、眞佐子方には向はずに、その足で病院を尋ねた。彼が慌てたやうにその朝を擇んだのは、眞佐子に先廻はりをされて、島田に警告を與へられた後では、何も聞出す事が出来なくなると考へたからである。

病室を訪づれると、島田はやゝ意外に感じながらも快よく彼を迎へた。

「おゝ、勅使河原さん、よくまたお尋ね下さいました。」

「少しお聞きしたい事があるので、また出て来ました。……どうです、お気分は？」

「ます／＼いゝ方です。昨夜は三輪田さんへお泊りだつたんですか。」

「いや、昨夜は京都へ歸りました。今朝また出て来たんです。」

「さうですか。三輪田さんへは今朝お寄りになつていらつしたんですか。」

「いや、まだ寄らないです、停車場へ降りるとすぐ来たんですから……。」

「さうですか。併し何ですか、お聞きになりたいと仰しやるのは？」と、宗三郎は氣の善い笑顔^{おもて}を實に向けた。

「實はね、今或る創作で苦心中なんです。昨夜ふとその中の人物に大怪我をさせて見たらと、昨日君のお話を伺がつた事から暗示^{ジスト}を得て思ひついたんです。足を一本折つてやらうと思ふんで、昨日の御説明だけではまだ不充分でもあり、うか／＼お聞きした點もありますから、負傷當時の感想から、手當の方法などをなほ一應詳しく御説明を願ひたいのです。」

「あゝ、さうですか、それはお易い御用です。それぢや僕自身の經驗をまづお話ししませう。」

さう云ひながら彼は仔細らしく手帳を取出して、ノートを取るべく構ひ込むのであつた。

宗三郎が語り始めると、實はちよい／＼質問を挿んでは手帳に書留めた。併し實のほんとの目的はそこにはないので、その方はいゝ加減に切上げて、だん／＼話を要點^{えうてん}の方に移して行つた。

「誰も君のお身寄の方は看護に見えなかつたんですね。」

「いつぞやお話したやうな事情で國を出て来たもんですから、國の方へは知らせなかつたのです。」

「え、真佐子さんには殆んど看護婦以上にお世話になりました。」

「毎日のやうに來て居つたのでせう。」

「殆んど毎日來て下さいました。真佐子さんの御親切は、全く感謝の言葉もありません。」と、いつか涙ぐみながら云つた。

「まア、結構でした。」

自分の推測のまさしく適中した事を思ふと、烈しい嫉妬の外に、宗三郎に對する深い憎惡を感じるのであつたが、強ひて平靜を粧ひ笑顔を作つてつけ加へた。

「それに島田君、昨日あれから真佐子がすっかり自白しましたよ。」

「何をです？」と、宗三郎は胸騒ぎを覺えながら、自から禁ずることの出来ない笑顔を作つて空惚けた。

「何をと云つて、君達は戀を仕合つてるんぢやアないですか。君も僕には報告の義務がある筈でせう。」

宗三郎は初心らしく顔を赤めて、

「真佐子さんは、あなたに僕の事をどう云つたんです。」

「それは實にお安くはないんで……僕は憤慨せずには居られないですよ。第一真佐子は君を崇拜して居ます。君は大怪我をした代りに、すっかり真佐子を征服して了つたんです。」

「そんな事はありませんよ。」と、嬉しさを包み兼ねる様子で、「真佐子さんを征服するなんて語弊があります。それは全くあべこべで、征服されて居るのは、僕の方なんですからね。」

「戀愛事件が成立つて居る以上どつちでも同じ事でせう。僕は君のために盡力する事にお約束までして居るのに、僕に一言の挨拶もないなどは、甚だしく不都合ぢやアありませんか。」と、實は笑ひながら云つた。

「いや、どうも恐縮です。」と、いよく悦に入つて、「併し勅使河原さん、戀愛といふやうな繊細な問題は、相手の心を確と掴むまでは、ちつとも安心の出來ない事ですから、まだあなたに御報告するまでには運びにくかつたんです。決して御好意を忘れて居る譯ぢやアありませんから、この上ともよろしく御助勢を願ひます。」

「併し最早僕の助力を要しないまでに進捗してゐるんぢやアありませんか。君の所謂相手の心をもうちやんと掴んで了つたのでせう。どうです。」と、實は内心のむしやくしやを辛く制へて云つた。

「さア、僕には……そこまではまだ分らないんですよ。あは、と笑つたが、もう自信があると

いふやうな緯々たる餘裕を見せながら「全體眞佐子さんはあなたにどう告白したんです。」

「そりやア女だから、さう露骨には告白しませんかね、併し君と戀に落ちた事をちつとも否定しないんです。僕は君のためにも従妹のためにも祝福します。君達はまだ結婚の話はしないんですか。」

「さうですか。」と、宗三郎はさも満足らしく、「まだ結婚の話をする機会はないんですが、たゞお父さんが承諾して下さるかどうか、その點が僕には氣遣はれます。あなたはどうかお考へですか。」

「さア……眞佐子の決心次第でどうにでもなるでせうよ。」

「さうでせうか。僕は眞佐子さんと結婚が出来なければ、一生妻を持たぬ決心を極めて居るんです。」

「ウム、恐ろしい執心ですね。」と、宗三郎の顔を見たが、實際その決心の閃めいて居る眼を見ると、ぎよつとしながら、「併し眞佐子にもその通りの決心があると、君は信じて居ますか。」

「眞佐子さんにその決心を求めつもりです。」

「萬一事情が君との結婚を許さないで、従妹が他人と結婚したとしたら、君は眞佐子を許しますか。」宗三郎の眸子は奇しく輝やいて、

「僕は眞佐子さんも、その男も決して許さないでせう。」

實は異様の戦慄を覚えながら、

「併し眞佐子はまだ君に結婚の約束は與へて居ないでせう。」

宗三郎は不安に捕へられ始めたらしく、

「勅使河原さん、あなたはなぜそんな事を仰しやつて、僕の平和な心に波立たせやうとなさるんです。少しでも眞佐子さんを疑ふやうな心をなぜ僕に起させやうとなさるんです。それは僕の堪えられないことです。飽くまでも眞佐子さんを信じて居る僕の心を、傷つけるやうな事はどうか仰しやらないで下さい。」

宗三郎の深い執念を知り、同時に自分の言葉の一ツが彼の心にどんな波紋を起させたかを知ると、實は或恐怖の豫感に脅やかされると同時に、宗三郎を苦しめる最上の武器を自分が握つて居る事を思ふ一種の満足を自覺せずには居られなかつた。

彼は何氣なく粧ほひながら、

「いや、これは悪い事を云つた。許してくれ玉へ。何も君を傷つけるつもりで云つたんぢやアないですよ。」

「それは僕も分つてます。分つてながらつい神経的になつて了ふもんですから……併し勅使河原さ

ん、眞佐子さんは實際結婚を承諾して下さいませんかどうでせう。」と、心配さうに尋ねた。
實は突放すやうに、

「それは君の腕一ツですよ。」

宗三郎は黙つて苦笑した。この場合「腕一ツ」といふやうな、不眞面目な、野卑の感じのする言葉を使はれたことが、彼には少からず不快なのであつた。

實は腕時計を見て、

「いや、こりやア長々お邪魔をしてつた。僕は君の成功を祝福してお暇することにしませう。」

「まア、いゝでせう。勅使河原さん、この先僕の力に及ばない場合には、どうか然るべく御盡力を願ひます。」と、宗三郎はなほ實に繼らうとするのであつた。

「いや、出来るだけの事はしますよ。」

さう云残して實は病室を去らうとしたが、扉際ドアぎはから何か思ひ出したやうに引返して來ると、

「島田君、僕は今日午後早々他に約束があるので、三輪田に寄らずに歸りますがね、こゝまで來て寄らなかつた事が知れると、都合のわるい事があるんで……特に君に願ひして置きますが、僕のお尋ねして來た事は、眞佐子に内緒ないしょにして置いて下さい。いゝですか。」

「承知しました。」

「きつとですよ。」と、實みのるは念を押して宗三郎と分れた。

誓ひ

併し宗三郎の口留をしてもそれは何の役にも立たなかつた。三輪田方の女中が使に出た途中で、實の病院を出る後姿をちらと見て了つたのである。

女中が歸つて来て見ると、豫期して居た實の姿が見えないので、真佐子に尋ねた。

「お嬢様、東京の若旦那様は、お越しになつてやしまへんのどすか。」

「いゝえ、なぜ？」

「でも先刻病院を出るお姿が、東京の若旦那様に違ひおへんやうにお見受しましたさかいに……。」

「さう？」と、真佐子は眉をよせて、「可怪しいわね。それなら今に見えるかも知れないわ。」

「でももう大分になりますのに、どこぞへまたお寄りやしたのどやろか。」

「氣紛れやさんだから、どこぞへまた引つかつてゐるのかも知れない。」

話はこれだけで済んだが、十二時過になつても實の姿が見えないので、實が寄らずに京都へ歸つた事が明らかになつた。が、ひよつともし女中が見違へたのかも知れないと思ふので、真佐子は女中に

念を押して見たが、たしかに實に相違ないと保證するのであつた。

さう云はれると真佐子の胸に不安の念が湧き始めた。昨日自分が突放して了つたのになほ邪推を抱いて宗三郎から何か聞出すためではなかつたらうかと思ふと、宗三郎がうっかり二人の秘密を打明けて了つた場合を想像して、氣が氣ではなかつた。

で、真佐子は父が畑の方に屈托して居るのを幸ひに、女中には一寸出て来るからと云置いて、そのまま、病院に出かけた。

看護婦は何かの用事がなければ、傍へ寄りつかないやうになつ居るので、所在なさに、宗三郎は本を讀むか、短歌を作るかして退屈な日を送るにつけ、たゞ人戀しさに堪えない中にも、真佐子の訪問を何よりも待焦れるのであつた。娘の身として真佐子の出にくい事や、來ても長く居られない事情は明らかに分つて居ながら、真佐子の來ない日は父に知られて一人の間を堰きとめられたのではないかと悲觀し、真佐子が早歸りをする場合には、また女の心を損ねたのではないかと取越苦勞に惱まされるのであつた。宗三郎のこのごろに咏む短歌は、熱烈な戀の禮讃と、同時に戀の苦痛を歌つたもので、真佐子の來るたびにそれを讀んで聞かせて居たのである。

今日は實の歸つた後で、實の言葉が何か不吉の前兆であるやうに思はれ、真佐子が萬一結婚を承諾

しない場合を想像すると居た、まれないやうに苦しくなるので、今日若し眞佐子が来れば、思ひ切つて結婚の事を打出して見やうと思案して居るところへ、眞佐子が見えたのでこの上もない満足と共に、包むにあまる嬉しさを笑顔に見せて、

「お、眞佐子さん、よく来て下さいました。今日はどうかとお案じして居たところですよ。」

眞佐子は恋人同志らしい馴々しい態度で宗三郎の枕元に席を占めると、媚めかしく、

「今日は如何ですか？」

「もう何ともありません。今朝も院長があと一週間位で退院が出来たらうと云つてくれました。」

「まア、よござんすこと！ そんなに早く退院が出来たらねえ。」

「でもさうなつたら、病院のやうにあなたがお寺へ来て下さらないでせうね。」

「い、え、上りますわ。こゝへ来る事を思つたら何でもありませんもの……。」

「さうですか。きつと来て下さるでせうね。」

「え、上りますわ。……それはさうと島田さん、今朝實さんがお尋ねしましたか。」

宗三郎はハツと當惑しながら、

「いえ、勅使河原さんは……。」と、曖昧に濁して、「併しなんですか。」

「家の女中が病院を出る實さんの姿を見たと申しますから……。それなら家へ寄るだらうと待つて居たんですけれども、とう／＼来ませんでしたから、それでお尋ねして見たのです。」

宗三郎は女中に發見されて居るのでは仕方がないと思ふので、

「いや、實はお尋ねになつたんです。午後早々約束があるので、三輪田へはよらずにこのまゝ、歸る。」

併しこゝまで来ながら寄らずに歸つた事が知れると工合がわるいから、内緒にして置いてくれと仰しやつてお歸りになつたんです。」

「まア、さうですか。實さんがそつとあなたをお尋ねして行つたんですね。」と、眞佐子の顔色は變つた。

「え、さうです、併し……。」と、宗三郎はなぜ眞佐子が色を變へたのか、譯は分らぬながら心配になり出して、相手の様子を偷み見るやうにして言葉を切つた。

「實さんは何でまたわざ／＼あなたをお尋ねしたんですの？」

「今執筆中の創作に骨折傷を取扱つて見たいといふので、僕の負傷當時の模様や、手當の方法などを詳しく聞取つて、手帳へ書留てお歸りになつたのです。」

眞佐子はさう聞くとほつと安心したやうに、

「まア、それでお尋ねしたんですか。……それならよござんすけどもその外のお話は何にもなさらなかったのですか。」

「え、……それから暫らく話して行かれました。」

「どんなお話をなさいましたの？」と、また真佐子は氣になり出したやうに尋ねた。

「え、その……。」と、宗三郎が極り悪さうに躊躇する様子を見ると、

「仰しやつて頂戴、私、氣になるんですから……。」

「勅使河原さんはあなたが何もかも告白なすつたと仰しやいました。」

「えッ？」と、真佐子の顔色は見る／＼蒼ざめて、「實さんはそんな事を云ひましたの？ 嘘です、それは嘘を云つたのです、あなたを釣出するために嘘を云つたのです。島田さん、きつとさうだつたんでせう。」

島田は驚ろきに打たれたが、同時に真佐子の興奮した、自分を咎めるやうな様子を見ると、不安と掛念に襲はれて、

「え、そ、それが……。」と、啞つて居ると、

「島田さん、従兄は昨日あれから私にいろ／＼の事を聞出さうとするので、私はあなたと私の間に何

にもない事を、従兄に信じさせるためどんなに氣を遣つたと思召します、それにあなたはうか／＼……。」

真佐子は涙ぐんで言葉を切りながら、怨むやうに男を見ると、宗三郎は内心少なからず狼狽で、

「ではあなたが自白をなすつたといふ事は、私を釣出するための作り事だつたのですか。」

「え、それに極つてますわ。それであなたは何もかも仰しやつてお了ひになりましたの？」

宗三郎はおづ／＼しながら、

「でも私は勅使河原さんの言葉を信じたものですから……。」

「云つてお了ひなすつたのですわね。」と、太い溜息を吐いて真佐子は俯むいた。

宗三郎はその様子を見ると、何とも云へぬほど心配になり出して、

「併し勅使河原さんに知れてなぜ悪いんですか。勅使河原さんは私達に好意を持つて居て下さるでせうから、別に……。」

真佐子は遮ぎつて、

「あなたは従兄があなたと私との間柄あひだがらに好意を持つて居ると、お信じになつて居らつしやるんですか。」

宗三郎は呆れたやうに、

「充分好意を持つて居らつしやるんぢやアありませんか。あなたはさうお考ひにならないんですか。」

眞佐子はハッキリそれを説明する事は出来ないので、齒痒さうに宗三郎を見たが、

「あなたはどうして實さんが好意を持つて居るとお信じになるのです。」

「それでも勅使河原さんは慥かに私に好意を持つておいで。なぜなら此前お目にかゝつた時……。」

かう云ひさして宗三郎は躊躇した。

「この前お逢ひになつた時？」

「實は……一寸工合がわるいですが……。」と、顔を赤くして、「僕のあなたに對する感情を洞察して、僕とあなたの間、きつと盡力するからと仰しやつて下さいましたし、また今朝も私のために祝福すると喜んで下さつたのですから……。」

眞佐子は驚きながら、

「この前從兄はあなたにそんな事を申しましたの？」

「え、……併し眞佐子さん、勅使河原さんが私達の間柄を知つた、め、それから何か悪い結果が生れるとお案じになるのですか。」

「え、何だかさういふ氣がしますわ。……第一從兄に知れると、それからまた東京の叔母の方にも知れ、父にも知れる事を覺悟しなければなりませんもの……。」と、また溜息を吐いた。

「お父さんは私達の間柄を承認して下さいませんか。」

「それは時機を見て私から願へば、許してくれるだらうと思つて居るのですけども、その前に知れると工合がわるいんですから……。」

「いつその際私からお父さんにお願をして見たらどうでせう。併し僕のやうなものにあなたを下さるかどうか、その點が非常に心配ですが……。」

「父はあなたを信用して居ますし、園藝に熱中して居るんですから、これから相談相手が出来て、却つて喜ぶだらうと思ひますわ。」

「さうでせうか。」と、勇氣を得たらしく、「それではお父さんさへお許し下されば、あなたは私のやうなものでも、結婚して下さいませんか。」

「え、。」と、眞佐子は流石に顔を染めて俯むいた。

「併し萬一お父さんが御承諾なさらなかつた時はどうです。」

眞佐子は俯むいたまゝ、答がない。

「お父さんがお許し下さらなければ、私と結婚して下さる事は出来ないんですか。」
 「ですけども、きつと父を承諾させますから……。」

「真佐子さん、私はあなたが結婚して下さると、下さらないとに拘はらず、あなたの外には決して妻を持たぬと決心して居るのです。私は死んでもこの決心は變へません。真佐子さん、あなたも誓つて下さいませんか。」と、宗三郎は真佐子の手を取つてその眼を見つめた。

宗三郎の燃ゆるやうな眼を見ると、真佐子は脅えたやうに黙つて俯むいた。

「え、真佐子さん、その誓をして下さる事は出来ませんか。」

宗三郎は女に力づけるやうに、女の手をきつと力強く握りしめた。真佐子は電氣に打たれたやうに、

「私、私も外に良人は持ちません。」と、幽ながらも聲を震はして答へた。

宗三郎は涙を一杯湛へて、

「真佐子さん、私は満足です。あなたのその約束を聞けば、このまゝ、死んでも厭ひません。私は將來どんな事しても、きつとあなたを幸福にします。あなたの幸福のためには、必ずあらゆる努力を試みます。あゝ、真佐子さん、私の幸福を察して下さい。私は全世界が光明に充ちて居るやうに感じます。」

さうです、あなたの愛は私の光明です。糧です。私の全生涯をこれからあなたの幸福のために捧げます。真佐子さん、決して私を見捨てないで下さい。」

真佐子の身體に痲痺するやうな戦慄と感激が傳はつた。

「その代り真佐子さん、二人の間の約束は神聖です。もしあなたが約束に反いた場合は決してあなたを許しません。その時にはあなたの上にも私の上にも一様にたゞ破滅があるのみです。それが私達の運命だと覺悟して居らつしつて下さい。」

「えゝ。」と、僅かに答へて、真佐子は再び戦慄した。

悲しい影

實はその晩京都で自暴遊びをして、その翌日東京へ歸つた。眞佐子のところへは東京から端書が届いたので、實がすぐ東京へ歸つたのだと知ると、それがまた心配の種になり出した。叔母や李枝子の耳へ、すぐ自分の事が入るに違ひなく、何かこのまゝ無事には濟みさうもない不安に脅やかされるのである。

早く父の承諾を得て了ふのが何よりだとは思ひながら、空しく機會を待つて居る中、六七日はそのまゝ過ぎて了つた。この間眞佐子は間を見ては病院を見舞つて、果敢ない戀を楽しんで居たが、宗三郎がいよく退院するといふ日、思ひがけなく突然李枝子の母が下つて來た。眞佐子は悪い折に叔母が來たと思ふばかりではなく、何か叔母の來たのは、きつと自分に關係した事のやうに直覺されるのであつた。

宗三郎は午後退院する筈なので、眞佐子は兎も角父の許を得て病院に行き、宗三郎を西陵院に見送つた上、今日は手傳の人々もあるので、何を話す間もなく引返して來た、歸つて來て見ると思ひな

しか父の自分に對する態度が、どこか變つて居るやうに感じられるので、自分の留守の間に、叔母と父の間に何かの話のあつた事が想像されると共に、恐ろしい掛念がますます胸に喰入るのであつた。

併し父からも叔母からも何の話もなくその日は暮れた。たゞ夜に入つて叔母から、眞佐子を當分東京へ呼びよせて置きたく、李枝子も結婚前暫らく眞佐子と同棲して居たい希望なので、それを父親に相談に來たのだといふ話があつた。一月早々眞佐子が東京に行くことは兼ねての約束なので、別にそれに深い意味があるのではあるまいとも取れぬではないが、眞佐子の胸には、當分宗三郎から遠ざけるため、急にさういふ相談が行はれたらしく察せられるので、彼女の心は俄かに暗くなつた。併しそれに反對する理由もなければ、今反對すると内兜を見透かされると思ふので、取あへず喜んで東京に行くやうに叔母には答へて置いた。

叔母はその翌日京都に半日ほどを過して一先嵯峨に歸つて來たが、その日の夜行で慌たしく東京に歸つて行つた。

その夜眞佐子は父の部屋に呼びよせられたので、きつとその事に違ひないと覺悟を極めながら、父の前へ來て跪くと、父は改まつた調子で、

戀を裏切る女 悲しい影

「眞佐、外でもないがの……俺はお前を信じて居つたから、比較的お前に自由を與へて居たのぢやが、お前はその自由を濫用するやうな事をして居りはせんかの。」

眞佐子は顔を染めて俯むいたまゝ、頓には答へも出なかつた。

「どうぢや、結婚前の大事な身體ぢや……その結婚とても俺の承諾なしに出来んことは知つて居る筈ぢやの。」

「は、はい。」

「またお前も俺の承認する結婚でなければせんといふ事も、この前俺に誓つてくれたの。」

「はい。……ですけれどもお父様は私の意志も尊重すると仰しやつて下さいました。」

「それは云ふた。……云ふたに違ひない。併しまづ俺の意志を尊重して貰はねばならぬ事も云ふてある筈ぢや。」

「……………」

「そこでお前はあの島田と愛し合つて居るといふのは事實か。」

「は、はい……………」

「さうか、やはり事實ぢやつたのか」と、太い息を吐いて、「俺があんまり島田を近づけ過ぎたのは一

生の過失ぢや。併し島田と何か約束をしたやうな事はあるまいの。」

「……………」

「どうぢや、黙つて居つては分らん。」

「お父様、どうぞ島田さんと結婚さして戴きたうございます。」と、眞佐子は思ひ込んだ調子で云つた。

父は困惑の眉を擧めながらも嚴そかに、

「いや、それはならん。……併しお前はそんな約束でもしたといふのか。」

「はい。」と、俯むいたまゝ答へた。

「さういふ約束をする前に、なせ父の承諾を求めんか。また島田にしても未丁年のお前にさういふ約束を求めるといふのは怪しからん。まづ俺に申込むのが順序で、俺の承諾のない限り、假令お前がどんな約束を與へても無効である位の道理は知つて居る筈ぢや。」

「ですけれども島田さんも私もお父様にお願する機會を待つて居たところなんでございます。」

「お前達が勝手に約束して了つたからと云つて、俺がそれを承認する理由にはならんぞ。お前は無論父が承諾すればといふ事を條件としたのぢやらうの。」

「……………」

「どうぢやの。」

「私はお父様が承知して下さると信じて、お約束をして丁つたんでございます。でもなせ島田さんとの結婚をお許し下さらないんでございます。」と、懸命になつた娘の顔は蒼ざめて居た。

「俺も多少人に知られた三輪田重俊ぢや、俺の大事の娘をやるには人物を見立てなければならん。第一多寡が田舎の農學校を出た位の島田に、この先末の見込みもなければ、お前を養つて行く事さへ容易な事ではあるまい。そんなものにお前を任す事がどうして出来ると思ふ。」

「でもお父様、履歴などより人格が第一だと、平生仰しやつていらつしやつたぢやア有りませんか。私は何も生活の餘裕のあるところへ嫁つて、贅澤をしたくない事はございません。どうにでもして生きて行く事さへ出来れば、それでいゝと思ふんでございますから、どうぞ島田さんとの結婚をお許し遊ばして……。島田さんならば、お父様の園藝のお手助をする事も出来て、これから私達は幸福な田園生活を営む事が出来るんでございますもの……。」

「それはなるほど島田が居れば、俺にはどんなに手助になるかも知れぬ。併し俺の掣を取るのではなから、俺の都合を考へて、お前の一生を過るやうな處置を取る事は斷じて出来ん。お前もよう考へ

て見い。島田は正直もので、人を二度まで助けたといふ立派な行爲はして居るが、それかと云つてどんな技能があるといふ事もない。のらくらして歌でも作つて居るが關の山で、社會に立つて活動して行くだけの働きがある青年とは思はれない。俺はお前の將來を案ずるから許さんのぢや。」

眞佐子は父の風向がこんな變らうとは思ひもよらなかつた。叔母に何か云はれるまでは、父は島田に對して、もつと好意を持つて居た筈だと思ふと、何だか悔しいやうな物悲しい思ひで胸が一杯になつて來た。

「でも私の幸福を思つて下さるならば……。」

「お前の幸福を思ふから許さんのぢや。今にお前はそれがよう分つて來る。」

「ではどうあつてもお許し下さる事は……。」

「出來ん。」

眞佐子はたまり兼ねたやうにそこに、泣伏した。

重俊と宗三郎

その夜眞佐子は床に入つても、殆んど眠ることが出来なかつた。その間にも不思議に自分には諦がつかぬでもないやうな氣もすが、宗三郎がどんなに失望するかと思ふと、氣の毒でたまらないやうな心持の方が先に立つた。どうかして宗三郎を慰め勵まさうと思ふと、途方にくれるばかりだつた。

翌朝眞佐子は再び父の居室へ呼よせられた。

「どうぢや、眞佐、決心はついたぢやらうの。俺は今から西陵院に行つて島田に逢ふて来るつもりぢやが……。」

眞佐子ははつと胸を突かれて、

「ではお父様がお断りにいらつしやるんでございますか」

「さうぢや、誤解のないやうによく話して来るつもりぢや。お前は得心が出来たのぢやらうの。」

眞佐子は一生の大事だと思ふので、モ一度父に懇願すべく、

「お父様は島田さんに末の見込みかないから、許さないと仰しやるんでございますか。」
 「まア、それも一ツの理由ぢや。俺は島田に好意は持つて居るが、お前の婚にするには、あの男では不足ぢや。」

「でも末の見込みがないと、どうしてお極めになるんでございますの。」

「島田が今のやうな生活をして居ては、末の見込みがないといふのぢや。俺は一定の職業がなくて、ぶら／＼して居るものが嫌ひぢや。」

さう聞くと、眞佐子は勇氣づけられたやうに、

「ぢや島田さんが一定の職業を持つたらよろしいではございませんか。」

「定職があればそれでいゝといふものでもない。職業を持つて居る事も必要ぢやが、その職に離れても一本立の出来る、確りした手腕のある男でなくては困る。島田はその點においては全く未成品同様ぢやから、どれほど辛棒強い男か、どれほど働ける男か、そんな點がとんと分らぬ。ぢやから今のところお前を許す事は出来んといふのぢや。」

「それなら二年でも三年でも島田さんの様子を見て下すつて、その上でお許し下されば——。」
 父は遮つて、

「男はどうでもよいが、女といふものはそんな事で婚期を失したら、取返しがつかん事になる。後の事は後の事として、差當りお前の身體は自由にして置かなければならん。……分つたか。」

眞佐子は父の意見は昨夜に比して緩和されて居るやうにも思つて、そこに多少の希望の光りを認めるのであつた。

「どうぢや、得心がいつたの。」

「はい……」と、幽に答へて「ですけれどもお父様、島田さんのところへお父様がわざわざお越にならなくても、どうか私を一度だけやつて下さいまし。お願ひでございます。私からよく島田さんの得心の行くやうに申上げてまゐりますから……。」

「いや、それはいかん。俺からでないと却つて間違が起る。お前はもう島田に逢ふ必要はない。島田には一切お前に近づかんやうにして貰ふ。……併し案ずるには及はん。俺は島田の友人として、充分の好意を以てそれを求めるのぢやから……。」

眞佐子は氣が、りではあるが、この上に争ふことは出来なかつた。

重俊はすぐ西陵院に出かけて行つた。

西陵院に行つて見ると、和尚が檀家廻りに出かけた留守だつたのは、却つて好都合だつた。

「島田さん、居るかの。」と、案内なしに島田の部屋へ入つて行くと、島田は古びた籐の長椅子の上に、なほ繻帶をした足を投出して、寝ころびながら本を讀んで居たが、重俊と知ると慌てたやうに半身を起して、

「お、三輪田さんでございますか。」

「いや、そのまゝ寢て居るがい。退院が出来て結構ぢやの。どうぢやね、工合は？」

「いろ／＼御厄介になりましたが、お蔭で退院が出来ました。工合は大分よろしうございます。松葉杖で歩くには仔細はありませんが、門前や庭廻りは兎に角、歩けるに任して無理をしてはいかんと誠められて居るものですから、まだお禮にもあがりません。」

「そんな心遣ひをするには及ばん、歩けても當分は用心するがよからう。」

「はい、和尚は生憎今朝から出かけたやうですが……。」

「いや、今日はあんに用事があつて來たのぢや。」

「あ、さうでございますか。」と、まさか自分と眞佐子の上とは知らずに、重俊の顔を見守つた。

「この老人が折入つての願ひぢやがの……。俺はあんたの友人で、あんたにはどこまでも好意を持つて居る事は知つて居らるゝ通りぢや。今日も好意を持つて居ればこそわざわざ出て來たのぢやが、實